

# 多様化が進む教室のメディア環境と教師のメディア選択

— 2014, 2015 年度「教師のメディア利用と意識に関する調査」結果から —

メディア研究部 宇治橋 祐之

## 要 約

電子黒板やタブレット端末などの新しい機器が全国の教室に入りつつある。その画面にはデジタル教科書やNHKの教育サービスNHK for Schoolをはじめとするインターネットのコンテンツが映し出され、教師や子どもたちに日々利用されている。2010年度以後、加速化する「教育の情報化」は教室の姿や授業の進め方を確実に変えつつある。

NHK放送文化研究所ではこうした教室の姿をとらえるため、教師を対象としたメディア利用と意識についての調査を2013年度から実施している。これは1950年から2012年まで60年余にわたって全国の「学校」を対象として定期的を実施してきた「学校放送利用状況調査」を、「教師」を対象として調査の方法・内容を新たにしたものである。変容する教育現場のニーズをよりの確・詳細に把握して、今後の教育サービスのあり方のデータを得ることを目的としている。

本稿は、既発表の小学校教師（2014年度）と中学校教師（2015年度）の調査結果を新たな視点で分析した報告である。小学校教師、中学校教師それぞれについて、年代や担当学年・教科という属性による分析と、「デジタル機器に対する意識」と「授業を進める考え方」という意識による分析を行い、さらに小学校教師と中学校教師のメディア利用と意識の比較を行った。

分析からみえてきたことは、同じ小学校教師、中学校教師でも、担当している学年や教科によってメディアの利用の仕方は多岐にわたるということである。授業で扱う内容にあわせて必要なメディアを選択して利用しているのである。また年代による利用の差もみられた。全体に若い年代ではネットワーク型のいつでもどこでも使えるメディア教材の利用が多く、年配の教師ではパッケージ型で、ネットワークに依存せず安心して利用できる教材の利用が多いという傾向がみられた。

さまざまなメディアが利用できる一方、利用にあたっては事前の準備と機器やソフトウェアに対する知識も求められる環境の中、教師たちがどのようにメディアを教育に活かしていこうとしているのかをみていく。

## 目 次

はじめに .....	204	6. 小学校教師と中学校教師の メディア利用状況の比較 .....	265
1. 「教育の情報化」をめぐる動向 .....	206	7. 授業でのメディア利用の実態 .....	272
2. 2010年代のNHK教育サービスの取り組み .....	212	8. まとめ～今後の教育現場で メディアを活かすために～ .....	277
3. 「NHK教師のメディア利用と 意識に関する調査」の特徴 .....	218	おわりに .....	279
4. 属性や意識でみる〈小学校教師〉の メディア利用 .....	221		
5. 属性や意識でみる〈中学校教師〉の メディア利用 .....	249		

# はじめに

NHK放送文化研究所ではNHKの学校教育サービスのあり方を検討する際の基本データを  
得る目的で、2013年度から幼稚園、小学校、  
中学校の「教師のメディア利用と意識に関する  
調査」を実施している。この調査は1950年  
から2012年まで60年余にわたって全国の「学  
校」を対象として定期的  
に実施してきた「学校  
放送利用状況調査」を、  
変容する教育現場の  
ニーズをよりの確・  
詳細に把握して、時  
代に即したNHKの学  
校教育サービス展開  
を図るデータを  
得られるように、「教  
師」を対象として調  
査の方法・内容を  
新たにしたものである<sup>1)</sup>。

調査対象は2013年度、2014年度は全国の  
小学校の各学年（1～6年）担当の教師、2015  
年度は幼稚園の全体概況がわかる担当者  
と若手保育者、そして中学校の理科  
担当教師と社会科担当教師である。  
各年度の調査結果は表1の『放送  
研究と調査』に発表、NHK放送文化  
研究所のウェブサイト  
で全文を公開している。

本稿では、小学校教師（2014年度）と中  
学校教師（2015年度）の調査結果  
を中心に、デジタル教科書や  
タブレット端末などの新しい  
メディアの整備が進む  
学校現場で、どのよ  
うな意識をもつ教  
師が、どのように  
教室でメディアを

利用し、どのような期待をもっているのかを  
みていく。教師の属性を基に既発表の  
データを再分析するとともに、小  
学校教師と中学校教師の比較、そ  
してメディアを利用している教師の  
授業事例も交えて、多様化が進む  
教育現場のメディア環境と教師の  
意識を分析し、メディアを教育に  
利用する効果とその課題は何かを  
考察する。

第1章では2010年度から加  
速度化している「教育の情  
報化」の動向について整理する。

ICT（Information and Communication  
Technology 情報通信技術）の  
授業での活用が進められる中、  
「教室への大型提示装置の導  
入」、「児童・生徒の情報  
端末の活用」、「教師のICT  
指導力育成」などに関わる  
審議会の報告などを基に、  
その方向性を確認する。

第2章では授業でもっとも  
よく利用されている教育サ  
ービス、NHK for School  
の近年の取り組みを紹  
介する。

第3章では、第1章、第2  
章で示した状況の下で  
実施されたNHK放送文化  
研究所の「教師のメディア  
利用と意識に関する調査」  
の特徴を整理する。教師  
のメディア利用状況に  
関するいくつかの調査  
の概況を示した上で、  
NHK放送文化研究所  
の調査の特徴をみて  
いく。

第4章と第5章の教師  
の属性によるメディア  
利用の分析が本稿の  
中心部分である。

表1 教師調査の発表誌一覧

調査年度	対象	タイトル	『放送研究と調査』
2013	小学校（全学年）	メディア変革期にみる教師のメディア利用 ～2013年度「NHK小学校教師のメディア利用に関する調査」から～	2014年6月号
2014	小学校（全学年）	進む多様化と新しいメディアへの期待 ～2014年度「NHK小学校教師のメディア利用と意識に関する調査」から～	2015年6月号
2015	中学校（理科担当教師、 社会科担当教師）	理科を中心に広がる中学校でのメディア利用 ～2015年度「NHK中学校教師のメディア利用と意識に関する調査」から～	2016年6月号
2015	幼稚園（代表者、若手 保育者）	幼児教育におけるメディアの可能性を考える ～2015年度 幼稚園におけるメディア利用と意識に関する調査を中心に～	2016年7月号

第4章では、2014年度「NHK小学校教師のメディア利用と意識に関する調査」の結果を基に、教師の属性と意識によるメディア利用の特徴を整理する。

まず、担当学年（低学年、中学年、高学年）、年代（20代、30代、40代、50代）という属性で分析を行う。その上で「デジタル機器に対する意識」と「授業を進める考え方」についての教師の意識の違いによるメディア利用の実態をみていく。

第5章では2015年度「NHK中学校教師のメディア利用と意識に関する調査」の結果を基に、教師の属性と意識によるメディア利用の特徴を整理する。

担当教科（理科、社会科）、年代（20代、30代、40代、50代）という属性による分析と、小学校教師と同様に「デジタル機器に対する意識」と「授業を進める考え方」の違いによるメディア利用の実態をみていく。

第6章は、実施年度は異なるが、小学校教師調査（2014年度）と中学校教師調査（2015年度）で共通している質問項目の比較から、小学校と中学校の教師のメディア利用で共通すること、学校種により異なることを考察する。具体的には、「教室のメディア環境」、「教師の利用しているメディア教材」、「児童・生徒に利用させているメディア機器」、「今後の授業で利用したい

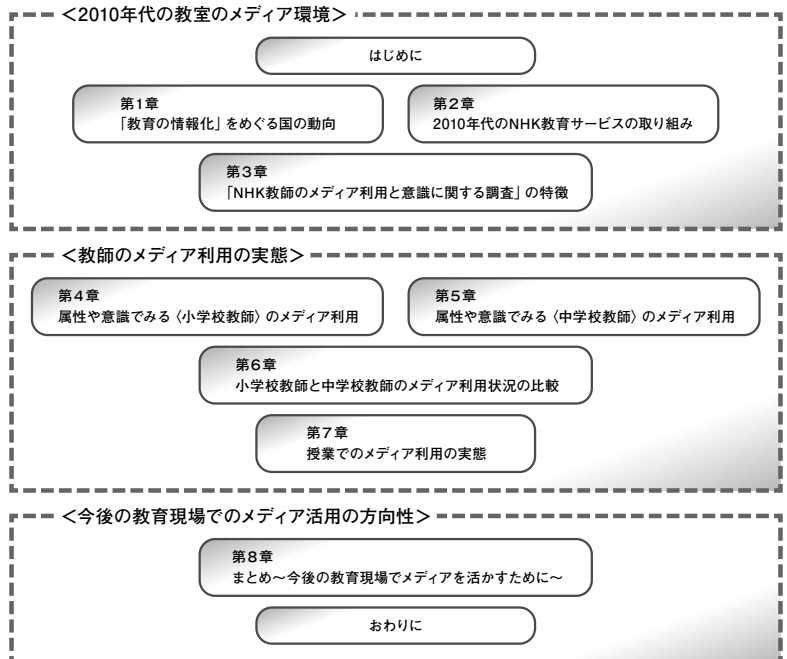
メディア」の4項目で比較する。

第7章は第4章から第6章で示したメディアを利用した授業が実際にどのように行われているかの事例をみる。メディア利用経験の少ない若い教員の事例や、放送番組利用経験は長いですが、ICT機器に対する経験は少ないベテラン教員の事例などを具体的にみていく。

第8章はまとめとして、今後の教育現場でメディアを活かすためにどうすればよいか、その展望と課題を、学校現場、教育サービスの提供者、教育メディア研究者の3つの立場から考察する。

表2は以上に示した本稿の構成を図示したものである。第1章から第3章で「2010年代の教室のメディア環境」の全体像を示し、第4章から第7章で「教師のメディア利用の実態」を分析、第8章で「今後の教育現場でのメディア活用の方向性」を示す。

表2 本稿の構成



# 1 「教育の情報化」をめぐる動向

第1章では教室のメディア環境をめぐる全体状況を確認するために、2010年代の「教育の情報化」についての動向を整理する。表3に示すように、この時期、文部科学省はさまざまな答申、報告を次々に発表し、「教育の情報化」の方向性を示している。

こうした方針を基に、パソコン、電子黒板、タブレット端末などのICT機器の整備や、教員のICT活用指導力の向上に向けた取り組み、そして、先進的な事例研究が各地の学校現場で行われている。

## 1-1 「教育の情報化」の方針

2010年代から文部科学省では教育の情報化についての検討会や有識者会議を設置し、答申を発表している。

その端緒となるのが2010年10月に公開された「教育の情報化に関する手引」<sup>2)</sup>である。この手引きは2008年度に告示された学習指導要領に対応したもので、教育の情報化に関する具体的な取り組みを紹介している。

この手引き以前には1989年の学習指導要領の告示にあわせて、「情報教育に関する手引」(1990年7月)、1998年の学習指導要領の告示にあわせて「情報教育の実践と学校の情報化～新・情報教育に関する手引～」(2002年6月)が作成されてきている。これらと比べると「教育の情報化に関する手引」はタイトルが「情報教育」から「教育の情報化」とされ、構成も新学習指導要領における「情報教育」や「教

科指導におけるICT活用」、「校務の情報化」についての具体的な進め方とともに、その実現に必要な「教員のICT活用指導力の向上」、「学校におけるICT環境整備」、そして「特別支援教育における教育の情報化」について取り上げている点などで内容の広がりが見られる。さらに、こうした教育の情報化に関わる取り組み全体をサポートする教育委員会・学校の推進体制についても解説している。

同じ2010年の4月には、今後の学校教育(初等中等教育段階)の情報化に関する総合的な推進方策について検討を行う「学校教育の情報化に関する懇談会」<sup>3)</sup>が設置されている。設立趣旨には「社会の情報化の急速な進展に伴い、ICTを最大限活用した21世紀にふさわしい学校づくりが求められている。」という現状にあたり、「今後の学校教育(初等中等教育段階)の情報化に関する総合的な推進方策について有識者等との意見交換等を行うため」同懇談会を設置するとある。

この懇談会で2010年8月に「教育の情報化ビジョン(骨子)」を取りまとめ、ワーキンググループを設置しさらなる検討を進めた上で、2011年4月に「教育の情報化ビジョン」<sup>4)</sup>が発表された。

「教育の情報化ビジョン」では「21世紀にふさわしい学び・学校と教育の情報化の果たす役割」として「情報通信技術を活用して、一斉指導による学び(一斉学習)」に加え、「子どもたち一人一人の能力や特性に応じた学び(個別学習)」、「子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び(協働学習)」を推進するとしている。

そのために、「情報教育(子どもたちの情報活用能力の育成)」、「教科指導における情報通

表3 教育の情報化に関する方針 2010～2016年

	政府の方針	文部科学省の方針	検討会・有識者会議
2010		・「教育の情報化に関する手引」(10/29)	・学校教育の情報化に関する懇談会(平成22年4月～平成23年4月)
2011		・教育の情報化ビジョン(4/28)	
2012			
2013	・日本再興戦略-JAPAN is BACK-(6/14閣議決定) ・世界最先端IT国家創造宣言(6/14閣議決定) ・第二期教育振興基本計画(6/14閣議決定, 2013年度～2017年度対象)		
2014	・「日本再興戦略」改訂2014—未来への挑戦—(6/24) ・世界最先端IT国家創造宣言(6/24改訂)	・「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会」報告書(中間まとめ)(8/29)	・ICTを活用した教育の推進に関する懇談会(平成26年4月～8月) ・先導的な教育体制構築事業推進協議会(平成26年12月～)
2015	・「日本再興戦略」改訂2015—未来への投資・生産性革命—(6/30) ・世界最先端IT国家創造宣言(6/30改訂)		・「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議(平成27年5月～)
2016	・日本再興戦略2016—第4次産業革命に向けて—(6/2閣議決定) ・世界最先端IT国家創造宣言(5/20改訂) ・ニッポン一億総活躍プラン(6/2)	・「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議(中間まとめ)(6/16) ・「2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」最終まとめ(7/28) ・教育の情報化加速化プラン～ICTを活用した「次世代の学校・地域」の創生～(7/29)	・2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会(平成28年2月～7月) ・小学校段階における論理的思考力や創造性、問題解決能力等の育成とプログラミング教育に関する有識者会議(平成28年5月～6月) ・学校におけるICT環境整備の在り方に関する有識者会議(平成28年11月～)

信技術の活用(情報通信技術を効果的に活用した分かりやすく深まる授業の実現等)、「校務の情報化(情報通信技術を活用した教職員の情報共有によるきめ細かな指導。校務負担の軽減)」という3つの側面からの方針を示した。こうした方針のもと、後述する「学びのイノベーション事業」などの実証事業が進められていった。

2013年度には、こうした動きが国の戦略に位置づけられ、6月14日に3つの宣言、計画が閣議決定される。

1つ目の「日本再興戦略-JAPAN is BACK」<sup>5)</sup>では「4. 世界最高水準のIT社会の実現 ⑥ 産業競争力の源泉となるハイレベルなIT人材の育成・確保」で「ITやデータを活用して新た

なイノベーションを生み出すことのできるハイレベルなIT人材の育成・確保を推進すること、そのために、「ITを活用した21世紀型スキルの修得」が掲げられている。

2つ目の「世界最先端IT国家創造宣言」<sup>6)</sup>では、「IV. 利活用の裾野拡大を推進するための基盤の強化 1. 人材育成・教育」として、「(1) 教育環境自体のIT化 学校の高速ブロードバンド接続, 1人1台の情報端末配備, 電子黒板や無線 LAN 環境の整備, デジタル教科書・教材の活用等, 初等教育段階から教育環境自体のIT化を進め, 児童生徒等の学力の向上とITリテラシーの向上を図る。」としている。

この2つについては、2014年、2015年、2016年と改訂が加えられているが、基本的な方向は

変わっていない。

3つ目の「第二期教育振興基本計画」(2013年度～2017年度対象)<sup>7)</sup>では、「基本施策25」で、「良好で質の高い学びを実現する教育環境の整備」として「教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数3.6, 教材整備指針に基づく電子黒板・実物投影機の整備, 超高速インターネット接続率及び無線LAN整備率100%, 校務用コンピュータ教員1人1台の整備を目指すとともに, 地方公共団体に対し, 教育クラウドの導入やICT支援員・学校CIOの配置を促す。」とより具体的な計画を示している。

こうした動きの中, 文部科学省は2014年4月に「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会」<sup>8)</sup>を設置し, 同年8月に「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会 報告書(中間まとめ)」を公表する。

この懇談会は、「学びのイノベーション事業」が2013年度末に一区切りを迎えたこととあわせて, 第二期教育振興基本計画(2013年度～2017年度対象)の対象である2017年度末までを視野に入れた施策を整理したものである。

そして, 2016年2月に「2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」<sup>9)</sup>が設置される。これは、「教育の情報化に向けた当面の施策の検討を行うとともに, 第三期教育振興基本計画(2018年度～2022年度対象)も視野に入れ」たもので, 具体的には「一人一台タブレット環境」と「堅牢な校務支援システム環境」によるデータの効果的活用を通じて, 個に応じた学習指導と学級・学校経営を支援する「スマートスクール」(仮称)構想に向けた方策」などを扱うとされた。

この懇談会が2016年7月に「2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会 最終まと

め」を公表するとともに, 懇談会の議論を基に「教育の情報化加速化プラン～ICTを活用した「次世代の学校・地域」の創生～」<sup>10)</sup>が策定された。同プランでは, 「2020年代の「次世代の学校・地域」におけるICT活用のビジョン等の提示」として, 「教員自身が授業内容や子供の姿に応じて自在にICTを活用しながら授業設計を行えるよう, 児童生徒一人一台の教育用コンピュータ環境の実現を目指し, 段階的な整備を行う。」を掲げ, 授業・学習面や校務面での具体的な施策が示されている。

こうした教育の情報化に関わるさまざまな答申と並行して, 2015年5月に「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議<sup>11)</sup>が設置されている。検討会議は「教育における情報化の進展や, アクティブ・ラーニング等の主体的な学習の必要性の高まり, その他デジタル教科書・教材の位置付けの検討に関する各種提言等を踏まえ, いわゆる「デジタル教科書」の位置付け及びこれに関連する教科書制度の在り方について専門的な検討を行うこと」を目的としている。

2016年6月に公表された中間まとめでは, 「デジタル教科書に関する基本的な考え方」として, デジタル教科書のあり方や導入のあり方を整理した上で, 「デジタル教科書の導入に伴う関係制度の方向性」や「デジタル教科書を取り巻く環境の整備」を示している。

2010年代以後, 教育の情報化という動きが進む中, 機器やネットワーク環境の整備, ICTを活用した授業設計だけでなく, 学校教育の重要な柱である教科書を今後どうしていくのかという点にまで議論は広がってきている。

## 1-2 ICT 機器やメディア環境の整備について

1-1で示したような施策が進められる中、教育現場のICT環境はどうなっているのだろうか。

文部科学省では、「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」<sup>12)</sup>として、毎年3月1日現在の「学校におけるICT環境の整備状況」を公開している。この調査は全国の公立学校（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校）を対象に実施されるものである。

2015年度の「学校における主なICT環境の整備状況（速報値）」（2016年10月）の結果概要は下記のとおりである。

- ①教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数 6.2人  
（参考）教育用コンピュータのうちタブレット型コンピュータ台数 253,755台
- ②普通教室の校内LAN整備率 87.7%  
（参考）普通教室の無線LAN整備率 26.1%
- ③超高速インターネット接続率（30Mbps以上） 84.2%  
（参考）超高速インターネット接続率（100Mbps以上） 38.4%
- ④電子黒板の整備状況（総台数） 102,156台  
（参考）普通教室の電子黒板整備率 21.9%
- ⑤教員の校務用コンピュータ整備率 116.1%
- ⑥校務支援システム整備率 83.4%  
（参考）統合型校務支援システム整備率 43.2%

この調査は2004年度から実施されており、その推移も公開されている。例えば「教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数」は2004年度の8.1人が2015年度は6.2人となっているが、その伸びはあまり大きくない。

こうした機器や環境の整備については、第二期教育振興基本計画（2013-2017年度）では以下の目標が掲げられている。

- 教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数 3.6人
- ①コンピュータ教室 40台
- ②各普通教室 1台、特別教室 6台
- ③設置場所を限定しない可動式コンピュータ 40台
- 電子黒板・実物投影機の整備（1学級当たり1台）
- 超高速インターネット接続率及び無線LAN整備率 100%
- 校務用コンピュータ 教員1人 1台

2015年度の調査結果と比べてみると、教員の校務用コンピュータ1人1台の目標は達成されているが、他の項目については未達である。

これらの機器の整備に関する予算は「教育のIT化に向けた環境整備4か年計画（2014～2017年度）」に基づき、2017年度まで単年度約1,678億円（4年間総額約6,712億円）の地方財政措置が講じられている。しかし、この予算は各地方団体で措置することが必要で、措置をしている自治体と、していない自治体間の整備状況に差があるのが現状である。

文部科学省では2016年8月、各都道府県教育委員会教育長と各指定都市教育委員会教育長に「教育情報化の推進に対応した教育環境の整備充実について（通知）」<sup>13)</sup>を行っているが、目標とする環境整備の達成はまだ道半ばであるといえる。

## 1-3 「教員のICT活用指導力」について

機器の整備とあわせて、教員がこうしたICT機器を活用した指導ができるのかも重要な課題である。

先に取り上げた文部科学省の「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」では、「教員のICT活用指導力」も公表されている。

これは、5つの大項目、18の小項目からなる「教員のICT活用指導力チェックリスト」<sup>14)</sup>を基に教員が4段階評価を行い、「わりにできる」もしくは「ややできる」と回答した教員の合計の割合を算出したものである。

調査開始時の2007年度と2015年度の結果は以下のとおりである。

- A：教材研究・指導の準備・評価などにICTを活用する能力（69.4%→83.2%）
- B：授業中にICTを活用して指導する能力（52.6%→73.5%）
- C：児童のICT活用を指導する能力（56.3%→66.2%）
- D：情報モラルなどを指導する能力（62.7%→78.9%）
- E：校務にICTを活用する能力（61.8%→79.4%）

全体として、ICT活用指導力は向上しており、特に、「（教師が）授業中にICTを活用して指導する能力」は高くなっているといえるが、「児童のICT活用を指導する能力」はあまり増加していない。

また、同調査では「平成27年度中にICT活用指導力の各項目に関する研修を受講した教員の割合」も示しているが、その割合は「受講

した38.3%（335,298人）」に対して「受講していない61.7%（539,167人）」であり、受講は4割弱にとどまっている。

教員の情報活用指導力については向上してきたといえるものの、研修を十分に受講できていないようである。

## 1-4 先進的な取り組みについて

以上のような施策とあわせて、表4に示すように、文部科学省は、全国各地で教育の情報化に関する実証研究を行っている。

2011年の「教育の情報化ビジョン」の公開とあわせて、2011年度から3年間実施されたのが、「学びのイノベーション事業」<sup>15)</sup>である。この事業では、全国の小学校（10校）、中学校（8校）、特別支援学校（2校）で、「1人1台の情報端末、電子黒板、無線LAN等が整備された環境の下で、ICTを活用して子供たちが主体的に学習する「新しい学び」を創造するための実証研究」が実施された。

報告書では下記の7点がまとめられている。

1. 小中学校のICT活用に関する取組
2. 特別支援学校のICT活用に関する取組
3. ICTを活用した指導方法の開発  
～様々な指導方法、指導の展開例～
4. ICTを活用した教育の効果
5. ICT活用の留意事項
6. 学習者用デジタル教科書・教材の開発
7. 今後の推進方策

この報告書は図表や写真も多用され、特に、学習場面を「一斉指導による学び（一斉学習）」、「子供たち一人一人の能力や特性に応じた学び（個別学習）」、「子供たち同士が教えあ



表4 教育の情報化に関する実証研究（文部科学省）2011～2016年

	実証研究	対象校・地域	テーマ
2011	学びのイノベーション事業（平成23年度～25年度）	全国の小学校、中学校、特別支援学校 計20校	1人1台の情報端末、電子黒板、無線LAN等が整備された環境の下で、ICTを活用して子供たちが主体的に学習する「新しい学び」を創造するための実証研究
2012			
2013			
2014	ICTを活用した教育の推進に資する実証事業（平成26年度）	テーマ1 小中学校 計7校 テーマ2 小中学校 計7校 テーマ3 9地域	テーマ1「ICTを活用した教育効果の検証方法の開発」 テーマ2「ICTの活用が最適な指導方法の開発」 テーマ3「教員のICT活用指導力向上方法の開発」
2015	ICTを活用した教育推進自治体応援事業（平成27年度～28年度）	指導力パワーアップコース 8地域 ICT活用実践コース 25地域	教員養成課程を有する大学と連携した研修プログラムの策定（指導力パワーアップコース）、ICTを活用した学びの実践体制の構築を図るためのモデルカリキュラムの策定（ICT活用実践コース）
2016			

い学び合う協働的な学び（協働学習）」の3つに整理した上で10の類型を示し、42のICTを活用した学習場面を掲載している（図1）。

実証研究校では、公開研究会が数多く開催され、多くの参観者を集めるとともに、NHKをはじめとするニュースや放送番組<sup>16)</sup>、新聞など

図1 「一斉学習」「個別学習」「協働学習」それぞれの指導方法のポイント

A 一斉学習			B 個別学習			C 協働学習	
<p>抽籤や写真等を拡大・縮小、画面への書き込み等を利用して分かりやすく説明することにより、子供たちの興味・関心を高めることが可能となる。</p>			<p>デジタル教材などの活用により、自らのペースについて深く調べることや、自分に合った進捗で学習することが容易となる。また、一人一人の学習履歴を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築することが可能となる。</p>			<p>タブレットPCや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校との交流学習において子供同士による意見交換、発表などお互いを高めあう学びを通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能となる。</p>	
<p>A1 教員による教材の提示</p>  <p>画像の拡大提示や書き込み、音声、動画などの活用</p>			<p>B1 個に応じる学習</p>  <p>一人一人の習熟の程度に応じた学習</p>		<p>B2 調査活動</p>  <p>インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による記録</p>	<p>C1 発表や話し合い</p>  <p>グループや学級全体での発表・話し合い</p>	<p>C2 各層での意見整理</p>  <p>複数の意見・考えを輪替して整理</p>
<p>B3 思考を深める学習</p>  <p>シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習</p>			<p>B4 表調・制作</p>  <p>マルチメディアを用いた資料、作品の制作</p>		<p>B5 家庭学習</p>  <p>情報端末の持ち帰りによる家庭学習</p>	<p>C3 協働制作</p>  <p>グループでの分担、配役による作品の制作</p>	<p>C4 学校の壁を越えた学習</p>  <p>遠隔地や海外の学校等との交流授業</p>

『学びのイノベーション事業報告書』（2014文部科学省）

にも取り上げられた。また、文部科学省の報告書だけでなく、各学校が成果報告を一般書としても販売し<sup>17)</sup>、今後の取り組みの方向性を示している。

学びのイノベーション事業が2013年度末で一段落した後、2014年度は「ICTを活用した教育の推進に資する実証事業」<sup>18)</sup>が実施されている。

この事業では下記の3つのテーマを基に、実証校・地域で研究が行われた。

- ・テーマ1「ICTを活用した教育効果の検証方法の開発」(小・中学校 計7校)
- ・テーマ2「ICTの活用が最適な指導方法の開発」(小・中学校 計16校)
- ・テーマ3「教員のICT活用指導力向上方法の開発」(9地域)

さらに2015年度から2016年度は「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」<sup>19)</sup>が行われている。テーマは次の2つである。

- ・教員養成課程を有する大学と連携した研修プログラムの策定(指導力パワーアップコース)(8地域)
- ・ICTを活用した学びの実践体制の構築を図るためのモデルカリキュラムの策定(ICT活用実践コース)(25地域)

こうした事業には、小中学校の教員だけでなく、大学等の研究者、教育委員会等の行政機関も参加しており、年々研究が深まってきているといえる。1つの授業での取り組み、1つの学校の取り組みの調査研究から、年間のカリキュラムを通じた取り組み、自治体全体での取り組みの調査研究という形での広がりもみられる。

ここまで、「教育の情報化」についての国の動向をみてきた。文部科学省を中心にさまざまな提言やプランがされていること、教師が1人1台のパソコンを校務で利用できる環境が整っていること、教員のICT活用指導力が全般に伸びていることが確認できた。

その一方で、次々に提言されている背景には、教師の校務用コンピュータ以外、メディア環境の整備が進んでいないこと、教師のICT活用は進んでいるが、児童・生徒のICT活用はあまり進んでいない現状があると考えられる。また、メディア環境が整備されていても実際に教師が日々の授業でどのように利用しているかは明らかでない。

第4章以後で詳述するが、NHK放送文化研究所では「教師のメディア利用と意識に関する調査」を継続的に実施することで、より詳細に教師のメディア利用の実態と意識を明らかにして、今後の課題を明確にしようとしている。

2015年度現在で全国の自治体数1,967、小学校数20,601、中学校数10,484、小学校教員数417,152人、中学校教員数253,704人<sup>20)</sup>という規模を考えると、教育を変容させていく取り組みは一定の時間が必要なものであり、継続的、俯瞰的にその動向をとらえていくことが必要であると考えられる。

## 2 2010年代のNHK教育サービスの取り組み

第1章でみてきたように「教育の情報化」が進められる中、NHKでも2010年代からさまざまな取り組みを始めている。特に2011年に学校放送番組、デジタル教材、さまざまなイベン

トなどNHKの学校向け教育サービスをNHK for Schoolという名称で統一して括り、ポータルサイトを構築して、多様なサービスの展開を始めている。

第2章では小学校や中学校の授業でよく利用されているNHK学校放送番組やウェブサイトNHK for Schoolの取り組みと、NHKの教員向け研修などの試みをみる。

## 2-1 NHK学校放送番組の取り組み

NHK学校放送番組はラジオ開始時から80年以上、テレビ開始時から60年以上の歴史をもつ。その時々々の教育界の動きや教師から寄せられる声、放送教育研究会等での意見、そしてNHK放送文化研究所で実施の調査結果などを基に、制作を進めている。

2010年以後の新番組を表5に示したが、多い時には10シリーズの新番組を制作、放送している。近年の学校放送番組の特徴を3点にまとめてみる。

1点目はこれまで年間15分×20本が基本だった小学校向け学校放送番組を、原則として年間10分×20本として、一部の教科については半年で10分×10本シリーズとしたことである。

これは、小学校高学年を中心に各教科で教える内容が増えていることや、教師の一斉指導だけでなく、児童の話し合いなど協働する場面の必要性が増えてきたことがあり、45分の授業の中で15分の番組よりも短い映像に対するニーズが高まってきたという背景がある。2010年度の学習指導要領の改定を機に順次、新番組の10分化が進められている。

2点目は、番組が、必要な学習項目を網羅し

て知識を定着させる内容から、導入としての利用を考え、オープンエンド形式で終わらせる内容のシリーズに変わってきていることである。これは、インターネットで動画クリップを見せられる環境が増え、例えば理科の実験結果などのまとめとして利用する映像はクリップで確認できるので、番組は子どもたちの意欲・関心を高めて最後に疑問を投げかける形式で終わらせる演出方法がとりやすくなった背景があるためである。その結果、番組の長さを15分から10分に短くすることも可能になったといえる。

3点目は、番組の生視聴や録画する機会を確保するために、同じ番組を、曜日や時間帯をかえて週内に2度放送、翌週にも放送して、計4回程度の放送を基本としてきた編成を、週に1度、翌週の同時時間帯にもう1度放送する2回放送の編成に移行したことである。結果として、番組のシリーズ総数を増やすことが可能になり、2016年度の小学校向け番組シリーズは38で過去最多である。さらに10分の番組を半年間放送する編成とあいまって、これまであまり番組化されてこなかった音楽、図工、技術・家庭科、体育などの実技教科の番組を放送するようになった。

こうした10分化、オープンエンド、番組総数の増加などが、他のメディア教材と比較してNHK学校放送番組に多くの利用者を集めている要因と考えられる。

## 2-2 ウェブサイト NHK for Schoolの取り組み

NHK学校放送番組で初めてウェブサイトをもった番組は『たったひとつの地球』（小学校5、6年 環境教育）で1996年のことである。そ

図2 ウェブサイト「NHK for School」 www.nhk.or.jp/school



トップページ

各番組のページ

の後、2001年に番組の動画とあわせてクリップ、ウェブ教材など関連するコンテンツを統合したウェブサイト、「NHKデジタル教材」が公開される。2005年にはすべての学校放送番組がNHKデジタル教材の仕様を満たすものとなった<sup>21)</sup>。

このNHKデジタル教材のウェブサイトが大きくリニューアルされたのが2011年である。この年から学校放送番組、デジタル教材、さまざまなイベントなどNHKの学校向け教育コンテンツをNHK for Schoolとして一括りにすることになり、それにあわせてウェブサイトが新しくなった(図2)。

NHK for Schoolのウェブサイトは番組動画の視聴や関連する動画クリップの視聴、ウェブ教材や教師向け資料で構成されている点はそれまでと変わっていないが、大きく2つの点でリニューアルされた。1点目は、動画の画質がおよそ2倍に高画質化(256kbps→500kbps)されたことである。番組については2011年度の新番組から順次、動画クリップについては2011年度にすべてが高画質化された。2点目は大型テレビや電子黒板に対応した「大型画面教材」を公開したことである。従来のNHKデジタル教材はパソコンで操作することを中心にインターフェースを設計していたが、電子黒板の機能を利用してタッチすることを考えて、大型画面教材は設計された<sup>22)</sup>。

こうしたリニューアルが行われた背景には2011年に地上アナログ放送が終了し、デジタル放送が始まるにあたって、教室に50インチ程度のデジタルテレビや電子黒板が設置されることが増えてきたということがある。あわせて、教室のインターネット環境が徐々に整ってきて、パソコンルームに行かなくても、教室のパソコンから動画を再生できるようになってきたことも

ある。NHKデジタル教材の動画は、当初はパソコンルームのパソコンで個々に児童が視聴することを想定していたので、パソコン画面で十分な画質に設定していたが、教室の大画面で子どもたち全員が見ることを前提とした高画質に切り替えていったのである。

その後2013年には、iPadなどのタブレット端末が授業で使われるようになったことを受けて、Flash Playerの再生方式を対応させている。さらに、スマートフォンの利用の広がりを受けて、子どもたちが作品を投稿したり(図工)、自分の演技と模範演技を比較したり(体育)するアプリ、さらには、NHK for Schoolの動画をマイリスト形式で登録できる公式アプリなどの開発も進んでいる。

教室はテレビ、パソコンはパソコンルームという環境から、教室に大型提示装置とインターネットに接続したパソコン、さらには児童・生徒が1人1台の情報端末をもつ時代に向けて対応が進められている。

## 2-3 NHK for Schoolに関わる 教員研修の試み

NHKの学校放送番組を利用した研究については、全国放送教育研究会連盟に加盟する全国各地の放送教育研究会を中心に長年進められている。しかし、前項で述べたように、テレビ番組だけでなくインターネットに対応した新しいコンテンツが誕生し、授業での活用もさまざまな形で行われるようになる中、こうした利用法を理解してもらう目的で、NHK主催の教師向け研修会も行われている。

すでに2002年度から、(財)日本放送教育協会への委託事業として、「先生のための教え方

表5 NHK学校放送番組・デジタル教材関連年表 2010～2016年

	NHK学校放送 新番組	NHKデジタル教材関連	NHK for School 普及関連	
2010	『大科学実験』(理科) 『できた できた できた』(小学1年 特別活動) 『ストレッチマン・ハイパー』(特別支援)		・「先生のためのデジタルテレビ・ICT活用講座」(「先生のための教え方教室」から変更, 全国10か所)	
2011	・学校放送番組, デジタル教材, ささまざまなイベントなどNHKの学校向け教育コンテンツをNHK for Schoolとして括り, ウェブサイトを公開 ・新作の小学校向け理科, 社会科番組の時間が15分から10分となる ・午前中放送の小学校向け番組がすべて週1回の放送となる ・7月に東日本大震災の被害が甚大だった東北3県(岩手県, 宮城県, 福島県)以外の地上アナログ放送終了, 全面デジタル化。(東北3県については2012年3月に移行終了)	『知った地図帳』(小学3, 4年社会) 『どきどきこどもふどき』(小学3～6年社会) 『社会のトビラ』(小学5年社会) 『ふしぎがいっぱい3年』(小学3年理科) 『ふしぎがいっぱい4年』(小学4年理科) 『ふしぎがいっぱい5年』(小学5年理科) 『ふしぎがいっぱい6年』(小学6年理科) 『プレクソ英語』(小学5,6年 外国語活動)	・NHKの学校教育サービス全体のポータルサイト名を「NHK for School」とする。 ・番組動画(新番組から順次)とすべてのクリップ動画の画質をおよそ2倍に高画質化(256kbps→500kbps) ・大型テレビや電子黒板に対応した「大型画面教材」の公開	・「先生のためのデジタルテレビ・ICT活用講座」(全国9か所)
2012	『おはなしのくにクラシック』(小学5, 6年国語) 『歴史にドッキリ』(小学6年社会) 『メディアのめ』(小学4～6年, 中学 総合) 『げんばるマン』(小学3～6年, 中学 総合) 『できた できた できた 健康からだ編』(小学1年 特別活動) 『できた できた できた 家庭・社会生活編』(小学1年 特別活動) 『10min. ボックス 地理』(中学社会) 『10min. ボックス 公民』(中学社会) 『10min. ボックス 理科1分野』(中学理科) 『10min. ボックス 理科2分野』(中学理科) 『スマイル!』(小中高 特別支援)		・「先生のためのデジタルテレビ・ICT活用講座」(全国10か所) ・「NHK for Schoolリエゾン」	
2013	・NHK for Schoolの動画が, iPhoneやiPadでも再生可能になる	『お伝と伝じろう』(小学3～6年国語) 『さんすう刑事ゼロ』(小学4～6年算数) 『考えるカラス』(小中高理科) 『銀河銭湯ハンタくん』(小学1, 2年道徳) 『学ぼうBOSAI』(小学4～6年, 中学 総合) 『いじめをノックアウト』(小学3, 4年特別活動) 『ストレッチマンV』(小中高 特別支援)	・電子黒板を使った授業と学習に使える「電子黒板教材」の公開(小学校算数, 理科, 外国語活動, 特別支援, 中学理科, 中学社会)	・「学校放送番組・ICT活用講座」(全国10か所) ・「NHK for Schoolリエゾン」
2014	・1シリーズ20本年間放送に加え, 1シリーズ10本, 半年間放送の番組開始(図工, 体育) ・NHK for Schoolアプリを公開(図工, 体育)	『ことばドリル』(小学1, 2年国語) 『さんすう犬ワン』(小学1～3年算数) 『キミなら何つくる?』(小学5, 6年図工) ※10本シリーズ 『はりきり体育ノ介』(小学3～6年体育) ※10本シリーズ	・トップページリニューアル。番組画像のアイコンに変更 ・動画特集ページ「スク動」オープン ・番組動画やクリップの人気ランキング機能を付加 ・オンラインブックマークボタンからFacebookやTwitterに動画の機能を残せる機能を付加	・「学校放送番組・ICT活用講座」(全国10か所) ・「NHK for Schoolリエゾン」
2015	・放送が終了した番組を蔵出し映像として公開(「いごりあん」シリーズ, 「おはなしのくに」「にほんごであそぼ」) ・インタラクティブ図鑑『ものすごい図鑑』(360度観察, 超拡大モード観察)公開	『未来広告ジャパン!』(小学5年社会) 『カガクノミカタ』(小中 理科)※10本シリーズ 『新・ざわざわ森のがんこちゃん』(小学1, 2年道徳)※10本シリーズ 『ココロ部!』(小学5, 6年道徳)※10本シリーズ 『オン・マイ・ウェイ』(小学5, 6年道徳)※10本シリーズ 『おんがくブラボー』(小学3～6年音楽)※10本シリーズ 『いごでがんこちゃん』(小学1, 2年特別活動)	・トップページ最上部に動画ランキング, 特集ページのデザインに変更	・「NHK for School ICT活用講座」(全国10か所) ・「NHK for School基礎セミナー」開始(「NHK for Schoolリエゾン」の後継事業) ・ICT研修ファシリテーター養成講座第1期(教育工学会「教育の情報化」SIG〈Special Interest Group〉との連携で開催)
2016	・NHK for School公式アプリ(iOS, Android, Windows10)公開	『カタイカ』(小学5, 6年家庭科)※10本シリーズ 『しまった!〜情報活用スキルアップ〜』(小学4～6年, 中学 総合)※10本シリーズ 『で〜きた』(小学1年 特別活動) 『10min. ボックス 生活・公共』(中学社会)※10本シリーズ 『10min. ボックス テイクテック』(小学5, 6年, 中高 技術)※10本シリーズ		・「NHK for School ICT活用ワークショップ」 ・「NHK for School基礎セミナー」, NHK研修センターのアナウンサーによる実施に ・ICT研修ファシリテーター養成講座第2期

教室」が開始されている。半日の日程で、「ICTや番組の活用に取り組む実践者・研究者がプログラムを立案し、講師として参加者をサポートする」、「ワークショップや模擬授業など、活動を通して、番組やICTの活用方法を具体的に学べる」ことを特徴としている。

この「先生のための教え方教室」は2010年度から「先生のためのデジタルテレビ・ICT活用講座」、2013年度から「学校放送番組・ICT活用講座」、2015年度から「NHK for School ICT活用講座」、2016年度から「NHK for School ICT活用ワークショップ」と名称を変えつつ現在まで継続、総計7,000名以上の教師が参加してきている。

あわせて2012年度から、NHK for Schoolの基本的な内容を、地域の研修会や校内研修、大学の教員養成学部などで、プレゼンターが60分程度で紹介する「NHK for Schoolリエゾン」（2015年度からは「NHK for School基礎セミナー」）も行われている。

さらに2015年度からは日本教育工学会で、学会の重要テーマについて研究を進めるSIG (Special Interest Group)<sup>23)</sup>の1つ、SIG-04「教育の情報化」と連携して、「ICT研修ファシリテーター養成講座」を実施している。ICTを利用した授業を自身ができるだけでなく、ICT機器やNHK for Schoolなどのメディアを利用した研修ができる教師を養成する講座である。

こうした教師向けの講座が増えてきている背景には、メディア環境が多様化し、さまざまな授業が行える一方で、どのメディアをどう授業で利用したらよいのかを、さまざまなレベルで考えていく場が、授業を実践する教師の組織だけでなく、教育サービスを提供する側や、研究者にも求められている時代状況があるといえる。

## 2-4 メディア利用・ICT活用を理論的に位置づける試み

ICT活用やメディア利用に関する実践報告や研究は主として、日本教育工学会 (JSET)、日本教育メディア学会 (JAEMS) などの学会や、全国放送教育研究会連盟、日本教育工学研究協議会 (JAET) などの研究会で発表されている。

その内容は授業研究についてもあるし、前項で紹介したような「ICT研修ファシリテーター養成講座」についての取り組みなどもある。また、NHK放送文化研究所で実施している教師調査の結果についても学会等で発表を行っている<sup>24)</sup>。

特に近年多いのは、タブレット端末とNHK for Schoolを利用した実践研究である。2016年度も日本教育工学研究協議会や日本教育メディア学会などで発表が行われた<sup>25)</sup>。

こうした研究発表には実践した教師、研究指導を行う研究者、そして番組制作者の3者が関わるが多い。NHKに限らず、教育関連のコンテンツ制作者と研究者、実践者の協働研究は近年数多くみられるが、特にICT活用、メディア利用という分野では、こうした枠組みで、実践、制作、研究の3者が関わり合いながら研究、開発を進めていくことが大事であると考えられる。

以上、第1章でみたような「教育の情報化」が進められる中、もっともよく利用されている教育サービスの1つであるNHKの取り組みをみてきた。他の教育機関も同様な取り組みを行っており、国の動きにあわせて教育の情報化が進められている。

## 3 「NHK教師のメディア利用と意識に関する調査」の特徴

第1章で詳述したように、「教育の情報化」に関するさまざまな施策が進められる中、教育現場の実態把握の必要性はますます高まっている。特に機器やメディアの整備状況だけでなく、実際に授業を行う教師個人のICTやメディアの利用の実情を知ること、今後の教育のあり方について制度設計をしたり、教育サービスを考案したりすることが求められている。

そのため近年、文部科学省や各自治体の教育委員会、教育関連の研究所や業界団体などで、教師個人を対象としたICTやメディアの活用状況についての調査が行われている。

NHK放送文化研究所でも、「教師」を調査単位とする「教師のメディア利用と意識に関する調査」を2013年度から毎年、全国規模で行っている。

第3章では、まずICTやメディアの活用に関する教師を対象とした全国調査の概況に触れた後に、NHK放送文化研究所による教師を対象とした調査の特徴を整理する。

### 3-1 教師を対象とした全国調査の概況

教育の情報化に関する実態調査として最大のもは、前述の文部科学省が全国の教育委員会を通してすべての公立学校で実施する「教育の情報化実態調査」である。この調査は1988年度から実施されているが、主たるねらいは「学校」単位でICT機器の整備状況やインターネットの接続環境について調査することである。

そのため「教師」個人に関わるものとしては2006年度まで、「コンピュータを操作できる教員数」と「コンピュータを使って教科指導できる教員数」が示されることにとどまっていた。

2007年度からこの「教育の情報化実態調査」で、文部科学省「教員のICT活用指導力の基準の具体化・明確化に関する検討会」（2006年度）がとりまとめたチェックリストに基づき、「教員が自己評価を行う」形の調査を行うこととなった。結果は第1章210頁に示したように、全体として教員のICT活用指導力が年々向上しているといえる。

また、各自治体単位でも教師のICT活用やメディア利用に関する調査を行っている<sup>26)</sup>。

全国規模の教師対象の調査は、教育関連の業界団体や研究所でも実施している。以下に近年行われた代表的な2つの調査の概要と結果を示す。

1つ目は日本教育工学振興会で実施した「学校でのICT活用についての実態調査」<sup>27)</sup>である。日本教育工学振興会は教育関連の企業200社近くを会員とする社団法人で、教育の情報化に関する調査・研究や提言・提案、普及・推進事業を行っており、その一環としてこの調査が行われた。

- 調査名：  
学校でのICT活用についての実態調査
- 調査実施者：  
社団法人日本教育工学振興会（JAPET）  
日本マイクロソフト株式会社
- 実施時期：  
2011年11月12日（土）～11月14日（月）
- 調査対象：  
小学校・中学校・高等学校・特別支援学校  
で、国語、社会／地歴公民、算数／数学、  
理科、生活、外国語のいずれかの教科を担当



当している教員

- 調査方法：インターネットリサーチ
- 有効回答数  
教員サンプル：1,119ケース（内訳 小学校：513，中学校：258，高等学校：258，特別支援学校：90）

この調査では授業でのICT活用についてサマリーとして以下の3点を報告している。

- 学校でのICT活用はまだあまり進んでいない（一般教科での利用41.4%）が、ICTの積極活用については、教員の肯定的な意見が多い（86.6%）。
- ICT活用が進まないのは、「時間がかかる」、「コンテンツが少ない」、「設備が十分でない」、「人的支援がない」が原因。
- ICT活用を推進するには、普通教室のICT環境整備（常設）、教材コンテンツの整備、ICT支援員など人的支援環境が必要。

2つ目は、教育に関して、子ども・保護者・教師・学校などを対象に、調査・研究を行っているベネッセ教育総合研究所の「ICTを活用した学びのあり方」に関する調査である<sup>28)</sup>。

この調査は無作為抽出の一般校教師と、ICT活用を行っている実践校から有意抽出した教師を、項目に応じて比較しているのが特徴的である。

- 調査名：  
「ICTを活用した学びのあり方」に関する調査
- 調査実施者：  
ベネッセ教育総合研究所
- 実施時期：  
2013年10月～11月
- 調査対象：  
全国の公立小学校・中学校の教員  
・一般校（全国の公立小・中学校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率

で無作為に学校を抽出)

- ・実践校（全国の公立小・中学校のリストより、ICTの活用に取り組んでいる学校を有意抽出）
- 調査方法：郵送法による自記式質問紙調査
- 有効回答数

一般校	配布数	4,044名
	有効回収数	1,103名
	有効回収率	27.3%
実践校	配布数	1,596名
	有効回収数	505名
	有効回収率	31.6%

調査結果では以下のような報告があった。

- 普通教室でICT機器が利用できる環境が整いつつある。（第1章）
- 多くの教員が授業でのICTの活用に前向きである。（第2章）
- 現在は教材提示での利用が中心。今後は協働的な学びでの活用意向が高い。（第3章）
- 教員が子どもたちに「身につけさせたい力」と「身につけている力」には乖離がある。（第4章）
- ICTの活用に対する不安は、取り組むことで減少していく。（第5章）

2つの調査結果からは、ICTの活用に対する教師の肯定的な姿勢がうかがえる。その一方で利用を進めるにあたって、まずは機器が利用できる環境の整備、次にコンテンツと人的な支援が必要であり、その上で、子どもたちにつけたい力をつけるための利用の在り方に課題がある様子がうかがえる。

### 3-2 NHK放送文化研究所の教育に関する調査の変遷とその特徴

NHK放送文化研究所では、学校放送番組の

企画・制作・編成と学校向け教育サービス全体を検討する際の基礎資料とする目的で、1950年から2012年まで60年余継続的に「学校放送利用状況調査」を実施してきた。

調査では、教室のメディア環境や各種メディア教材の利用実態、新しいメディアや教育動向に関する学校の関心や意向を調べてきた。

「学校放送利用状況調査」としては最後になる2012年度は、小学校、中学校、高等学校を対象に、各学校の担当者から回答を得た。調査項目は主に下記の4項目である。

1. 教室のメディア環境
  - ・地上デジタル放送の視聴状況
  - ・パソコンのインターネット接続状況
2. NHK学校放送サービスの利用
  - ・テレビ学校放送番組、NHK デジタル教材の利用
  - ・NHK デジタル教材の利用内容
3. NHK教育サービスの利用
  - ・教育イベントの利用
  - ・NHK アーカイブスの教育利用
4. 「デジタル教科書・電子教科書」の利用
  - ・指導者用電子教科書の利用教科
  - ・指導者用電子教科書の利用の感想

2013年度から対象を「学校」から「教師個人」に変更し、各教師（クラス）単位でのメディア環境や利用の実態、教師のメディア観や教育観を調査している。質問項目は、これまでの研究成果を基に、教師の性別・年代、担当学年・教科などの基本事項のほかに、大きく次の4項目で構成している。

1. 教師自身のメディア利用・情報入手方法
  - ・日常生活（仕事や授業以外）でのメディア利用

- ・教育関連情報の入手手段
- ・デジタル機器やサービスに対する意識  
(2014年度小学校教師調査, 2015年度中学校教師調査)

2. 担任クラスの授業でのメディア環境と利用状況
  - ・教師の授業での機器の利用頻度
  - ・児童・生徒の機器利用の状況
  - ・教師の授業でのメディア教材の利用頻度
3. NHK学校放送番組・デジタル教材の利用
  - ・NHK学校放送番組・デジタル教材の認知・利用
  - ・NHK学校放送番組・デジタル教材の非利用理由(2013年度小学校教師調査)
  - ・NHK学校放送番組・デジタル教材の利用のきっかけ(2014年度小学校教師調査, 2015年度中学校教師調査)
4. 今後のメディア利用や教育課題
  - ・重視している教育課題
  - ・授業を行う際に重視していること
  - ・今後、授業で利用してみたいメディア

調査項目は経年比較のために原則として同じ質問としているが、2013年度小学校教師調査で実施の「NHK学校放送番組・デジタル教材の非利用理由」は、従前の調査結果ともほぼ一致することがわかったため、2014年度小学校教師調査、2015年度中学校教師調査では、「NHK学校放送番組・デジタル教材の利用のきっかけ」に質問項目を変更した。

また、2014年度小学校教師調査、2015年度中学校教師調査では、「デジタル機器やサービスに対する意識」を調査項目に加え、教師の意識と利用実態との関連をとらえるようにした。

## 4 属性や意識でみる〈小学校教師〉のメディア利用

2010年代の教育とメディアをめぐる動向について、第1章で国の動向、第2章でNHK for Schoolの取り組みをみた上で、第3章で、こうしたメディア環境における教師の実態を把握するための各種調査についてみてきた。

第4章から第6章ではNHK放送文化研究所の「教師のメディア利用と意識に関する調査」の結果を詳細に分析し、担当している学年や年代などの属性と、「デジタル機器に対する意識」と「授業を進める考え方」についての質問結果を基にした分析から、多様化が進む教室のメディア環境の中、教師がどのようにメディアを選択しているのかをみていく。

### 4-1 2014年度「NHK小学校教師のメディア利用と意識に関する調査」概要

2014年度実施の小学校教師を対象とした調査の概要は以下に示すとおりである。

■調査実施期間：

2014年10月1日（水）～12月26日（金）

■調査対象：全国の小学校（休校を除く20,784校）から系統抽出した1,222校のクラス担任教師計3,666名

【学校の抽出は、『全国学校総覧2014年版』（原書房刊）を用いて実施】

■調査方法：学校長あての調査協力依頼、無記名回答。郵送法で督促2回。対象校の半数（611校）には、1、3、5年生担任教師1名ずつ、残りの半数（611校）

には、2、4、6年生担任教師1名ずつの回答を依頼した。

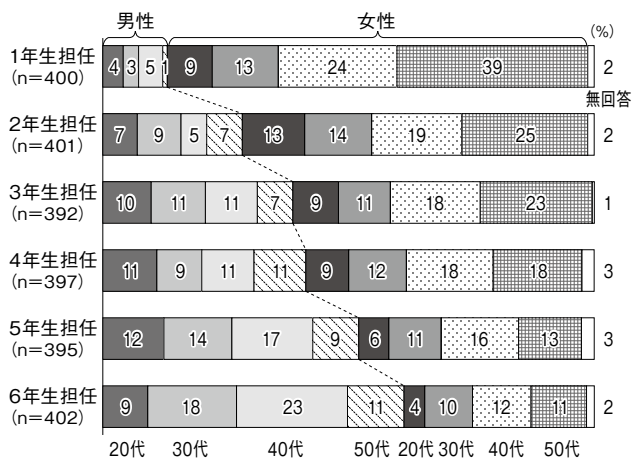
■有効回答数：2,387名 有効回答率：65%  
※学年による有効回答率の差はみられなかった。

今回の調査の回答者となった教師全体の性・年代分布は図3に示すとおりである。全体の男女比は、男性40%、女性60%で女性教師の割合が高いが、学年ごとにみると男女比はかなり異なる。1年生担任では男性13%、女性86%で圧倒的に女性教師が多いが、学年があがるにつれて男性教師の比率が高くなり、5年生担任（男性54%、女性46%）、6年生担任（男性61%、女性38%）では男性教師の方が多くなる。

また年代でみると20代と30代がそれぞれ約2割、40代と50代がそれぞれ約3割である。

本章では、小学校教師のメディア利用の実態をより詳細にみていくために、まず「担当学年（低学年、中学年、高学年）」、「年代（20代、

図3 担当学年別にみた教師の性・年代分布



注：6学年合計の教師全体での男女の比率は、男性教師40%、女性教師60%、無回答0%、年代別にみると、20代17%、30代22%、40代30%、50代29%、無回答2%である。

30代、40代、50代)」の2つの属性で、それぞれの特徴を明らかにする。

その上で、教師の意識に関する設問に対する結果から「デジタル機器に対する意識が積極的な教師」と「授業スタイルが児童中心・新規型の教師」について、その特徴をみていく。上記に属する教師はメディア利用を積極的に進めていると考えられるためである。

## 4-2 担当している学年による特徴

ここからは、小学校教師のメディア利用の特徴を、担当している学年を基に、低学年(小学校1~2年)、中学年(小学校3~4年)、高学年(小学校5~6年)の3つに分けてみていく。

一般にメディア教材は、対象となる学年の児童の発達段階にあわせて制作されるが、対象となる児童を教えている教師の特徴をつかむことで、必要なメディア環境や教材のあり方がより明らかになると考える。

なお、低学年、中学年、高学年の調査結果は一括して224頁から227頁に表としてまとめた。

### 4-2-1 低学年担任教師の特徴



低学年を担当する教師の男女比は男性21%、女性79%と女性が圧倒的に多い(表6)。年代をみると、50代が36%で他の年代より多い(表7)。

また表8に示すように専門分野は、国語、生活科で多く、理科、社会科、体育で少ない。小学校低学年には理科、社会科の授業がなく、生活科の授業が行われているためと考えられる。

表9に示す重視している教育課題は多い順に「コミュニケーション能力の育成について」(76%)、「言語活動の充実について」(69%)となる。

低学年担任教師に特徴的なのは、「特別支援教育について」(33%)が多く、「情報モラル教育について」(29%)、「ICTを活用した教育について」(25%)が少ないことである。遊びを中心とする幼稚園から小学校に入学してきたばかりの子どもに対して、ICTの活用よりもコミュニケーション能力をつけることを大事にしたいという考えの表れであろう。

表10に示すように、デジタル機器の利用に対しての複数の質問を基に教師のタイプ分けをした結果をみると、デジタル機器やサービスの利用に対して積極的な教師が少ないことも特徴的である。

表11に示す9種の機器の授業での利用をみると、「パソコン」(70%)、「テレビ受像機」(55%)、「録画再生機」(55%)、「インターネット」(50%)、「プロジェクター」(39%)、「電子黒板」(20%)の6種で他の学年より少ない。

その一方で、「デジタルカメラ」(81%)、「実物投影機」(59%)、そして、利用者は少ないが「タブレット端末」(14%)については、他の学年と同様に利用されているのが特徴的である。この3種類のメディアは実物をすぐに撮影したり投影したりすることができるので、身の回りのものを授業で扱うことの多い低学年教師のニーズとあっていること、また、いずれも写す機能だけの利用であれば、1回の操作で利用できる手軽さがあるため、利用が多いと考えられる。

表12に示した機器を児童に使用させている割合は33%にとどまり、中学年と高学年では7~8割に達するのと比べるとかなり少ない。小

学校低学年では児童の体験や実物を中心に授業が進められること、低学年の児童にはキーボード入力などの機器の操作が難しいことがあるためと考えられる。

授業で利用しているメディア教材を示したものが表13である。表に示した9種のどの教材も利用しなかった教師は21%で、低学年担任教師は他の学年に比べると授業でのメディア教材の利用が少ない。その中で利用が多かった教材は、「H. ビデオ教材」(40%)、「I. 自作教材」(36%)、「F. 指導者用のデジタル教科書」(29%)、「A. NHK学校放送番組」(28%)である。

教科ごとに利用の多いメディア教材3種をまとめたのが表14である。

低学年担任教師の利用は、国語(47%)、道徳(38%)、算数(34%)、生活科(32%)で30%を超え、国語と算数では「指導者用のデジタル教科書」、道徳では「NHK学校放送番組」、生活科では「自作教材」が多い。特に国語と道徳のメディア教材の利用が他学年より多いのが特徴的である。国語ではデジタル教科書の拡大機能や読み上げ機能が、道徳では2016年に放送20年を迎え、学校現場の利用が定着している『ざわざわ森のがんこちゃん』を使った授業が行われていると考えられる。

6種類のメディアについて、今後の利用意向を尋ねた結果が表15である。

低学年担任教師は機器やメディア教材の利用が他学年に比べて少ないが、利用意向をみると、なんらかのメディアの利用意向のある教師は96%で他学年と変わらない。利用意向が多かったのは「電子黒板」(70%)、「タブレット端末」(63%)、「指導者用のデジタル教科書」(62%)であった。このうち、「指導者用のデジ

タル教科書」の利用意向は他学年より多かった。低学年担任教師の授業での「指導者用のデジタル教科書」の利用は29%であったが、今後の期待は大きいといえる。

以上から小学校低学年担任教師の特徴を3点にまとめた。1点目は、子どもたちのコミュニケーションや体験を中心とした授業を大事にしている教師が多いことである。そのためメディアの利用が他の学年より少ないと考えられる。

2点目は、そうした中で実物投影機やデジタルカメラがよく利用されていることである。こうした機器は実物を提示することの多い低学年の授業に適していることとあわせて、操作が容易であるためであると考えられる。

3点目は、現在のメディア利用はそれほど多くないが、今後のメディア利用意向をみると他学年とあまり変わらないことである。これは、低学年の現状ではあまりメディアを授業に利用する必要性は感じていないが、例えば教科書を拡大して提示できるデジタル教科書などへの期待は高いと考えられる。

全体として小学校低学年担任の教師は、現時点ではメディアを多用しているわけではないが、メディアを決して使わないという否定的な姿勢ではなく、必要があり、環境が整えば利用していこうという姿勢がうかがえる。

表6 担当学年別にみた性別（小学校） (%)

	男性	女性	無回答
教師全体 (n=2,387)	40	60	0
低学年担任 (n=801)	21	79	1
中学年担任 (n=789)	41	59	0
高学年担任 (n=797)	58	42	1

注 ■ にゴシックは全体に比べて有意に高い層であることを、□ にイタリックは低い層であることを示している（95%水準）。  
以後の表についても同様である

表7 担当学年別にみた年代の分布（小学校） (%)

	20代	30代	40代	50代	無回答
教師全体	17	22	30	29	2
低学年担任	17	19	27	36	1
中学年担任	19	21	29	29	2
高学年担任	16	26	34	23	2

表8 担当学年別にみた専門分野（小学校） (%)

	国語	社会	算数	理科	生活科	音楽	図画工作	家庭科	体育	道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	特別支援教育
教師全体	25	20	17	12	5	9	6	5	17	6	8	3	5	7
低学年担任	31	16	16	8	11	11	7	4	9	6	7	2	4	8
中学年担任	27	21	16	12	3	11	6	5	15	6	7	4	5	9
高学年担任	19	22	19	14	2	6	6	5	26	6	10	4	7	5

表9 担当学年別にみた重視している教育課題（小学校） (%)

	国際調査などを基にした学力について	防災教育、復興教育について	育成について	コミュニケーション能力の育成について	言語活動の充実について	ICTを活用した教育について	情報モラル教育について	道徳教育のあり方について	いじめ問題について	伝統・文化に関する教育について	芸術表現体験について	食育、スポーツなど健全な身体の育成について	キャリア教育について	外国語教育について	特別支援教育について
教師全体	16	18	73	65	31	33	34	44	16	9	26	16	19	27	
低学年担任	14	18	76	69	25	29	35	42	17	11	25	14	18	33	
中学年担任	17	19	71	65	30	33	34	43	15	10	24	14	17	27	
高学年担任	18	18	72	62	39	38	33	46	17	7	28	20	23	21	

表10 担当学年別にみたデジタル機器利用観（小学校） (%)

	デジタル機器利用積極教師	デジタル機器利用消極教師	それ以外
教師全体	22	8	70
低学年担任	18	9	73
中学年担任	21	7	72
高学年担任	27	7	66

- 「デジタル機器利用積極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した教師
- 「デジタル機器利用消極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した教師
- 「それ以外」は上記以外の教師

表11 担当学年別にみた教師の授業でのメディア機器利用（小学校）

（%）

	テレビ 受像機	録画再生機	パソコン	インター ネット	タブレット 端末	プロジェ クター	電子黒板	実物投影機	デジタルカメラ・デジタル ビデオカメラ
教師全体	61	59	81	73	16	49	27	61	82
低学年担任	55	55	70	50	14	39	20	59	81
中学年担任	58	57	82	77	16	48	26	61	81
高学年担任	69	65	92	91	18	59	36	64	85

表12 担当学年別にみた児童のメディア機器利用（小学校）（「パソコン」、「電子黒板」、「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」、「タブレット端末」）

（%）

	いずれかで児童使用あり
教師全体	64
低学年担任	33
中学年担任	74
高学年担任	85

表13 担当学年別にみたメディア教材利用（小学校）

（%）

	A. NHK学校放送番組	B. A以外のNHKの 放送番組	C. NHK以外の放送 番組	D. NHKデジタル教材	E. 「D」以外のインター ネット上のコンテン ツや動画、静止画	F. 指導者用のデジタル 教科書	G. 「E」以外のパソコン 用教材	H. 市販のビデオ教材や DVD教材	I. あなたや他の先生が 作成した教材（自作 教材）	A. I.のどの教材も 利用しなかった
教師全体	44	9	9	38	41	43	24	44	41	10
低学年担任	28	5	6	13	26	29	20	40	36	21
中学年担任	50	9	8	44	41	34	24	44	42	7
高学年担任	55	14	13	57	55	67	27	48	45	2

表15 担当学年別にみた今後の授業でのメディア利用意向（小学校）

（%）

	電子黒板	タブレット端末	指導者用の デジタル教科書	学習者用の デジタル教科書	協働学習で利用 できるソフトウェア やツール	教材などについて 情報交換できる サイトやソーシャル メディア	いずれか1つ以上 の利用意向あり
教師全体	68	68	59	45	27	25	96
低学年担任	70	63	62	43	24	23	96
中学年担任	68	68	55	46	25	23	95
高学年担任	64	74	58	47	30	29	97

表14 担当学年別にみた利用しているメディア教材（教科別上位3種）（小学校）

		国語	社会	算数	理科	生活	音楽
教師全体	メディア教材利用あり	40	41	35	46	11	11
低学年担任	メディア教材利用あり	47		34		32	12
	1位	デジタル教科書 19		デジタル教科書 19		自作教材 14	自作教材 4
	2	自作教材 11		自作教材 9		インターネット 10	ビデオ教材 3
	3	ビデオ教材 9		パソコン教材 8		ビデオ教材 6	インターネット 3
中学年担任	メディア教材利用あり	35	49	35	69		10
	1	デジタル教科書 16	NHK学校放送 15	デジタル教科書 19	NHK学校放送 41		ビデオ教材 4
	2	自作教材 7	自作教材 15	自作教材 8	NHKデジタル 34		自作教材 3
	3	インターネット 7	NHKデジタル 14	パソコン教材 8	インターネット 17		インターネット 2
高学年担任	メディア教材利用あり	38	73	37	68		10
	1	デジタル教科書 17	NHK学校放送 37	デジタル教科書 22	NHKデジタル 41		ビデオ教材 4
	2	インターネット 9	NHKデジタル 35	自作教材 8	NHK学校放送 37		インターネット 4
	3	自作教材 7	インターネット 20	パソコン教材 7	インターネット 22		自作教材 3

- 「A. NHK学校放送番組」は「NHK学校放送」
- 「D. NHKデジタル教材」は「NHKデジタル」
- 「E. 「D」以外のインターネット上のコンテンツや動画・静止画」は「インターネット」
- 「F. 指導者用のデジタル教科書」は「デジタル教科書」
- 「G. 「F」以外のパソコン教材」は「パソコン教材」
- 「H. 市販のビデオ教材やDVD教材」は「ビデオ教材」
- 「I. あなたや他の先生が作成した教材」は「自作教材」として表記



(%)

	図工	家庭科	体育	道徳	外国語活動	総合	特別活動
	12	4	20	30	23	27	19
	12		13	38			24
自作教材	6		自作教材	NHK学校放送			ビデオ教材
インターネット	2		7	23			10
ビデオ教材	2		インターネット	ビデオ教材			自作教材
			4	9			9
			ビデオ教材	自作教材			NHK学校放送 インターネット
			4	8			4
	12		21	25		36	14
自作教材	5		自作教材	NHK学校放送	インターネット	自作教材	
インターネット	2		9	13	13	5	
デジタル教科書	2		インターネット	ビデオ教材	自作教材	ビデオ教材	
			7	7	13	5	
			ビデオ教材	NHKデジタル	ビデオ教材	インターネット	
			5	5	8	2	
	13	11	26	25	57	43	19
自作教材	5	デジタル教科書	自作教材	NHK学校放送	デジタル教科書	インターネット	自作教材
インターネット	5	5	9	11	51	22	8
デジタル教科書	2	自作教材	インターネット	NHKデジタル	パソコン用教材	自作教材	ビデオ教材
		3	9	8	3	14	5
		インターネット	ビデオ教材	ビデオ教材	インターネット	ビデオ教材	インターネット
		3	8	6	2	9	4

## 4-2-2 中学年担任教師の特徴



中学年を担当する教師の男女比は男性41%、女性59%で、小学校教師全体とほぼ一致している(表6)。

年代の構成は20代、30代が2割程度、40代、50代が3割程度というのも全体とほぼ同様である(表7)。

専門分野は中学年では授業がない生活科が少ない以外は小学校教師全体と同様の傾向で、国語(27%)、社会(21%)、算数(16%)、体育(15%)、理科(12%)の順に多い(表8)。

重視している課題も小学校教師全体と同様で、「コミュニケーション能力の育成について」(71%)、「言語活動の充実について」(65%)が多く、「いじめ問題について」(43%)、「道徳教育のあり方について」(34%)、「情報モラル教育について」(33%)、「ICTを活用した教育について」(30%)にも関心が高い(表9)。

また、デジタル機器の利用に対して積極的な教師の割合も21%と小学校教師全体と同様である(表10)。

ここまでの中学年担任の教師の調査結果は小学校教師全体の傾向とほぼ一致しているが、機器の利用やメディア教材の利用については少し特徴的なところがみられた。

機器については利用の多い順に、「パソコン」(82%)、「デジタルカメラ」(81%)、「インターネット」(77%)、「実物投影機」(61%)、「テレビ受像機」(58%)となり、全体の傾向と変わらないが、インターネットの利用については全体と比べてやや多いのが特徴的である(表11)。

また、児童に機器を利用させている割合も74%と、低学年担任教師が児童に機器を利用

させている割合(33%)の2倍以上になる(表12)。小学校中学年ではローマ字の学習が始まり、ローマ字でキーボード入力ができるようになることと、総合的な学習の時間が始まることで、パソコンで調べる活動が多くなるためと考えられる。

メディア教材についてみると(表13)、どの教材も利用しなかった中学年担当教師は7%だけで、さまざまなメディア教材が授業で利用されており、「A. NHK学校放送番組」(50%)、「H. ビデオ教材」(44%)、「D. NHKデジタル教材」(44%)、「I. 自作教材」(42%)、「E. インターネット上のコンテンツ」(41%)の4種で40%を超えている。特に、NHK学校放送番組、NHKデジタル教材の利用が低学年より増えている。

メディア教材の利用を教科別でみていくと(表14)、理科(69%)、社会科(49%)、総合的な学習の時間(36%)、国語(35%)、算数(35%)と続く。低学年と比べると、理科、社会科が多く、国語、道徳(25%)で少ない。

小学校中学年では、理科、社会科が始まることに伴い、この2教科でメディア教材を利用する機会が増え、その結果、NHK学校放送番組、NHKデジタル教材の利用が低学年より増えていると考えられる。またNHKデジタル教材を中心にインターネット上のコンテンツを利用する機会が多くなることで、機器としてのインターネット利用も増えている。

今後のメディアの利用意向についてみると、なんらかのメディア利用意向のある教師は95%で、意向の多い順に「電子黒板」(68%)、「タブレット端末」(68%)、「指導者用のデジタル教科書」(55%)と続く(表15)。

以上から小学校中学年担任教師の特徴を3点に整理する。1点目は、全体としてメディアの

利用や意識について小学校教師全体の平均とほぼ同様であることである。

2点目は、理科・社会科の授業が始まることで、機器としてのインターネット利用、メディア教材としてのNHK学校放送番組、NHKデジタル教材の利用が多くなることである。

3点目は、国語でローマ字を習うことでキーボード入力がしやすくなることや、総合的な学習の時間が始まることなどがあり、パソコンなどの機器の児童の利用が、低学年より増えることである。

#### 4-2-3 高学年担任教師の特徴



高学年を担当する教師の男女比は男性58%、女性42%で、低中学年と比べると男女比が逆転して、男性教師が多くなる(表6)。

また年代は30代、40代の割合が多い(表7)。

専門分野をみると体育(26%)、社会(22%)、算数(19%)、国語(19%)、理科(14%)となり、体育と理科が全体より多く、国語が少ない(表8)。

重視している課題が「コミュニケーション能力の育成について」(72%)、「言語活動の充実について」(62%)、「いじめ問題について」(46%)で多いのは全体と同じ傾向であるが、「ICTを活用した教育について」(39%)と「情報モラルについて」(38%)を重視している教師が多いのが特徴的である(表9)。

高学年では教師自身がICTを活用した授業をすることが多くなるのとあわせて、児童が情報機器を操作する機会も増えるため、情報モラルへの関心が高くなるためと考えられる。

デジタル機器の利用に対しては、他の学年に比べて積極的な教師が多い(表10)。

高学年担任教師の機器の利用についてみると、利用の多い順に、「パソコン」(92%)、「インターネット」(91%)、「デジタルカメラ」(85%)、「テレビ受像機」(69%)、「録画再生機」(65%)となり、インターネットに接続されたパソコンや、録画した番組やDVDを授業で積極的に利用していることがわかる。「実物投影機」(64%)、「プロジェクター」(59%)の利用も多く、高学年の授業では教材を拡大提示したり、メディア教材を見せたりすることが他学年より多いといえる(表11)。

児童に機器を利用させている割合も85%と多く、パソコンを中心に児童の機器利用も盛んである(表12)。

メディア教材についてみても、まったく利用しない教師は2%にとどまり、「F. 指導者用のデジタル教科書」(67%)、「D. NHKデジタル教材」(57%)、「A. NHK学校放送番組」(55%)、「E. インターネット上のコンテンツ」(55%)、「H. ビデオ教材」(48%)、「I. 自作教材」(45%)の6種で4割を超えており、いずれも他学年より多い(表13)。

メディア教材の利用を教科別でみると、社会科学(73%)、理科(68%)、外国語活動(57%)、総合的な学習の時間(43%)で多い(表14)。これらの教科・領域でメディアが活発に利用されていることがわかる。一方で国語(38%)、算数(37%)、道徳(25%)は一定程度メディアの利用はみられるが、活発とはいええない。これらの教科・領域では高学年になると児童が個別に考えたり記述したり、話し合う時間をとることが多くなるためメディア利用が少なくなると考えられる。なお、数は少ないが、体育で26%

のメディア利用がみられ、他学年と比べて多い。体育館でもインターネットに接続できる環境が整ったり、児童がタブレット端末をもって校庭や体育館で撮影できたりすることで、模範となる動きを確認したり、自分の動きと比較したりするためにメディア利用が行われる兆しがみえる。

今後のメディア利用意向についてみると、「タブレット端末」(74%)、「電子黒板」(64%)、「指導者用のデジタル教科書」(58%)で多い(表15)。全体と比べると、タブレット端末で多く、電子黒板で少ない。また、数は少ないが、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」(30%)と、「教材などについて情報交換できるサイトやソーシャルメディア」(29%)の利用意向が他学年より多くみられた。電子黒板のように教師が提示する機器だけでなく、今後は児童がメディアを使いこなしていくことへの期待や、新しいメディアの利用について情報交換したいという気持ちの表れととらえられる。

小学校高学年教師の特徴を3点にまとめると、1点目は、30代、40代の男性教師が多く、デジタル機器に対して積極的で、授業で日常的にメディアを利用していることである。

2点目は、教師だけがメディアを利用するのではなく、児童にもメディアを利用させていることである。そのため、情報モラルについて重視したり、協働学習で利用できるツールへの利用意向が高くなったりすると考えられる。

3点目は、その一方で、教科によるメディア利用の差が他の学年より大きいことである。理科や社会科ではメディア教材の利用が多いが、国語や算数、道徳などではメディア教材もある程度は利用するものの、従来の教科書と板書の授業も多いと考えられ、教科により選択的に

メディアを利用していると考えられる。

#### 4-2-4 担任学年による特徴のまとめ

低学年、中学年、高学年のメディア利用の違いをあらためてまとめると、それぞれの学年がもつ特性とメディア利用が対応している様子がみられる。

低学年では実物や体験を重視することが多いので、メディア利用は限定的であるが、実物を容易に投影できるなどの機能をもつものが利用されている。

中学年では、理科、社会科という自然現象や社会事象を扱う教科が始まることで、教室内で再現できないものなどの理解を助けるためのメディア利用が始まることと、児童が自分で調べてまとめる活動が盛んになるので、そのためのメディアが利用されるようになるといえる。

高学年では、理科、社会科を中心にメディア利用が盛んで、児童のメディア利用も多い。その一方で教科によるメディア利用の差もみられた。




1年生から6年生まで発達段階の異なる子どもがいる小学校では、各学年が同様にメディアを利用するのではなく、それぞれの学年、発達段階にあわせてメディアが選択的に利用されているといえる。

### 4-3 年代による特徴

ここからは、小学校教師のメディア利用の特徴を、年代で差が表れているものを中心に、20代、30代、40代、50代の4つの年代に分けてみていく。

それぞれの年代の教師が子どもにどのようなメディアと接してきたか、また、学習指

図4 年代ごとのメディア経験と学習指導要領

	<メディア経験>	<学習指導要領>
20代	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校のころからゲーム、パソコン</li> <li>・小中高でパソコンを利用した授業</li> <li>・高校で携帯電話</li> <li>・大学生でスマートフォン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1998年改訂</li> <li>・基礎・基本を確実に身につけさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成</li> <li>・教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設</li> </ul>
30代	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校のころにゲーム機</li> <li>・中学、高校でパソコンを利用した授業</li> <li>・大学生のころに携帯電話</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1989年改訂</li> <li>・社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成</li> <li>・生活科の新設、道徳教育の充実</li> </ul>
40代	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学、高校のころにゲーム機</li> <li>・大学生のころにポケベル、パソコン</li> <li>・社会人になってから携帯電話</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1977年改訂</li> <li>・ゆとりある充実した学校生活の実現≠学習負担の適正化</li> <li>・各教科等の目標・内容を中核的事項にしばる</li> </ul>
50代	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校でテレビを利用した授業多</li> <li>・大学生のころにゲーム機</li> <li>・社会人になってからパソコン、携帯電話</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1968年改訂</li> <li>・教育内容の一層の向上、「教育内容の現代化」</li> <li>・時代の進展に対応した教育内容の導入</li> <li>・教育内容・授業時間数が量的にピーク</li> </ul>

指導要領はどうであったかを図4にまとめた。

また、各年代の調査結果については一括して233頁から235頁にまとめてある。

#### 4-3-1 20代の小学校教師の特徴



2014年度の調査時点で20代の教員は1980年代半ばから1990年代半ばに生まれた。小学校時代にはゲーム機器が次々に登場し、中学や高校のころには、学校や家庭にパソコンが普及し、大学生のころには携帯電話そしてスマートフォンが

広く使われるようになった世代である。以下、20代教師のメディア利用についてみていく。

20代教師の男女比は男性52%、女性48%で男性の方が多く(表16)。他の年代ではすべて女性の方が多くいのにに対して、特徴的である。担任している学年は低学年、中学年、高学年にほぼ均等にわかれている(表17)。

仕事や授業外の日常生活で利用しているメディアをみると(表18)、「スマートフォン」の利用が88%と他の年代と比べて非常に多く、「携帯電話」の利用が19%と少ない。また「携帯デジタルプレーヤー(iPodなど)」の利用も36%で

他の年代より多い。こうしたデジタル機器を日常的に使いこなしている様子がみられる。ただし「タブレット端末」(18%)の利用は他の年代と比べてそれほど多くない。また「パソコン」の利用は80%に達するが、他の年代と比べるとやや少ない。スマートフォンを中心に日々を過ごしている様子がうかがえる。

デジタル機器の利用に対する意識は、他の年代よりも積極的な教師の割合が高く、子どものころから身近にあったデジタル機器を使いこなしてきた世代といえる(表19)。

重視している教育課題は「コミュニケーション能力の育成について」(66%)、「言語活動の充実について」(60%)が多いのは小学校教師全体と同じ傾向である。しかし、この2項目を含めて30代以上と比べると、重視している項目への回答比率が少ない(表20)。

特に、「外国語教育について」(15%)、「防災教育・復興教育について」(13%)、「国際調査などを基にした学力について」(13%)、「伝統・文化に関する教育について」(11%)が30代以上より少ない。経験が少ない年代なので、幅広く教育課題に目を配るよりも、目の前の授業に意識を集中することを大事にしている段階といえるであろう。

20代の教師は教育関連の情報入手手段も特徴的である。教育関連の情報源11種について、「A.教育界の動向をめぐる情報を集める時」、「B.授業の方法を工夫したい時」、「C.メディアを使った授業の工夫をしたい時」の3つの場合で複数選択してもらった結果をみると、どの場合も「同じ学校の教師から」がもっとも多く、30代以上よりも高い割合を示している(A78%、B89%、C72%)。日々の授業を進めていく上で、身近な同僚がもっとも重要な情報源になってい

る。

より詳しくみると、「A.教育界の動向をめぐる情報を集める時」(表21)では、「同じ学校の教師から」(78%)、「テレビ番組から」(53%)、「インターネットで情報検索して」(50%)の順に多い。特に「テレビ番組から」(53%)が他の年代より多いのが特徴的である。また「新聞から」(39%)、「書籍から」(26%)が他の年代と比べて少ない。全体の数は少ないが、「ソーシャルメディアから」(7%)が他の年代より多いことをあわせて考えると、教育界の動向のような大きな状況を把握する際には新聞、雑誌よりテレビ番組やインターネット、ソーシャルメディアを重視しているといえる。

「B.授業の方法を工夫したい時」(表22)では「同じ学校の教師から」(89%)、「インターネットで情報検索して」(67%)、「学校を越えた教師仲間から」(57%)の順に多い。この項目では、「学校を越えた教師仲間から」が他の年代より多い。また、「書籍から」(48%)が他の年代より少ない。インターネット以外のメディアはあまり利用されず、対面で授業の方法の工夫に関する情報を入手していることが多い。

「C.メディアを使った授業の工夫をしたい時」(表23)では、「同じ学校の教師から」(72%)、「インターネットで情報検索して」(59%)、「学校を越えた教師仲間から」(35%)の順に多い。他の項目と同様にインターネットと対面から情報を入手しているといえる。

全体として20代はすべての項目で、他の年代よりも「同じ学校の教師」や「学校を越えた教師仲間」から情報を入手することが多く、「新聞」や「書籍」から情報を入手することは少ない。また、この年代は一般にソーシャルメディアの利用が他の年代より多いが、教育情報に

関してソーシャルメディアから情報を得ることはそれほど多くない。

さて、こうした20代の授業での機器の利用をみていくと(表24)、「デジタルカメラ」(83%)、「パソコン」(80%)、「インターネット」(72%)の順に多く、全体の傾向と変わらない。特徴的なのは「録画再生機」の利用が50%と30代以上より少ないことと、「タブレット端末」の利用が20%で30代と並んで多いことである。

また児童にパソコンなどの機器を利用させている割合は60%で、全体と変わらない(表25)。

20代教師が利用しているメディア教材をみると、「I. 自作教材」(43%)、「F. 指導者用のデジタル教科書」(42%)、「A. NHK学校放送番組」(39%)と「E. インターネット上のコンテンツ」(39%)の順に多い(表26)。

他の年代と比べると「A. NHK学校放送番組」(39%)、「H. ビデオ教材」(32%)、「C. NHK以外の放送番組」(6%)、「B. 「A」以外のNHK放送番組」(6%)の利用が少ない。こうした傾向は、機器の利用で録画再生機が少ないこととも一致している。また、「G. パソコン用教材」の利用が小学校教師全体24%に対して15%と少ないこともあわせて考えると、20代の小学校教師は録画した映像やビデオ教材、パソコン教材といったパッケージ型のメディア教材よりも、インターネットで公開されているネットワーク型のメディア教材を利用する傾向が強いのとい

える。その一方で、全体としてメディア教材を利用する割合は他の年代より少ないので、そもそも授業で利用できるメディア教材をあまり知らないとも考えられる。

今後利用したいメディアは「タブレット端末」(74%)、「電子黒板」(69%)、「指導者用のデジタル教科書」(54%)の順で多い(表27)。特に「タブレット端末」の利用意向が30代と並んで高く、表24に示した現在の利用状況とも一致している。

20代の教師のメディア利用を3点にまとめる。1点目は、子どものころからデジタル機器が身の回りにあり、スマートフォンなどのデジタル機器をよく利用している世代であることである。

2点目は、メディアに対して親和性の高い世代でありそうであるが、授業でのメディア利用は全体としては多くないこと、利用に際してはインターネットで公開されているものや新しいメディアが中心であることである。

3点目は教育に関する情報の入手は「同じ学校の教師から」が中心で、メディアから情報を得ることがそれほど多くないということである。

20代の教師はさまざまな新しいメディアに触れることが他の年代より多いと考えられるが、それが授業利用にすぐ結びつくわけではなく、むしろ同僚など知っている人から得る情報がきっかけとなっている様子が見えてくる。

表16 年代別にみた性別 (小学校) (%)

	男性	女性	無回答
教師全体 (n=2,387)	40	60	0
20代 (n=415)	<b>52</b>	<b>48</b>	1
30代 (n=530)	<b>48</b>	<b>52</b>	0
40代 (n=706)	40	60	0
50代 (n=700)	27	<b>73</b>	0

表17 年代別にみた担当学年 (小学校) (%)

	低学年担任	中学年担任	高学年担任
教師全体	34	33	33
20代	32	37	31
30代	<b>29</b>	32	<b>39</b>
40代	30	32	<b>38</b>
50代	<b>41</b>	33	26

表18 年代別にみた日常生活の利用メディア（小学校）

(%)

	携帯電話	スマートフォン	タブレット端末 (iPadなど)	パソコン	携帯デジタルプ レーヤー (iPodなど)	電子書籍 リーダー	ブルーレイ ディスク レコーダー	携帯電話やカ ーナビなどのフ ンセグ放送
教師全体	43	58	17	83	14	3	31	24
20代	19	88	18	80	36	2	27	21
30代	32	74	21	81	16	3	35	25
40代	48	53	19	86	8	4	33	27
50代	60	34	10	85	6	3	30	23

表19 年代別にみたデジタル機器利用観  
(小学校)

(%)

	デジタル機器 利用積極教師	デジタル機器 利用消極教師	それ以外
教師全体	22	8	70
20代	34	2	64
30代	25	5	71
40代	20	7	73
50代	15	14	71

- 「デジタル機器利用積極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した教師
- 「デジタル機器利用消極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した教師
- 「それ以外」は上記以外の教師

表20 年代別にみた重視している教育課題（小学校）

(%)

	国際調査などを基に した学力について	防災教育・復興教育に ついて	育成について コミュニケーション能力の	言語活動の充実について	ICTを活用した教育に ついて	情報モラル教育について	道徳教育のあり方 について	いじめ問題について	伝統・文化に関する 教育について	芸術・表現体験について	食育、スポーツなど健 やかな身体 の育成について	キャリア教育について	外国語教育について	特別支援教育について
教師全体	16	18	73	65	31	33	34	44	16	9	26	16	19	27
20代	13	13	66	60	36	31	33	42	11	8	25	15	15	24
30代	17	17	69	60	37	36	35	43	14	7	27	16	18	27
40代	17	19	75	69	33	32	32	45	16	8	24	19	21	28
50代	17	22	79	69	22	34	35	45	21	13	27	14	21	29

表21 年代別にみた教育関連情報入手「A.教育界の動向をめぐる情報を集める時」(小学校)

(%)

	同じ学校の 教師 から	学校を越 えた教師 仲間から	教科単位 などの研究 会を通して	教育専門 の新聞や 雑誌から	テレビ番組 から	新聞から	書籍から	インターネッ トで情報検 索して	教育関連 のホーム ページ から	メールマガ ジンやメー リングリス トから	ソーシャル メディア から
教師全体	68	41	34	36	47	56	33	49	28	3	3
20代	78	46	26	32	53	39	26	50	25	2	7
30代	71	44	34	33	46	54	30	50	29	3	4
40代	69	41	38	38	43	59	34	50	30	4	3
50代	61	37	34	39	50	65	37	47	27	3	1

表22 年代別にみた教育関連情報入手「B.授業の方法を工夫したい時」(小学校)

(%)

	同じ学校の 教師 から	学校を越 えた教師 仲間から	教科単位 などの研究 会を通して	教育専門 の新聞や 雑誌から	テレビ番組 から	新聞から	書籍から	インターネッ トで情報検 索して	教育関連 のホーム ページ から	メールマガ ジンやメー リングリス トから	ソーシャル メディア から
教師全体	77	50	54	41	12	8	55	70	36	2	2
20代	89	57	52	36	9	6	48	67	30	3	3
30代	80	52	54	39	14	7	54	74	41	1	1
40代	75	48	56	43	14	10	58	73	39	3	2
50代	69	45	52	42	10	9	57	66	34	3	1



表23 年代別にみた教育関連情報入手「C.メディアを使った授業の工夫をしたい時」(小学校)

(%)

	同じ学校の教師から	学校を越えた教師仲間から	教科単位などの研究会を通して	教育専門の新聞や雑誌から	テレビ番組から	新聞から	書籍から	インターネットで情報検索して	教育関連のホームページから	メールマガジンやメルマガリストから	ソーシャルメディアから
教師全体	66	30	26	20	13	6	22	61	28	2	2
20代	<b>72</b>	35	26	17	9	5	18	59	24	2	<b>3</b>
30代	65	<b>35</b>	30	21	16	6	22	64	31	1	2
40代	64	29	27	19	14	7	22	64	29	2	2
50代	65	27	23	22	13	7	23	56	27	2	1

表24 年代別にみた教師の授業でのメディア機器利用(小学校)

(%)

	テレビ受像機	録画再生機	パソコン	インターネット	タブレット端末	プロジェクター	電子黒板	実物投影機	デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ
教師全体	61	59	81	73	16	49	27	61	82
20代	62	50	80	72	<b>20</b>	53	28	62	83
30代	65	57	83	<b>76</b>	<b>19</b>	46	27	60	84
40代	61	<b>63</b>	<b>85</b>	<b>78</b>	17	51	<b>32</b>	64	84
50代	57	62	77	65	10	46	22	59	79

表25 年代別にみた児童のメディア機器利用(小学校) (「パソコン」、「電子黒板」、「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」、「タブレット端末」)

(%)

	いずれかで児童使用あり
教師全体	64
20代	60
30代	63
40代	<b>69</b>
50代	62

表26 年代別にみたメディア教材利用(小学校)

(%)

	A. NHK学校放送番組	B. 「A」以外のNHKの放送番組	C. NHK以外の放送番組	D. NHKデジタル教材	E. 「D」以外のインターネット上のコンテンツや動画、静止画	F. 指導者用のデジタル教科書	G. 「F」以外の、パソコン用教材	H. 市販のビデオ教材やDVD教材	I. あなたや他の先生が作成した教材(自作教材)	A.、I.のどの教材も利用しなかった
教師全体	44	9	9	38	41	43	24	44	41	10
20代	39	6	6	37	39	42	15	32	43	11
30代	45	8	10	<b>44</b>	45	47	26	39	<b>46</b>	9
40代	46	11	9	<b>42</b>	43	<b>48</b>	26	46	41	8
50代	44	11	10	29	36	36	25	<b>53</b>	36	12

表27 年代別にみた今後の授業でのメディア利用意向(小学校)

(%)

	電子黒板	タブレット端末	指導者用のデジタル教科書	学習者用のデジタル教科書	協働学習で利用できるソフトウェアやツール	教材などについて情報交換できるサイトやソーシャルメディア	いずれか1つ以上の利用意向あり
教師全体	68	68	59	45	27	25	96
20代	69	<b>74</b>	54	49	26	27	<b>98</b>
30代	67	<b>74</b>	60	45	<b>32</b>	24	96
40代	67	68	<b>63</b>	46	29	26	95
50代	68	60	56	43	22	23	95

#### 4-3-2 30代の小学校教師の特徴



30代の小学校教師の男女比は男性48%、女性52%で、女性の方がやや多いが、小学校教師全体と比べると男性の比率が高い(表16)。

担当している学年は低学年が29%と少なく、高学年が39%とやや多い(表17)。

日常の利用メディアをみると、もっとも多いのは「パソコン」の81%である。また、20代ほどではないが、「スマートフォン」の利用が74%と多く、タブレット端末の利用も21%と多い。「携帯電話」の利用は32%あるが、全体と比べると少ない(表18)。

デジタル機器の利用に関して積極的な教師は25%、消極的な教師は5%で、消極的な教師が少ない(表19)。

重視している教育課題は「コミュニケーション能力の育成について」(69%)、「言語活動の充実について」(60%)で多く、小学校教師全体と同じ傾向であるが、20代同様、全体と比べると少ない。逆に「ICTを活用した教育について」(37%)が他の年代より多いのが特徴的である。それ以外の項目は40代、50代と同様に万遍なく重視されており、20代教師よりはさまざまな教育課題を意識しているといえる(表20)。

「A.教育界の動向をめぐる情報を集める時」、「B.授業の方法を工夫したい時」、「C.メディアを使った授業の工夫をしたい時」の3つの場合の情報入手については、どの項目でも「同じ学校の教師から」が一番多く、全体と一致、他の情報源も基本的には全体と同様の傾向であり、20代とは異なる傾向がみられた。

より詳しくみていくと、「A.教育界の動向を

めぐる情報を集める時」(表21)では、「同じ学校の教師から」(71%)、「新聞から」(54%)、「インターネットで情報検索して」(50%)の順に多い。20代と比べると「テレビ番組から」が少なく「新聞から」が多いのが特徴的である。

「B.授業の方法を工夫したい時」(表22)では「同じ学校の教師から」(80%)、「インターネットで情報検索して」(74%)、「教科単位などの研究会を通して」(54%)、「書籍から」(54%)が多い。また、「教育関連のホームページから」(41%)が20代では30%であったのに比べると多い。

「C.メディアを使った授業の工夫をしたい時」(表23)では、「同じ学校の教師から」(65%)、「インターネットで情報検索して」(64%)、「学校を越えた教師仲間から」(35%)の順に多く、20代同様、インターネットだけでなく対面でも情報を得ているといえる。

全体として30代の教師は、小学校教師全体と同様に「同じ学校の教師から」情報を入手しているが、20代と比べると、教科単位の研究会に参加したり、新聞や書籍などからも情報を入手したりして、情報の入手源が多様になっているといえる。

30代の教師の授業でのメディア機器の利用をみていく(表24)。「デジタルカメラ」(84%)、「パソコン」(83%)、「インターネット」(76%)の順に多く、全体の傾向と変わらない。特徴的なのはインターネットの利用がやや多いことと、20代同様、タブレット端末の利用がやや多いことである。

児童にパソコンなどの機器を利用させている割合は63%と、全体と変わらない(表25)。

利用しているメディア教材をみると、「F.指導者用のデジタル教科書」(47%)、「I.自作教

材」(46%)、「A. NHK学校放送番組」(45%)と「E. インターネット上のコンテンツ」(45%)、「D. NHKデジタル教材」(44%)の順に多い(表26)。このうち、「I. 自作教材」(46%)と「D. NHKデジタル教材」(44%)の割合が全体と比べて多い。また、「H. ビデオ教材」の利用は39%で、20代よりは多いが、40代、50代より少ない。

全体に20代より多様なメディア教材を利用していること、自分で教材を作ったり、NHKデジタル教材やインターネット上のコンテンツなどネット上のコンテンツを使ったりする一方、ビデオ教材の利用はやや少ないという傾向がみられた。

今後利用したいメディアは「タブレット端末」(74%)、「電子黒板」(67%)、「指導者用のデジタル教科書」(60%)の順で全体と同様であるが、タブレット端末が全体より多いことが20代と同様である(表27)。また、割合は多くないが、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」(32%)が全体より多く、タブレット端末の利用意向が多いこととあわせて考えると、今後、児童が協働学習でタブレット端末を利用する様子を考えている教師が一定数いるようである。

30代教師のメディア利用を3点にまとめる。1点目は20代と同様に、スマートフォンなどの新しいメディアを日常生活で利用していることである。

2点目は重視している教育課題や情報入手手段が20代より幅広くなっていることである。

3点目は多様なメディア教材を利用しており、タブレット端末や協働学習で利用できるソフトウェアやツールなど、新規メディアへの関心がみられることである。

30代教師は20代と比べると経験を積んでいる分、多様な情報源にあたり、多様なメディアを授業で利用しようとしている様子がみとれる。

#### 4-3-3 40代の小学校教師の特徴



40代の小学校教師の男女比は男性40%、女性60%と小学校教師全体と一致している(表16)。担当している学年は低学年、中学年が3割程度、高学年が4割とやや多く、30代と近い状況である(表17)。

日常利用しているメディアは多い順に「パソコン」(86%)、「スマートフォン」(53%)、「携帯電話」(48%)で、スマートフォンの利用が携帯電話の利用を上回っているが、小学校教師全体でみると、スマートフォンの割合は低く、携帯電話の割合は高い。また「携帯デジタルプレーヤー」(8%)の利用は全体より少ない(表18)。

デジタル機器の利用については積極的な教師、消極的な教師の割合とも、全体とほぼ一致している(表19)。

重視している教育課題は「コミュニケーション能力の育成について」(75%)、「言語活動の充実について」(69%)、「いじめ問題について」(45%)の順に多く、「言語活動の充実について」が全体と比べるとやや多いが、全般的に同じ傾向である(表20)。

「A. 教育界の動向をめぐり情報を集める時」、「B. 授業の方法を工夫したい時」、「C. メディアを使った授業の工夫をしたい時」の3つの場合の情報入手については、どの項目でも「同じ学校の教師から」が一番多く、全体と一致してい

る。

より詳しくみていくと、「A.教育界の動向をめぐる情報を集める時」(表21)では、「同じ学校の教師から」(69%)、「新聞から」(59%)、「インターネットで情報検索して」(50%)の順に多い。他の年代と比べると「テレビ番組から」(43%)がやや少なく、「教科単位などの研究会を通して」(38%)がやや多いのが特徴的である。

「B.授業の方法を工夫したい時」(表22)では「同じ学校の教師から」(75%)、「インターネットで情報検索して」(73%)、「書籍から」(58%)の順で多く、全体とほぼ一致している。

「C.メディアを使った授業の工夫をしたい時」(表23)も、「同じ学校の教師から」(64%)、「インターネットで情報検索して」(64%)で多く、全体とほぼ一致している。

全般に40代教師は多様な情報源から教育情報を得ているといえる。

40代の教師の授業でのメディア機器の利用をみていく(表24)。「パソコン」(85%)、「デジタルカメラ」(84%)、「インターネット」(78%)の順に多く、パソコンとインターネットの利用が他の年代より多い。それ以外のメディア機器も全般に利用が多く、「録画再生機」(63%)、「電子黒板」(32%)の利用も他の年代を上回っており、古いメディアである録画再生機と新しいメディアである電子黒板の両方ともに使いこなしている様子が見られる。

児童にパソコンなどの機器を利用させている割合も69%と、小学校教師全体より多く、教師、児童ともにメディア機器をよく利用しているといえる(表25)。

利用しているメディア教材をみると(表26)、「F.指導者用のデジタル教科書」(48%)、「A.

NHK学校放送番組」(46%)、「H.ビデオ教材」(46%)となり、「D.NHKデジタル教材」(42%)の利用も30代ほどではないが、小学校教師全体と比べて多い。40代教師は電子黒板で指導者用デジタル教科書やNHKデジタル教材を利用する一方、録画再生機でNHK学校放送番組やビデオ教材も見せるという幅広い利用をしている姿がみられる。

今後利用したいメディア(表27)は「タブレット端末」(68%)、「電子黒板」(67%)、「指導者用のデジタル教科書」(63%)の順で全体と一致しているが、指導者用のデジタル教科書の割合が高い。表26に示したように現在、指導者用のデジタル教科書を利用している教師も多く、授業での利用に手ごたえを感じている様子がうかがえる。

40代教師の特徴を3点にまとめる。1点目は重視している教育課題や、情報入手手段が幅広く、多様な情報を対面からもメディアからも入手していることである。

2点目は、日常生活でスマートフォンなどの新しいメディアを使っている割合はそれほど高くないが、授業では新しいメディアである電子黒板や、指導者用のデジタル教科書をよく利用している点である。

3点目は新しいメディアの利用が多いだけでなく、放送番組やビデオ教材を録画再生機で再生するという従来のメディア利用も行っていることである。

総じて40代教師は、私生活では必ずしも新しいメディアを利用していないが、授業では新旧のメディアをバランスよく利用しているといえる。

#### 4-3-4 50代の小学校教師の特徴



50代の小学校教師の男女比は男性27%、女性73%と女性が多い(表16)。小学校教師の男女比はほぼ4:6であるが、管理職になる割合が男性

の方が多いため、50代で担任をもつ女性の割合が高いと考えられる。担当している学年は低学年で41%と多く、高学年が26%と少ない(表17)。

日常利用しているメディア(表18)は、多い順に「パソコン」(85%)、「携帯電話」(60%)、「スマートフォン」(34%)で、携帯電話の利用が多く、スマートフォンと「タブレット端末」(10%)、「携帯デジタルプレーヤー」(6%)の利用が少なく、新しいメディア機器の授業や仕事以外での利用は盛んではない。

またデジタル機器利用に積極的な教師が15%、消極的な教師が14%と、他の年代と比べると積極的な教師が少なく、消極的な教師が多いのも特徴的である(表19)。

重視している教育課題(表20)は「コミュニケーション能力の育成について」(79%)、「言語活動の充実について」(69%)、「いじめ問題について」(45%)の順に多く、「コミュニケーション能力の育成について」と「言語活動の充実について」が他の年代より多い。さらに、それぞれの割合は多くないが、「防災教育・復興教育について」(22%)、「伝統・文化に関する教育について」(21%)、「芸術・表現体験について」(13%)などを重視する教師が他の年代よりも多く、教育課題に対して幅広く目を配っている様子うかがえる。その一方で、「ICTを活用した教育について」(22%)は他の年代と比べて少ない。

「A. 教育界の動向をめぐる情報を集める時」、 「B. 授業の方法を工夫したい時」、 「C. メディアを使った授業の工夫をしたい時」の3つの場合の情報入手については、「同じ学校の教師から」が多いものの、他の年代とは少し異なる傾向を示している。

「A. 教育界の動向をめぐる情報を集める時」(表21)では、「新聞から」(65%)、「同じ学校の教師から」(61%)、「テレビ番組から」(50%)の順に多い。「新聞から」が他の年代より多く、「同じ学校の教師から」が少ないのが特徴的である。また書籍から(37%)も他の年代と比べると多い。50代の教師は、同僚からよりも新聞やテレビ、書籍などから情報をよく入手している。

「B. 授業の方法を工夫したい時」(表22)では「同じ学校の教師から」(69%)、「インターネットで情報検索して」(66%)、「書籍から」(57%)の順は全体の傾向と一致しているが、「同じ学校の教師から」も「インターネットで情報検索して」も他の年代と比べると少ない。

「C. メディアを使った授業の工夫をしたい時」(表23)では、「同じ学校の教師から」(65%)、「インターネットで情報検索して」(56%)、「学校を越えた教師仲間から」(27%)の順であることは全体の傾向とほぼ一致しているが、「インターネットで情報検索して」、「学校を越えた教師仲間から」ともに他の年代と比べて少ない。

50代教師は全般に同僚や教師仲間から教育関連の情報を入手することが他の年代より少ないようである。これは、すでに教育情報に関する知識があったり、確立した授業方法を会得したりしているという意識があるためであろう。

50代の教師の授業でのメディア機器の利用をみていく(表24)。「デジタルカメラ」(79%)、

「パソコン」(77%)、「インターネット」(65%)の順に多いのは全体の傾向と一致するが、いずれの利用も他の年代と比べると少ない。ほかにも、「テレビ受像機」(57%)、「電子黒板」(22%)、「タブレット端末」(10%)の利用が他の年代より少なく、メディア機器の利用はあまり活発ではない。

ただし、児童にパソコンなどのメディアを利用させている割合(62%)は他の年代と変わらない(表25)。

利用しているメディア教材をみると(表26)、「H. ビデオ教材」(53%)、「A. NHK学校放送番組」(44%)で多く、ビデオ教材の利用は小学校教師全体より多い。一方、「F. 指導者用のデジタル教科書」(36%)、「I. 自作教材」(36%)、「E. インターネット上のコンテンツ」(36%)、「D. NHKデジタル教材」(29%)の利用は他の年代より少なく、全般にビデオ教材以外の利用は低調である。

今後利用したいメディア(表27)は「電子黒板」(68%)、「タブレット端末」(60%)、「指導者用のデジタル教科書」(56%)の順であることは他の年代と変わらないが、タブレット端末の利用意向が他の年代より少ない。ただし、なんらかのメディア利用の意向がある教師は95%で、他の年代と変わらない。

50代教師の特徴を3点にまとめる。1点目は、さまざまな教育課題に対して幅広く目を配っていることである。

2点目はメディア機器、メディア教材の利用とも小学校教師全体と比べると少ないことである。すでに独自の授業スタイルを確立しているので、新規のメディアを利用する必要がないと考えているのかもしれない。

3点目はその一方で、新規メディアの利用意

向は他の年代とあまり変わらないことである。現時点ではメディアを利用できない環境にいたり、必要としていなかったりするが、新規メディアへの関心や期待する部分はあるようである。

#### 4-3-5 年代による特徴のまとめ

20代、30代、40代、50代のメディア利用をまとめると、年代ごとのメディア経験や日常生活で利用しているメディア状況と、教師としての経験の2つの側面があいまって、利用に反映されているといえる。若い世代は新しいメディアへの親和性が高いが、授業での利用や、そもそもの教育情報や課題への目の配り方がやや足りないのに対して、ベテランの世代になると、新規メディアを必ずしもすぐには使わないが、課題意識はあるので、有効なメディアであれば利用するという姿勢があるようである。

### 4-4 「デジタル機器に対する意識」による分析

2014年度の小学校教師調査では、デジタル機器やサービスに対する意識についての質問をしている。その質問結果から、「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に肯定的に回答するなど、デジタル機器の利用に積極的な教師と、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に肯定的に回答するなど、デジタル機器の利用に消極的な教師、そしてそれ以外と3つのグループに分けることができる。

デジタル機器の利用に積極的な教師は全体

の22%、デジタル機器の利用に消極的な教師は8%、それ以外の教師は70%であった。

ここからは、デジタル機器の利用に積極的な教師がどういう特性をもっているかをみていく。

デジタル機器に積極的な教師は性別でみると男性59%、女性41%で、全体の男女比と比べると男性の比率が高い(表28)。また、年代は20代で全体より多く、50代で全体より少なく、若い世代に多い(表29)。

専門分野別では社会(23%)、算数(21%)、体育(20%)、国語(20%)、理科(16%)の順に多いが、このうち、算数、理科、体育を専門としている教師の割合が全体より多く、理科系の教師でデジタル機器に積極的な割合が多い。また、情報教育／視聴覚教育・放送教育を専門としている教師も、15%であるが全体に比べて多い(表30)。

重視している教育課題は「コミュニケーション能力の育成について」(71%)、「言語活動の充実について」(65%)が上位2項目で全体と一致する。次に多いのが、「ICTを活用した教育について」(53%)、「情報モラル教育について」(44%)で、この2項目は、小学校教師全体と比べて多いのが非常に特徴的である(表31)。

日常生活で利用しているメディアは「パソコン」(93%)、「スマートフォン」(77%)、「ブルーレイディスクレコーダー」(41%)をはじめ、「携帯電話」(33%)以外のすべての項目で全体より多い(表32)。

授業でのメディア機器の利用をみてみると、「パソコン」(91%)、「デジタルカメラ」(87%)、「インターネット」(82%)の順となるが、すべての機器で小学校教師全体より利用が多い(表33)。

また、児童にパソコンなどの機器を利用させている割合をみると、デジタル機器の利用に積極的な教師は73%で全体より高い(表34)。

デジタル機器に積極的な教師が授業で利用しているメディア教材をみると、「A. NHK学校放送番組」(51%)、「D. NHKデジタル教材」(51%)、「I. 自作教材」(51%)、「E. インターネット上のコンテンツ」(49%)、「F. 指導者用のデジタル教科書」(48%)のいずれもが全体より多く、多様なメディア教材を利用している様子がうかがえる(表35)。

今後利用したいメディア(表36)は、「タブレット端末」(82%)、「電子黒板」(73%)、「指導者用のデジタル教科書」(62%)の順となり、小学校教師全体と一致している。特にタブレット端末、電子黒板の割合が全体より多い。また、「学習者用のデジタル教科書」(55%)、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」(37%)、「教材などについて情報交換できるサイトやソーシャルメディア」(34%)のいずれもが全体より多い。デジタル機器に積極的な教師は新しいメディアへの利用意向も高いといえる。

また、次項で紹介する「児童中心・新規型」の教師の割合も29%と、小学校教師全体と比べて多い(表37)。

デジタル機器の利用に対して積極的な教師の特徴をまとめると、男性の若年層で多く、理科系を専門としている教師が多い。重視している教育課題は「ICTを活用した教育について」や「情報モラル教育について」の割合が他より多い。こうした教師は日常生活でも授業でも多くの種類の機器やメディア教材を利用しており、児童にもよく利用させている。また、今後の利用意向も高い。デジタル機器に対する意識と利用の実態が一致しているといえる。

全体としては22%であるが、こうした教師が、メディア活用という点では他の教師に影響を与え、学校内外での利用を進めているのではないかと考えられる。

表28 デジタル機器利用観別にみた性別 (小学校) (%)

	男性	女性	無回答
教師全体 (n=2,387)	40	60	0
デジタル機器利用積極教師 (n=524)	<b>59</b>	41	0
デジタル機器利用消極教師 (n=184)	22	<b>78</b>	1
それ以外 (n=1,679)	36	<b>64</b>	0

- 「デジタル機器利用積極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した教師
- 「デジタル機器利用消極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した教師
- 「中間」は上記以外の教師

表29 デジタル機器利用観別にみた年代の分布 (小学校) (%)

	20代	30代	40代	50代
教師全体	17	22	30	29
デジタル機器利用積極教師	<b>27</b>	25	27	20
デジタル機器利用消極教師	5	14	27	<b>54</b>
それ以外	16	22	31	30

表30 デジタル機器利用観別にみた専門分野 (小学校) (%)

	国語	社会	算数	理科	生活科	音楽	図画工作	家庭科	体育	道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	特別支援教育	情報教育／視聴覚・放送教育
教師全体	25	20	17	12	5	9	6	5	17	6	8	3	5	7	8
デジタル機器利用積極教師	20	23	<b>21</b>	<b>16</b>	5	6	7	3	<b>20</b>	5	8	3	6	6	<b>15</b>
デジタル機器利用消極教師	<b>41</b>	15	10	7	8	<b>14</b>	6	4	10	9	11	3	4	9	3
それ以外	25	20	17	11	5	10	6	5	16	6	8	3	6	8	6



表31 デジタル機器利用観別にみた重視している教育課題（小学校）

（％）

	国際調査などを基にした学力について	防災教育・復興教育について	コミュニケーション能力の育成について	言語活動の充実について	ICTを活用した教育について	情報モラル教育について	道徳教育のあり方について	いじめ問題について	伝統・文化に関する教育について	芸術表現体験について	食育、スポーツなど健全な身体育成について	キャリア教育について	外国語教育について	特別支援教育について
教師全体	16	18	73	65	31	33	34	44	16	9	26	16	19	27
デジタル機器利用積極教師	<b>20</b>	21	71	65	<b>53</b>	<b>44</b>	32	41	18	10	28	<b>20</b>	21	24
デジタル機器利用消極教師	13	14	71	68	5	24	28	41	20	9	24	9	14	32
それ以外	16	18	74	65	28	31	35	44	16	9	25	16	19	28

表32 デジタル機器利用観別にみた日常生活で利用しているメディア（小学校）

（％）

	携帯電話	スマートフォン	タブレット端末 (iPadなど)	パソコン	携帯デジタルプレーヤー (iPodなど)	電子書籍リーダー	ブルーレイディスクレコーダー	携帯電話やカーナビなどのワンセグ放送
教師全体	43	58	17	83	14	3	31	24
デジタル機器利用積極教師	33	<b>77</b>	<b>28</b>	<b>93</b>	<b>22</b>	<b>5</b>	<b>41</b>	<b>32</b>
デジタル機器利用消極教師	<b>66</b>	35	5	76	3	1	21	10
それ以外	43	55	14	81	13	3	30	23

表33 デジタル機器利用観別にみた教師の授業でのメディア機器利用（小学校）

（％）

	テレビ受像機	録画再生機	パソコン	インターネット	タブレット端末	プロジェクター	電子黒板	実物投影機	デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ
教師全体	61	59	81	73	16	49	27	61	82
デジタル機器利用積極教師	<b>71</b>	<b>66</b>	<b>91</b>	<b>82</b>	<b>22</b>	<b>56</b>	<b>33</b>	<b>69</b>	<b>87</b>
デジタル機器利用消極教師	55	60	75	59	8	38	25	51	83
それ以外	58	57	79	71	15	48	26	60	81

表34 デジタル機器利用観別にみた児童のメディア機器利用（小学校）（「パソコン」、「電子黒板」、「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」、「タブレット端末」）

（％）

	いずれかで児童使用あり
教師全体	64
デジタル機器利用積極教師	<b>73</b>
デジタル機器利用消極教師	64
それ以外	61

表35 デジタル機器利用観別にみたメディア教材利用（小学校）

(%)

	A. NHK学校放送番組	B. 「A」以外のNHKの放送番組	C. NHK以外の放送番組	D. NHKデジタル教材	E. 「D」以外のインターネット上のコンテンツや動画、静止画	F. 指導者用のデジタル教科書	G. 「F」以外の、パソコン用教材	H. 市販のビデオ教材やDVD教材	I. あなたや他の先生が作成した教材（自作教材）	A. I. のどの教材も利用しなかった
教師全体	44	9	9	38	41	43	24	44	41	10
デジタル機器利用積極教師	<b>51</b>	<b>11</b>	<b>12</b>	<b>51</b>	<b>49</b>	<b>48</b>	28	43	<b>51</b>	5
デジタル機器利用消極教師	32	7	6	21	29	37	19	39	25	<b>17</b>
それ以外	44	9	8	35	39	43	24	45	40	11

表36 デジタル機器利用観別にみた今後の授業でのメディア利用意向（小学校）

(%)

	電子黒板	タブレット端末	指導者用のデジタル教科書	学習者用のデジタル教科書	協働学習で利用できるソフトウェアやツール	教材などについて情報交換できるサイトやソーシャルメディア	いずれか1つ以上の利用意向あり
教師全体	68	68	59	45	27	25	96
デジタル機器利用積極教師	<b>73</b>	<b>82</b>	62	<b>55</b>	<b>37</b>	<b>34</b>	97
デジタル機器利用消極教師	61	41	47	32	13	14	<b>90</b>
それ以外	67	67	59	44	25	23	96

表37 デジタル機器利用観別にみた授業を進める考え方（小学校）

(%)

	児童中心型	教師主導型	それ以外
教師全体	22	10	69
デジタル機器利用積極教師	<b>29</b>	<b>5</b>	66
デジタル機器利用消極教師	<b>13</b>	<b>20</b>	67
それ以外	21	10	70

※「児童中心・新規型教師」, 「教師主導・伝統重視型教師」について

Qあなたは授業を行う際に、どのようなことを重視しておられますか。あなた自身の考えに近いほうをひとつずつ選んでお答えください。

- (1) 1「確立された指導方法を使って授業をする」  
2「新しい授業方法を、積極的に取り入れてみる」
- (2) 1「児童の自発的な学習をうながすことに重点をおいて授業をする」  
2「教師主導で、必要なことをきちんとおさえるように授業をする」
- (3) 1「一人一人の子どもの得意な分野を伸ばすことを大事にする」  
2「子どもの不得意分野をなくして、確実に力がつくことを大事にする」
- 「児童中心・新規型教師」……設問(1)では「2」に、設問(2)と(3)では「1」に回答した教師。「教師主導・伝統重視型教師」……設問(1)では「1」に、設問(2)と(3)では「2」に回答した教師。「それ以外」……上記のいずれにも当てはまらない教師。

## 4-5 「授業を進める考え方」による分析

2014年度の小学校教師調査では、授業を進めるにあたっての教師の考え方を尋ねて、その結果から「児童中心・新規型」、「教師主導・伝統重視型」、「それ以外」の3つに教師のタイプ分けを行った。

結果をみてみると「それ以外」の教師が圧倒的に多く(全教師の69%)、「児童中心・新規型」(22%)、「教師主導・伝統重視型」(10%)となる。

ここからは、「児童中心・新規型」の教師がどのような特性をもっているかを明らかにしていく。

「児童中心・新規型」の教師は男性49%、女性51%で、小学校教師全体と比べると男性で多く、女性で少ない(表38)。年代は20代から50代まで小学校教師全体とほぼ同様の割合である(表39)。

専門分野は国語(24%)、社会(24%)、体育(18%)、算数(17%)、理科(14%)の順に多く、小学校教師全体と変わらないが、社会科でやや多い。また、全体としては少ないが、特別支援教育(10%)は小学校教師全体と比べるとやや多い。個に対応する場面が多い特別支援教育の考え方と児童中心の考え方に類似性があるためと考えられる(表40)。

重視している教育課題(表41)は多い順に「コミュニケーション能力の育成について」(77%)、「言語活動の充実について」(66%)、「いじめ問題について」(46%)で、全体と一致するが、「コミュニケーション能力の育成について」が小学校教師全体と比べて多い。また数は多くないが、「ICTを活用した教育について」

(38%)、「外国語教育について」(24%)、「防災教育・復興教育について」(22%)、「キャリア教育について」(20%)、「芸術・表現教育について」(13%)で、小学校教師全体より多く、幅広い課題について重視している。

日常生活で利用しているメディア(表42)が「パソコン」(86%)、「スマートフォン」(67%)、「携帯電話」(39%)の順に多いのは小学校教師全体と一致しているが、「スマートフォン」、「タブレット端末」(22%)、「携帯デジタルプレーヤー」(18%)で全体より多く、新しいメディアを日常生活で利用している様子がみられる。

授業でのメディア機器の利用をみてみると、「パソコン」(85%)、「デジタルカメラ」(85%)、「インターネット」(78%)の順となる。小学校教師全体と比べると「パソコン」、「インターネット」、「タブレット端末」(19%)の利用が多い(表43)。

また、児童にパソコンなどの機器を利用させている割合をみると、「児童中心・新規型」の教師は71%と全体より高い(表44)。

「児童中心・新規型」の教師が授業で利用しているメディア(表45)をみると、「I. 自作教材」(49%)、「A. NHK学校放送番組」(46%)、「F. 指導者用のデジタル教科書」(46%)、「H. ビデオ教材」(46%)の順で多く、小学校教師全体の傾向とほぼ一致するが、「I. 自作教材」が多いのが特徴的である。児童の実態にあわせた教材を自作している姿勢の表れと考えられる。

今後利用したいメディア(表46)は、「タブレット端末」(75%)、「電子黒板」(67%)、「指導者用のデジタル教科書」(57%)の順で、小学校教師全体と一致するが、「タブレット端末」で全体より多い。また、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」(38%)、「教材などにつ

いて情報交換できるサイトやソーシャルメディア」(30%)が全体より多い。児童がタブレット端末を利用して協働学習する、教師がソーシャルメディアなどで情報交換することに対して積極的な姿勢があるようである。

授業を進める考え方で「児童中心・新規型」とした教師の特徴をまとめると、男性でやや多いが、年代による差はなく、幅広く教育課題に興味をもっており、日常生活でも新しいメディア機器を利用している。授業でも自身がメディアを利用するだけでなく、児童にも利用させている。またタブレット端末や協働学習で利用できるソフトウェアやツールへの関心も高い。全般に児童中心の授業を行うために新規メディアが利用できないか、柔軟に取り組んでいる姿勢がうかがえる。

## 4-6 属性や意識でみる小学校教師のメディア利用の特徴

本章では、小学校教師のメディア利用の実態をより詳細にみていくために、まず「担当学年(低学年, 中学年, 高学年)」、「年代(20代, 30代, 40代, 50代)」の2つの属性でその特徴をみていった。

小学校の6年間は発達段階が異なる子どもを対象としており、教科も低学年, 中学年, 高学年で異なる。こうしたそれぞれの学年がもつ特性とメディア利用の実態が対応している様子が、低中高の学年ごとに特徴をみていくことで明らかになった。

また、20代, 30代, 40代, 50代という年代でみていくと、それぞれの世代のメディア経験や日常生活で利用しているメディア状況と、教師としての経験の2つの側面があいまって授業

でのメディア利用に反映している姿がみえた。

その上で、新規メディアの利用を積極的に進める要因の1つと考えられる「デジタル機器に対する意識が積極的な教師」と「授業スタイルが児童中心・新規型の教師」をみることで、メディア利用を積極的に進めている層と、新しい授業方法を確立しようとしている層に類似する点があることがみえてきた。

小学校教師について全体の傾向を分析することとあわせて、こうした属性による分析を行っていくことで、メディア利用の実態や今後授業に必要なメディア環境が明らかになってくると考える。

表38 「授業を進める考え方」別にみた性別(小学校)

	男性	女性	無回答
教師全体 (n=2,387)	40	60	0
児童中心型 (n=521)	49	51	0
教師主導型 (n=227)	38	61	1
それ以外 (n=1,639)	37	63	1

※「児童中心・新規型教師」、「教師主導・伝統重視型教師」についてQあなたは授業を行う際に、どのようなことを重視しておられますか。あなた自身の考えに近いほうをひとつずつ選んでお答えください。

- (1) 1「確立された指導方法を使って授業をする」  
2「新しい授業方法を、積極的に取り入れてみる」
  - (2) 1「児童の自発的な学習をうながすことに重点をおいて授業をする」  
2「教師主導で、必要なことをきちんとおさえるように授業をする」
  - (3) 1「一人一人の子どもの得意な分野を伸ばすことを大事にする」  
2「子どもの不得意分野をなくして、確実に力がつくことを大事にする」
- 「児童中心・新規型教師」……設問(1)では「2」に、設問(2)と(3)では「1」に回答した教師。「教師主導・伝統重視型教師」……設問(1)では「1」に、設問(2)と(3)では「2」に回答した教師。「それ以外」……上記のいずれにも当てはまらない教師。

表39 「授業を進める考え方」別にみた年代の分布  
(小学校)

(%)

	20代	30代	40代	50代	無回答
教師全体	17	22	30	29	2
児童中心型	19	23	30	27	1
教師主導型	14	15	35	34	1
それ以外	17	23	29	29	2

表40 「授業を進める考え方」別にみた専門分野 (小学校)

(%)

	国語	社会	算数	理科	生活科	音楽	図画工作	家庭科	体育	道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	特別支援教育
教師全体	25	20	17	12	5	9	6	5	17	6	8	3	5	7
児童中心型	24	24	17	14	6	9	7	4	18	5	9	4	4	10
教師主導型	30	23	16	10	4	10	6	4	16	4	5	2	6	5
それ以外	25	18	17	11	5	9	6	5	16	7	8	3	6	7

表41 「授業を進める考え方」別にみた重視している教育課題 (小学校)

(%)

	国際調査などを基にした学力について	防災教育・復興教育について	コミュニケーション能力の育成について	言語活動の充実について	ICTを活用した教育について	情報モラル教育について	道徳教育のあり方について	いじめ問題について	伝統・文化に関する教育について	芸術・表現体験について	食育、スポーツなど健全な身体の育成について	キャリア教育について	外国語教育について	特別支援教育について
教師全体	16	18	73	65	31	33	34	44	16	9	26	16	19	27
児童中心型	19	22	77	66	38	36	36	46	15	13	28	20	24	27
教師主導型	12	15	67	63	21	24	27	43	13	7	25	11	13	25
それ以外	16	17	73	65	31	34	34	43	17	9	25	15	18	28

表42 「授業を進める考え方」別にみた日常生活で利用しているメディア (小学校)

(%)

	携帯電話	スマートフォン	タブレット端末 (iPadなど)	パソコン	携帯デジタルプレーヤー (iPodなど)	電子書籍リーダー	ブルーレイディスクレコーダー	携帯電話やカーナビなどのワンセグ放送
教師全体	43	58	17	83	14	3	31	24
児童中心型	39	67	22	86	18	4	35	27
教師主導型	49	45	11	79	11	1	34	19
それ以外	43	58	16	83	13	3	30	24

表43 「授業を進める考え方」別にみた教師の授業でのメディア機器利用（小学校）

(%)

	テレビ受像機	録画再生機	パソコン	インターネット	タブレット端末	プロジェクター	電子黒板	実物投影機	デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ
教師全体	61	59	81	73	16	49	27	61	82
児童中心型	65	63	<b>85</b>	<b>78</b>	<b>19</b>	50	30	64	85
教師主導型	58	57	79	67	8	52	29	59	78
それ以外	60	58	81	72	16	48	26	61	82

表44 「授業を進める考え方」別にみた児童のメディア機器利用（小学校）（「パソコン」、「電子黒板」、「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」、「タブレット端末」）

(%)

	いずれかで児童使用あり
教師全体	64
児童中心型	<b>71</b>
教師主導型	60
それ以外	62

表45 「授業を進める考え方」別にみたメディア教材利用（小学校）

(%)

	A. NHK学校放送番組	B. 「A」以外のNHKの放送番組	C. NHK以外の放送番組	D. NHKデジタル教材	E. 「D」以外のインターネット上のコンテンツや動画、静止画	F. 指導者用のデジタル教科書	G. 「F」以外のパソコン用教材	H. 市販のビデオ教材やDVD教材	I. あなたや他の先生が作成した教材（自作教材）	A. I.のどの教材も利用しなかった
教師全体	44	9	9	38	41	43	24	44	41	10
児童中心型	46	10	10	42	45	46	26	46	<b>49</b>	6
教師主導型	40	9	8	<b>30</b>	<b>33</b>	<b>37</b>	<b>16</b>	41	<b>26</b>	<b>15</b>
それ以外	44	9	9	38	41	43	24	44	40	10

表46 「授業を進める考え方」別にみた今後の授業でのメディア利用意向（小学校）

(%)

	電子黒板	タブレット端末	指導者用のデジタル教科書	学習者用のデジタル教科書	協働学習で利用できるソフトウェアやツール	教材などについて情報交換できるサイトやソーシャルメディア	いずれか1つ以上の利用意向あり
教師全体	68	68	59	45	27	25	96
児童中心型	67	<b>75</b>	57	47	<b>38</b>	<b>30</b>	<b>98</b>
教師主導型	69	<b>57</b>	56	45	22	<b>16</b>	96
それ以外	68	68	59	45	24	24	95

## 5 属性や意識でみる〈中学校教師〉のメディア利用

この章では2015年度実施の「NHK中学校教師のメディア利用と意識に関する調査」を基に、中学校教師のメディア利用と意識を担当教科や年代ごとにみていく。

### 5-1 2015年度「NHK中学校教師のメディア利用と意識に関する調査」概要

2015年度実施の中学校教師を対象とした調査の概要は以下に示すとおりである。

■調査実施期間：

2015年10月1日(木)～12月24日(木)

■調査対象：全国の中学校(休校を除く10,427校)から系統抽出した745校の理科担当教師745名、社会科担当教師745名計1,490名

【学校の抽出は、『全国学校総覧2015年版』(原書房刊)を用いて実施】

■調査方法：学校長あての調査協力依頼、無記名回答。郵送法で督促2回。基本的に2年生を担当している教師の回答を依頼した。

■有効回答数：1,071

有効回答率：72%

中学校には国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、外国語の9教科があるが、本調査では、これまでの同様の調査結果でメディア利用が多かった理科教師と社会科教師を対象に調査を実施した。従って本稿でいう中学校教師全体というのは理科教師と社会科教師の合計値であり、多い、少ないという記述も理科教師と社会科教師を比べ

た結果となる。

全体の男女比は、男性78%、女性21%で、理科、社会科とも男性教師の割合が高い(表47)。年代でみると20代から50代までそれぞれ25%前後でほぼ同様となっている(表48)。

本章では、中学校教師のメディア利用の実態をより詳細にみていくために、まず「担当教科(理科、社会科)」、「年代(20代、30代、40代、50代)」の2つの属性で、それぞれの特徴を明らかにする。

その上で、教師の意識に関する設問に対する結果から「デジタル機器に対する意識が積極的な教師」と、授業スタイルが「生徒自発・協働重視型」の教師について、その特徴をみていく。上記に属する教師はメディア利用を積極的に進めていると考えられるためである。

### 5-2 教科による特徴

ここからは理科、社会科教師のメディア利用についてみていく。なお理科、社会科を担当している教師が授業をしている場所は、理科教師は普通教室より理科室である場合が多く(30%の理科教師は授業の8割以上を理科室で実施)<sup>29)</sup>、社会科教師はほとんどの授業を教室で行っている。

調査結果の表は251頁から253頁に一括してまとめた。

#### 5-2-1 中学校理科教師の特徴

本調査に回答した理科教師の男女比は男性75%、女性25%と男性の方が多い(表47)。また、年代は20代(26%)、30代(25%)、40代(21%)、50代(26%)で大きな差はない(表48)。

日常生活で利用しているメディア（表49）は「パソコン」（93%）、「スマートフォン」（68%）、「携帯電話」（38%）、「ブルーレイディスクレコーダー」（38%）の順に多い。

デジタル機器の利用に対しての複数の質問を基にタイプ分けした結果をみると、デジタル機器の利用に積極的な教師の割合は31%である（表50）。

「A. 教育界の動向をめぐる情報を集める時」、  
「B. 授業の方法を工夫したい時」、  
「C. メディアを使った授業の工夫をしたい時」の3つの場面を設定した上で、情報入手手段について尋ねた結果が表51から表53である。理科教師はどの項目でも「同じ学校の教師から」と「インターネットで情報検索して」が多い。

より細かくみていくと、「A. 教育界の動向をめぐる情報を集める時」（表51）では、「同じ学校の教師から」（65%）、「インターネットで情報検索して」（62%）、「新聞から」（52%）、「テレビ番組から」（50%）の順に多く、口コミやインターネットとあわせて、テレビや新聞などのマスメディアから情報を得ていることがわかる。

「B. 授業の方法を工夫したい時」（表52）では、「インターネットで情報検索して」（81%）、「同じ学校の教師から」（64%）、「教科単位などの研究会を通して」（60%）の順に多く、教育界の動向全般と比べると、マスメディアではなく、教科の研究会のような専門的な場から情報を得ている。また、この項目で理科教師の「インターネットで情報検索して」は、社会科教師より多く、インターネットからも専門的な情報を得ているようである。

「C. メディアを使った授業の工夫をしたい時」（表53）では、インターネットで情報検索して」（75%）、「同じ学校の教師から」（51%）、「教

科単位などの研究会を通して」（40%）の順に多く、授業の方法を工夫したい時と同様な傾向を示している。

次に、中学校理科教師の授業でのメディア利用をみていく。

表54に示した9種類のメディア機器の授業での利用をみると、利用ありの多い順に、「パソコン」（81%）、「インターネット」（63%）、「実物投影機」（62%）、「録画再生機」（60%）、「デジタルカメラ」（57%）、「プロジェクター」（56%）、「テレビ受像機」（55%）となり、この7種については5割以上で利用されている。

理科教師は全般に授業で機器をよく利用している。特に社会科教師と比較して利用が多いのは、「パソコン」（81%）、「インターネット」（63%）、「実物投影機」（62%）、「デジタルカメラ」（57%）、「プロジェクター」（56%）である。

理科の授業は理科室で行われることが多く、そこにインターネットに接続されたパソコンとプロジェクターが常設されているとスムーズに利用できるため、利用が多いと考えられる。また、実物投影機、デジタルカメラの利用が多いのは、理科の授業では実験・観察を行う実物をその場で拡大提示したり、撮影した画像を基に説明したりすることが多いためであると考えられる。

生徒にパソコンなどのメディアを利用させている割合は30%で、社会科教師と同様で、教師が自分でメディアを利用する割合と比べると少ない（表55）。

次に表56に示した9種類のメディア教材の利用についてみる。理科教師の利用が多いのは、順に、「A. NHK学校放送番組」（45%）、「E. インターネット上のコンテンツ」（42%）、「I. 自作教材」（41%）、「H. ビデオ教材」（40%）



で、この4種については4割を超えている。

理科教師は全般に社会科教師よりも機器の利用もメディア教材の利用も多い。特に理科教師で利用が多いのは、「A. NHK学校放送番組」(45%)、「E. インターネット上のコンテンツ」(42%)、「D. NHKデジタル教材」(37%)、そして「F. 指導者用のデジタル教科書」(28%)である。

このうち、「NHK学校放送番組」、「NHKデジタル教材」については、中学校理科に対応した番組が9シリーズあるのに対して、中学校社会科に対応した番組は3シリーズしかないことが影響していると考えられる。

こうしたメディア教材にどんな効果を期待しているかをまとめたのが表57である。

理科教師の期待している効果は「生徒の関心・意欲を高める」(93%)、「生徒の知識・理解を深める」(75%)、「一斉提示することで、情報が早く確実に伝わる」(50%)の順に多い。

特に「生徒の知識・理解を深める」が社会科教師よりも多い。逆に「生徒の思考・判断を促す」(33%)、「生徒の活動が活性化する」(22%)、「授業で意見の共有や議論をする機会が増える」(12%)の3項目は社会科教師と比べると少なく、中学校理科教師は生徒の知識・理解を深める効果を求めて、メディア教材を利用することが多いといえる。

さらに、こうしたメディア教材を授業のどの

場面で利用しているのかをまとめたのが表58である。「授業の導入として利用する」(60%)、「教科書や資料集、板書を補う形で利用する」(54%)、「学習のまとめとして利用する」(52%)の順に多かった。

社会科教師と比べると、「授業の導入として利用する」ことが少なく、「学習のまとめとして利用する」ことが多い。理科の授業ではメディア教材を導入で使うだけでなく、実物を使った実験・観察を行った後に、まとめとして利用することが多いことや、期待している効果として知識・理解を重視しているので、メディア教材をまとめとして利用することで知識を定着させようとする人が多いためと考えられる。

表59に示した6種のメディアの今後の利用意向をみると、理科教師では「タブレット端末」(63%)、「電子黒板」(52%)、「指導者用のデジタル教科書」(42%)の順に多い。これは社会科教師とも一致している。ただし、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」(32%)は社会科教師より少ない。

以上をまとめると、中学校理科教師はメディア機器、メディア教材とも利用が多いこと、そして、その目的は「生徒の関心・意欲を高める」ためもあるが、「生徒の知識・理解を深める」目的意識も強いこと、その結果、メディア教材の利用場面も導入だけでなく、学習のまとめとしてもよく利用されているといえる。

表47 担当教科別に見た性別 (中学校) (%)

	男性	女性	無回答
教師全体 (n=1,071)	78	21	1
理科 (n=534)	75	25	1
社会 (n=537)	81	18	1

表48 担当教科別に見た年代分布 (中学校) (%)

	20代	30代	40代	50代	無回答
教師全体	25	23	24	27	1
理科	26	25	21	26	1
社会	23	21	27	28	1

表49 担当教科別にみた日常生活で利用しているメディア（中学校）

(%)

	携帯電話	スマートフォン	タブレット端末 (iPadなど)	パソコン	携帯デジタルブ レーヤー (iPodなど)	電子書籍 リーダー	ブルーレイ ディスク レコーダー	携帯電話や カーナビなどの ワンセグ 放送
教師全体	40	64	30	91	17	4	38	27
理 科	38	68	30	93	18	4	38	28
社 会	42	61	30	90	16	4	38	26

表50 担当教科別にみたデジタル機器利用観  
(中学校)

(%)

	デジタル機器 利用積極教師	デジタル機器 利用消極教師	それ以外
教師全体	29	5	66
理 科	31	4	66
社 会	27	6	67

- 「デジタル機器利用積極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した教師
- 「デジタル機器利用消極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した教師
- 「それ以外」は上記以外の教師

表51 担当教科別にみた教育関連情報入手「A.教育界の動向をめぐる情報を集める時」(中学校)

(%)

	同じ学校の教師 から	学校を越えた教師 仲間から	研究会を通して 研究単位などの	教科単位などの 研究会を通して	教育専門の新聞や 雑誌から	テレビ番組から	新聞から	書籍から	インターネットで 情報検索して	教育関連のホーム ページから	メールマガジンや メルマガリスト から	ソーシャルメディア から
教師全体	64	39	38	29	50	56	32	63	34	5	7	
理 科	65	40	37	25	50	52	27	62	31	5	6	
社 会	62	37	39	32	51	60	37	64	37	4	7	

表52 担当教科別にみた教育関連情報入手「B.授業の方法を工夫したい時」(中学校)

(%)

	同じ学校の教師 から	学校を越えた教師 仲間から	研究会を通して 研究単位などの	教科単位などの 研究会を通して	教育専門の新聞や 雑誌から	テレビ番組から	新聞から	書籍から	インターネットで 情報検索して	教育関連のホーム ページから	メールマガジンや メルマガリスト から	ソーシャルメディア から
教師全体	60	47	57	29	28	21	51	76	37	3	4	
理 科	64	50	60	25	27	13	47	81	40	4	3	
社 会	56	45	54	32	29	29	55	72	35	2	5	

表53 担当教科別にみた教育関連情報入手「C.メディアを使った授業の工夫をしたい時」(中学校)

(%)

	同じ学校の教師 から	学校を越えた教師 仲間から	研究会を通して 研究単位などの	教科単位などの 研究会を通して	教育専門の新聞や 雑誌から	テレビ番組から	新聞から	書籍から	インターネットで 情報検索して	教育関連のホーム ページから	メールマガジンや メルマガリスト から	ソーシャルメディア から
教師全体	51	35	37	18	28	14	24	72	30	2	4	
理 科	51	37	40	15	26	9	20	75	33	3	2	
社 会	52	34	35	21	31	20	29	68	27	2	5	

表54 担当教科別にみた教師の授業でのメディア機器利用（中学校）

（％）

	テレビ受像機	録画再生機	パソコン	インターネット	タブレット端末	プロジェクター	電子黒板	実物投影機	デジタルカメラ・カメラ
教師全体	53	58	75	59	26	50	24	45	44
理科	55	60	<b>81</b>	<b>63</b>	27	<b>56</b>	25	<b>62</b>	<b>57</b>
社会	50	56	<b>70</b>	<b>55</b>	25	<b>44</b>	23	<b>27</b>	<b>32</b>

表55 担当教科別にみた生徒のメディア機器利用

（中学校）（「パソコン」、「電子黒板」、「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」、「タブレット端末」）

（％）

	いずれかで生徒使用あり
教師全体	32
理科	30
社会	33

表56 担当教科別にみたメディア教材利用（中学校）

（％）

	A. NHK学校放送番組	B. 「A」以外のNHKの放送番組	C. NHK以外の放送番組	D. NHKデジタル教材	E. 「D」以外のインターネット上のコンテンツや動画、静止画	F. 指導者用のデジタル教科書	G. 「F」以外の、パソコン用教材	H. 市販のビデオ教材やDVD教材	I. 独自に撮影したり、編集したりしてあなたや他の先生が作成した教材（自作教材）	A.～I.までのどの教材も利用しなかった
教師全体	38	28	22	29	35	22	13	41	38	14
理科	<b>45</b>	30	22	<b>37</b>	<b>42</b>	<b>28</b>	15	40	41	<b>9</b>
社会	<b>30</b>	27	21	<b>21</b>	27	17	11	41	35	<b>18</b>

表57 担当教科別にみた期待するメディア教材の効果（中学校）

（％）

	生徒の関心・意欲を高める	生徒の思考・判断を促す	生徒の技能育成に役立つ	生徒の知識・理解を深める	個人の能力に合わせた学習ができる	一言提示することで、情報が早く確実に伝わる	授業で意見の共有や議論をする機会が増える	生徒の活動が活性化される
教師全体	94	39	10	68	4	48	18	27
理科	93	33	9	<b>75</b>	4	50	<b>12</b>	<b>22</b>
社会	95	<b>46</b>	10	62	3	46	<b>25</b>	<b>32</b>

表58 担当教科別にみたメディア教材の利用場面（中学校）

（％）

	授業の導入として利用する	授業の展開で利用する	学習のまとめとして利用する	発展教材として利用する	メディア教材を元に授業を進める	教科書や資料集、板書を捕う形で利用する	新しい話題や情報を示すのに利用する	生徒が自分たちで調べる活動に利用する
教師全体	66	44	44	30	14	52	27	9
理科	<b>60</b>	43	<b>52</b>	33	14	54	25	<b>7</b>
社会	<b>71</b>	45	<b>36</b>	27	14	50	29	<b>12</b>

表59 担当教科別にみた今後の授業でのメディア利用意向（中学校）

（％）

	電子黒板	タブレット端末	指導者用のデジタル教科書	学習者用のデジタル教科書	協働学習で利用できるソフトウェアやツール	教材などについて情報交換できるサイトやソーシャルメディア	いずれか1つ以上の利用意向あり
教師全体	54	64	42	33	37	26	93
理科	52	63	42	33	<b>32</b>	26	92
社会	56	64	42	32	<b>41</b>	27	94

## 5-2-2 中学校社会科教師の特徴

本調査に回答した社会科教師の男女比は男性81%、女性18%と男性の方が多(表47)。また、年代は20代(23%)、30代(21%)、40代(27%)、50代(28%)で、大きな差はない(表48)。

日常生活で利用しているメディアは「パソコン」(90%)、「スマートフォン」(61%)、「携帯電話」(42%)、「ブルーレイディスクレコーダー」(38%)の順に多い(表49)。

デジタル機器に対して積極的な教師の割合は27%であった(表50)。

「A. 教育界の動向をめぐる情報を集める時」, 「B. 授業の方法を工夫したい時」, 「C. メディアを使った授業の工夫をしたい時」の3つの場面を設定した上で、情報入手手段について尋ねた結果は、どの項目でも「同じ学校の教師から」と「インターネットで情報検索して」が多かった。

より細かくみていくと、「A. 教育界の動向をめぐる情報を集める時」(表51)では、「インターネットで情報検索して」(64%)、「同じ学校の教師から」(62%)、「新聞から」(60%)、「テレビ番組から」(51%)の順に多く、口コミやインターネットとあわせて、テレビや新聞などのマスメディアから情報を得ていることがわかる。これは理科教師とも一致している。また、「書籍から」(37%)が理科教師と比べて多い。

「B. 授業の方法を工夫したい時」(表52)では、「インターネットで情報検索して」(72%)、「同じ学校の教師から」(56%)、「書籍から」(55%)、「教科単位などの研究会を通して」(54%)の順に多く、教育界の動向の情報入手と比べると、マスメディアではなく、書籍や教科の研究会のような専門的な場から情報を得

ているといえる。また「書籍から」が、理科教師より多いのが特徴的である。

「C. メディアを使った授業の工夫をしたい時」(表53)では、「インターネットで情報検索して」(68%)、「同じ学校の教師から」(52%)、「教科単位などの研究会を通して」(35%)の順に多く、授業の方法を工夫したい時と同様な傾向を示している。なお、この項目でも「書籍から」(29%)が理科教師と比べて多く、社会科教師は全般に書籍から情報を得ることが多いといえる。

次に、中学校社会科教師の授業でのメディア利用をみていく。

表54に示した9種類のメディアの授業での利用をみると、利用ありの多い順に、「パソコン」(70%)、「録画再生機」(56%)、「インターネット」(55%)、「テレビ受像機」(50%)で、この4種については5割以上の社会科教師が利用している。

社会科教師は全般に理科教師よりも授業でメディア機器を利用していない。特に「デジタルカメラ」(32%)と「実物投影機」(27%)の利用が理科教師より少ない。社会科の授業では教材を拡大提示するよりも、地図や年表などの手元の資料を見たり、掛図のような大きな画面で説明したりする場面が多いためと考えられる。

なお、生徒にパソコンなどのメディアを利用させている割合は33%で、教師のメディア利用と比べて少ない(表55)。

次に表56に示した9種類のメディア教材の利用についてみてみると、社会科教師の利用が多いのは、順に、「H. ビデオ教材」(41%)、「I. 自作教材」(35%)、「A. NHK学校放送番組」(30%)で、利用が3割を超えているのはこの3

種だけで、理科教師と比べて少ない。A.～I.のどの教材も利用しなかった社会科教師は18%で、全般に社会科教師は機器の利用もメディア教材の利用も理科教師より少ない。

こうしたメディア教材にどんな効果を期待しているかをまとめたのが表57である。

社会科教師の期待している効果は「生徒の関心・意欲を高める」(95%)、「生徒の知識・理解を深める」(62%)、「一斉提示することで、情報が早く確実に伝わる」(46%)、「生徒の思考・判断を促す」(46%)の順に多い。

理科教師と比べると、「生徒の知識・理解を深める」が少なく、「生徒の思考・判断を促す」が多い。また、「生徒の活動が活性化する」(32%)、「授業で意見の共有や議論をする機会が増える」(25%)の2項目で多く、社会科教師は、理科教師と比べるとメディア教材に対して、生徒の思考をゆさぶったり、意見の共有や議論を行ったりするなどして、生徒の活動が活性化することを期待しているといえる。これは、理科で教える内容が、定理や法則を授業の中で理解させることが多いのに対して、社会科では特に公民などで、現在まさに起きている社会事象を基に考える場面があるためであると考えられる。

さらに、こうしたメディア教材を授業のどの場面で利用しているのかをまとめたのが表58である。

中学校社会科教師の授業でのメディア利用は、「授業の導入として利用する」(71%)、「教科書や資料集、板書を補う形で利用する」(50%)、「授業の展開で利用する」(45%)の順に多かった。

理科教師と比べると、「学習のまとめとして利用する」ことが少なく、「授業の導入として利

用する」ことが多く、異なる傾向を示している。メディア教材を導入や展開で利用し、事象や地名・人名などをまとめるのは教科書や資料集などで行う授業が多いためと考えられる。

表59に示した6種のメディアの今後の利用意向をみると、社会科教師は「タブレット端末」(64%)、「電子黒板」(56%)、「指導者用のデジタル教科書」(42%)の順に多い。これは理科教師をあわせた全体とも一致している。ただし、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」(41%)は理科教師と比べて多く、メディア教材に対して「授業で意見の共有や議論をする機会が増える」効果を理科教師より期待していることと一致した結果となっている。

以上をまとめると、社会科教師は全般に理科教師より機器やメディア教材の利用は少ないが、メディア教材に対して、授業の展開で利用することで生徒の思考・判断を促したり、意見の共有や議論を活性化したりする役割を期待している教師が理科より多い点特徴的であるといえる。

## 5-3 年代による特徴分析

ここからは、中学校教師のメディア利用の特徴を年代で差が表れているものを中心に、20代、30代、40代、50代の4つの年代に分けてみていく。それぞれの年代のメディア経験や、学習指導要領の経験については、第4章の図4(231頁)を参照されたい。表については一括して256頁から257頁に示した。

### 5-3-1 20代の中学校教師の特徴

20代教師の男女比は男性73%と女性27%で、男性が多い(表60)。

日常生活で利用しているメディア（表61）は「パソコン」（92%）、「スマートフォン」（85%）、「タブレット端末」（32%）、「携帯デジタルプレーヤー」（32%）の順に多く、スマートフォンと携帯デジタルプレーヤーの利用は他の年代より多い。逆に「携帯電話」（28%）、「ブルーレイディスクレコーダー」（28%）の利用が他の年代より少ないのが特徴的である。

20代教師の授業でのメディア機器の利用（表62）をみていくと、「パソコン」（74%）、「インターネット」（58%）、「プロジェクター」（51%）、「テレビ受像機」（50%）の順に多い。他の年代と比べると「録画再生機」（43%）で少なく、「タブレット端末」（34%）で多いのが特徴的である。

利用しているメディア教材（表63）をみると、「I. 自作教材」（41%）、「A. NHK学校放送番組」（37%）、「E. インターネット上のコンテンツ」（37%）、「D. NHKデジタル教材」（32%）の順に多い。他の年代と比べると、「H. ビデオ教材」（23%）、「B. 学校放送番組以外のNHK番組」（21%）、「C. NHK以外の放送番組」（16%）の利用が少なく、機器で録画再生機の利用が少ないことと一致している。

今後利用したいメディア（表64）は「タブレット端末」（67%）、「電子黒板」（58%）、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」（42%）、「指導者用のデジタル教科書」（38%）の順に多い。他の年代と比べると、「いずれか1つ以上の利用意向あり」（96%）が多く、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」の割合が多い点も注目される。

20代教師は日常生活でパソコンに加えてスマートフォンやタブレット端末をよく利用し、授業でのタブレット端末の利用も他の年代より多

い。その一方で市販のビデオ教材や録画再生機の利用は少なく、DVDなどを教室に持ち込んで再生するよりも、インターネットやクラウド上にあるコンテンツなどネットワーク型の教材を利用することに関心が高いようである。また、協働学習で利用できるソフトウェアやツールのような新しいメディアへの関心が他の年代よりみられる。

表60 年代別にみた性別分布（中学校） (%)

	男性	女性	無回答
教師全体 (n=1,071)	78	21	1
20代 (n=262)	73	27	0
30代 (n=245)	81	19	0
40代 (n=261)	77	23	0
50代 (n=292)	83	17	0

表61 年代別にみた日常生活で利用しているメディア（中学校）

（%）

	携帯電話	スマートフォン	タブレット端末 (iPadなど)	パソコン	携帯デジタルブ レーヤー (iPodなど)	電子書籍 リーダー	ブルーレイ ディスク レコーダー	携帯電話や カーナビなどの ワンセグ放送
教師全体	40	64	30	91	17	4	38	27
20代	28	85	32	92	32	3	28	21
30代	31	77	30	89	16	2	42	33
40代	47	55	31	91	8	3	41	29
50代	52	43	26	93	10	6	41	26

表62 年代別にみた教師の授業でのメディア機器利用（中学校）

（%）

	テレビ受像機	録画再生機	パソコン	インターネット	タブレット端末	プロジェクター	電子黒板	実物投影機	デジタルカメラ・ ビデオカメラ
教師全体	53	58	75	59	26	50	24	45	44
20代	50	43	74	58	34	51	22	40	39
30代	56	57	83	62	28	54	24	44	45
40代	53	62	76	60	22	51	28	46	46
50代	52	68	68	57	20	44	22	47	46

表63 年代別にみたメディア教材利用（中学校）

（%）

	A. NHK学校放送番組	B. 「A」以外のNHKの 放送番組	C. NHK以外の放送 番組	D. NHKデジタル教材	E. 「D」以外のインテ ルネット上のコンテ ンツや動画、静止画	F. 指導者用のデジタル 教科書	G. 「F」以外の、パ ソコン用教材	H. 市販のビデオ教材や DVD教材	I. あなたや他の先生が 作成した教材（自作 教材）	A.、I.のどの教材も 利用しなかった
教師全体	38	28	22	29	35	22	13	41	38	14
20代	37	21	16	32	37	24	11	23	41	15
30代	36	27	22	29	40	23	14	43	45	11
40代	39	29	22	27	34	26	14	48	35	13
50代	38	35	25	28	30	16	14	49	33	16

表64 年代別にみた教師の今後のメディア利用意向（中学校）

（%）

	電子黒板	タブレット端末	指導者用の デジタル教科書	学習者用の デジタル教科書	協働学習で利用 できるソフト ウェアやツール	教材などにつ いて情報交換でき るサイトやソシヤ ルメディア	いずれか1つ 以上の利用意向 あり
教師全体	54	64	42	33	37	26	93
20代	58	67	38	28	42	28	96
30代	54	68	49	41	39	27	94
40代	54	68	40	31	35	22	94
50代	49	53	42	31	30	30	89

### 5-3-2 30代の中学校教師の特徴

30代教師の男女比は男性81%と女性19%で男性が多い(表60)。

日常生活で利用しているメディア(表61)は「パソコン」(89%)、「スマートフォン」(77%)、「ブルーレイディスクレコーダー」(42%)、「携帯電話」(31%)、「タブレット端末」(30%)の順に多い。スマートフォンが他の年代より多いのは20代と共通するが、20代で少なかったブルーレイディスクレコーダーの利用がみられる点異なる。

30代教師の授業でのメディア機器の利用(表62)をみていくと、「パソコン」(83%)、「インターネット」(62%)、「録画再生機」(57%)、「テレビ受像機」(56%)、「プロジェクター」(54%)の順に多い。他の年代と比べるとパソコンの利用が多いのが特徴的である。

利用しているメディア教材(表63)をみると、「I. 自作教材」(45%)、「H. ビデオ教材」(43%)、「E. インターネット上のコンテンツ」(40%)、「A. NHK学校放送番組」(36%)の順に多い。他の年代と比べると、自作教材の利用が多い。また、20代と比べると市販のビデオ教材の利用がみられ、機器で録画再生機の利用が20代より多いことと一致している。

今後利用したいメディア(表64)は「タブレット端末」(68%)、「電子黒板」(54%)、「F. 指導者用のデジタル教科書」(49%)の順に多い。他の年代と比べると、「指導者用のデジタル教科書」と、「学習者用のデジタル教科書」(41%)で多い。

30代教師は日常生活でパソコンやスマートフォンを利用している点は20代と共通するが、ブルーレイディスクレコーダーを日常生活で利用していたり、授業でビデオ教材や録画再生機

を利用したりしている点では40代以上に近い。また、自作教材を授業で利用することが多い点も特徴的である。全体として、パッケージ型のメディアとネットワーク型のメディアの両方ともに授業でよく利用しているといえる。

### 5-3-3 40代の中学校教師の特徴

40代教師の男女比は男性77%と女性23%で、男性が多い(表60)。

日常生活で利用しているメディア(表61)は「パソコン」(91%)、「スマートフォン」(55%)、「携帯電話」(47%)、「ブルーレイディスクレコーダー」(41%)、「タブレット端末」(31%)の順に多い。スマートフォンの利用が携帯電話より多いが、その差は大きくない。

40代教師の授業でのメディア機器の利用(表62)をみていくと、「パソコン」(76%)、「録画再生機」(62%)、「インターネット」(60%)、「テレビ受像機」(53%)、「プロジェクター」(51%)の順に多い。

利用しているメディア教材(表63)をみると、「H. ビデオ教材」(48%)、「A. NHK学校放送番組」(39%)、「I. 自作教材」(35%)、「E. インターネット上のコンテンツ」(34%)の順に多い。ビデオ教材の利用が他の年代より高く、録画再生機を利用して映像を授業で利用している様子がうかがえる。

今後利用したいメディア(表64)は「タブレット端末」(68%)、「電子黒板」(54%)、「指導者用のデジタル教科書」(40%)の順に多く、中学校教師全体の傾向と一致している。

40代教師も30代同様、日常生活でパソコンやスマートフォンを利用している教師が多いが、携帯電話を利用している教師も多い。授業ではパソコンとインターネットを利用したネットワー



ク型教材の利用もみられるが、録画再生機を利用したパッケージ型教材の利用がやや多いといえる。

#### 5-3-4 50代の中学校教師の特徴

50代教師の男女比は男性83%と女性17%で、男性が多い(表60)。

日常生活で利用しているメディア(表61)は「パソコン」(93%)、「携帯電話」(52%)、「スマートフォン」(43%)、「ブルーレイディスクレコーダー」(41%)の順に多い。他の年代と比べて、スマートフォンの利用が少なく、携帯電話の利用が多いのが特徴的である。

50代教師の授業でのメディア機器の利用(表62)をみていくと、「パソコン」(68%)、「録画再生機」(68%)、「インターネット」(57%)、「テレビ受像機」(52%)、「プロジェクター」(44%)の順に多い。録画再生機の利用が他の年代より多いのが特徴的である。

利用しているメディア教材(表63)をみると、「H. ビデオ教材」(49%)、「A. NHK学校放送番組」(38%)、「B. 学校放送番組以外のNHK番組」(35%)、「I. 自作教材」(33%)の順に多い。他の年代と比べて、ビデオ教材、学校放送番組以外のNHK番組の利用の割合が多く、「F. 指導者用のデジタル教科書」(16%)の利用が少ない。

今後利用したいメディア(表64)は「タブレット端末」(53%)、「電子黒板」(49%)、「指導者用のデジタル教科書」(42%)の順に多く、他の年代と比べると利用意向はやや少なく、特にタブレット端末と「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」(30%)の利用意向が他の年代より少ない。

50代教師は日常生活ではスマートフォンより

携帯電話を主に利用しており、授業では録画再生機を利用して、ビデオ教材やNHKのさまざまな番組を授業で利用している様子が見られる。他の年代と比べると、映像への関心が高く、平日頃から番組を録画して蓄積したり、ビデオ教材を購入したりして、よく利用しているようである。

以上、20代から50代の中学校教師のメディア利用についてみてきた。全体としてみると、若い年代ではタブレット端末などの新しい機器やネットワーク型の教材に関心が高く、ベテランになると、ビデオ教材や録画した番組などのパッケージ型の教材の利用が増えてくる傾向があるといえる。

## 5-4 「デジタル機器に対する意識」による分析

2015年度の中学校教師調査では、デジタル機器やサービスに対する意識についての質問をしている。その質問結果から、「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に肯定的に回答するなど、デジタル機器の利用に積極的な教師と、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に肯定的に回答するなど、デジタル機器の利用に消極的な教師、そしてその中間と3つの層に分けることができる。

デジタル機器の利用に積極的な教師は全体の29%、デジタル機器の利用に消極的な教師は5%、それ以外の教師は66%であった。

ここからは、デジタル機器の利用に積極的な

教師がどういう特性をもっているかをみていく。

デジタル機器の利用に積極的な教師は性別で見ると男性81%、女性18%で、全体の男女比とほぼ同様である(表65)。また、年代は20代で全体より多く、50代で全体より少なく、若い世代に多い(表66)。

日常生活で利用しているメディアは「パソコン」(95%)、「スマートフォン」(74%)、「ブルーレイディスクレコーダー」(46%)、「タブレット端末」(40%)など、携帯電話以外のすべての項目で全体より多い(表67)。

授業でのメディア機器の利用をみると、「パソコン」(83%)、「プロジェクター」(57%)、「タブレット端末」(32%)で全体より多い。全般に機器の利用は盛んである(表68)。

生徒にパソコンなどの機器を利用させている割合は33%で、全体とほぼ同様である(表69)。

デジタル機器利用に積極的な意識をもつ教師が授業で利用しているメディアをみると、「E. インターネット上のコンテンツ」(44%)、「H. ビデオ教材」(44%)、「A. NHK学校放送番組」(43%)、「I. 自作教材」(43%)の順に多い。特に、「E. インターネット上のコンテンツ」の利用が全体より多いのが特徴的である。全般に授業でメディア教材を積極的に利用している様子が見えてくる(表70)。

今後利用したいメディア(表71)は、「タブレット端末」(74%)、「電子黒板」(58%)、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」(44%)、「指導者用のデジタル教科書」(42%)、「学習者用のデジタル教科書」(39%)の順で多く、特に、「タブレット端末」、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」、「学習者用のデジタル教科書」の3項目で多い。デジタル機器

に積極的な教師は、これから学校への導入が期待される新しいメディアへの利用意向も高いといえる。

また、デジタル機器に積極的な教師は次項で紹介する「生徒自発・協働重視型」の教師の割合も54%と、中学校教師全体と比べて高い(表72)。

デジタル機器の利用に対して積極的な教師の特徴をまとめると、20代、30代の若年層で多く、日常生活でも新しいメディアをよく利用している。授業で利用しているメディア機器では「パソコン」、「インターネット」、メディア教材では「インターネット上のコンテンツ」の利用が活発である。さらに今後利用したいメディアとして「タブレット端末」、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」、「学習者用のデジタル教科書」の利用意向が全体より高い。

中学校でメディア利用が多いのはこれまでの調査結果から、理科と社会科の教師であると考えられる。その理科・社会科教師の3割を占めるデジタル機器に積極的な教師が、日常生活でも授業でも新規メディアを利用しており、今後の新規メディアの利用意向も高く、学校内の機器やメディア教材の利用を広げていく役割も果たしていると考えられる。

表65 デジタル機器利用観別にみた性別  
(中学校)

(%)

	男性	女性	無回答
教師全体 (n=1,071)	78	21	1
デジタル機器利用積極教師 (n=312)	81	18	1
デジタル機器利用消極教師 (n=52)	85	15	0
それ以外 (n=707)	76	23	1

- 「デジタル機器利用積極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した教師
- 「デジタル機器利用消極教師」  
「デジタル機器やサービスは積極的に利用したい」、「デジタル機器の機能はすべて使いたい」という質問に「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答し、「仕事や授業などで必要な場合以外は、デジタル機器やサービスをあまり使いたくない」、「デジタル機器の操作を覚えるのは面倒だ」という質問に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した教師
- 「それ以外」は上記以外の教師

表66 デジタル機器利用観別にみた年代分布  
(中学校)

(%)

	20代	30代	40代	50代	無回答
教師全体	25	23	24	27	1
デジタル機器利用積極教師	<b>31</b>	25	23	<b>20</b>	1
デジタル機器利用消極教師	14	<b>0</b>	29	<b>58</b>	0
それ以外	22	24	25	28	1

表67 デジタル機器利用観別にみた日常生活で利用のメディア (中学校)

(%)

	携帯電話	スマートフォン	タブレット端末 (iPadなど)	パソコン	携帯デジタルプレーヤー (iPodなど)	電子書籍リーダー	ブルーレイディスクレコーダー	携帯電話やカーナビなどのワンセグ放送
教師全体	40	64	30	91	17	4	38	27
デジタル機器利用積極教師	35	<b>74</b>	<b>40</b>	<b>95</b>	<b>22</b>	<b>6</b>	<b>46</b>	<b>35</b>
デジタル機器利用消極教師	<b>58</b>	29	10	75	0	0	29	10
それ以外	41	63	27	91	16	3	36	25

表68 デジタル機器利用観別にみた教師の授業でのメディア機器利用 (中学校)

(%)

	テレビ受像機	録画再生機	パソコン	インターネット	タブレット端末	プロジェクター	電子黒板	実物投影機	デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ
教師全体	53	58	75	59	26	50	24	45	44
デジタル機器利用積極教師	57	60	<b>83</b>	64	<b>32</b>	<b>57</b>	25	48	45
デジタル機器利用消極教師	44	56	62	50	14	29	14	35	33
それ以外	51	57	73	57	24	48	24	44	45

表69 デジタル機器利用観別にみた生徒のメディア利用（中学校）（「A. パソコン」、「B. 電子黒板」、「C. デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」、「D. タブレット端末」） (%)

	いずれかで生徒使用あり
教師全体	32
デジタル機器利用積極教師	33
デジタル機器利用消極教師	33
それ以外	31

表70 デジタル機器利用観別にみたメディア教材利用（中学校） (%)

	A. NHK学校放送番組	B. 「A」以外のNHKの放送番組	C. NHK以外の放送番組	D. NHKデジタル教材	E. 「D」以外のインターネット上のコンテンツや動画、静止画	F. 指導者用のデジタル教科書	G. 「F」以外の、パソコン用教材	H. 市販のビデオ教材やDVD教材	I. あなたや他の先生が作成した教材（自作教材）	A.～I.のどの教材も利用しなかった
教師全体	38	28	22	29	35	22	13	41	38	14
デジタル機器利用積極教師	<b>43</b>	31	23	<b>36</b>	<b>44</b>	<b>27</b>	<b>18</b>	44	43	12
デジタル機器利用消極教師	14	25	15	6	10	14	2	39	25	<b>27</b>
それ以外	37	27	21	28	32	21	12	40	37	13

表71 デジタル機器利用観別にみた今後のメディア利用意向（中学校） (%)

	電子黒板	タブレット端末	指導者用のデジタル教科書	学習者用のデジタル教科書	協働学習で利用できるソフトウェアやツール	教材などについて情報交換できるサイトやソーシャルメディア	いずれか1つ以上の利用意向あり
教師全体	54	64	42	33	37	26	93
デジタル機器利用積極教師	58	<b>74</b>	42	<b>39</b>	<b>44</b>	30	96
デジタル機器利用消極教師	31	21	23	14	14	10	<b>69</b>
それ以外	53	62	43	31	35	26	94

表72 デジタル機器利用観別にみた授業を進める考え方（中学校） (%)

	生徒自発型	教師主導型	それ以外
教師全体	46	21	33
デジタル機器利用積極教師	<b>54</b>	17	30
デジタル機器利用消極教師	33	<b>42</b>	25
それ以外	44	22	35

※「生徒自発・協働重視型教師」、「教師主導・個別重視型教師」について

Qあなたは授業を行う際に、どのようなことを重視しておられますか。あなた自身の考えに近いほうをひとつずつ選んでお答えください。

- 1「生徒の自発的な学習をうながすことに重点をおいて授業をする」  
2「教師主導で、必要なことをきちんとおさえるように授業をする」
- 1「個別指導を大切にして子ども一人一人に力がつくことを考える」  
2「生徒同士の話し合いなど集団での協働的なプロセスを大切にする」

●「生徒自発・協働重視型教師」……設問(1)では「1」に、設問(2)では「2」に回答した教師。「教師主導・個別重視型教師」……設問(1)では「2」に、設問(2)では「1」に回答した教師。「それ以外」……上記のいずれにも当てはまらない教師。

## 5-5 「授業を進める考え方」による分析

2015年度の中学校教師調査では、授業を進めるにあたっての教師の考え方を尋ねて、その結果から「生徒自発・協働重視型」、「教師主導・個別重視型」、「それ以外」の3つに教師のタイプ分けを行った。その結果、「生徒自発・協働重視型」(46%)、「教師主導・個別重視型」(21%)、「それ以外」(33%)となった。

ここからは、今後の授業スタイルの中心になると考えられる「生徒自発・協働重視型」がどのような特性をもっているかを明らかにすることを中心に分析を行う。

「生徒自発・協働重視型」の教師は男性76%、女性23%で、中学校教師全体とほぼ同様の男女比である(表73)。年代は中学校教師全体と比べて30代で多く、50代で少ない(表74)。

日常生活で利用しているメディアは「パソコン」(91%)、「スマートフォン」(67%)、「携帯電話」(39%)など、中学校教師全体と同様の傾向であった(表75)。

授業でのメディア機器の利用をみると、「パソコン」(79%)、「インターネット」(63%)で全体より多い(表76)。

生徒にパソコンなどの機器を利用させている割合をみると、34%で、全体とほぼ同様である(表77)。

「生徒自発・協働重視型」の教師が授業で利用しているメディアをみると、「H. ビデオ教材」(42%)、「A. NHK学校放送番組」(41%)、「I. 自作教材」(40%)、「E. インターネット上のコンテンツ」(37%)、「D. NHKデジタル教材」(33%)の順に多い。「D. NHKデジタル教材」と「F. 指導者用のデジタル教科書」(27%)の

利用が全体より多く、新しいメディアへの関心がうかがえる(表78)。

今後利用したいメディア(表79)は、「タブレット端末」(70%)、「電子黒板」(56%)、「指導者用のデジタル教科書」(42%)、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」(41%)、「学習者用のデジタル教科書」(35%)の順で多く、特に、「タブレット端末」、「協働学習で利用できるソフトウェアやツール」で、多いのが特徴的である。生徒が1人1人タブレット端末を利用して、協働学習を進める場面への期待があるのではないかと考えられる。

「生徒自発・協働重視型」の教師の特徴をまとめると、20代、30代の若年層で多く、日常生活でのメディア利用や授業でのメディア利用、今後のメディア利用意向のいずれも中学校教師全体とあまり変わらないが、細かくみていくと、「タブレット端末」を利用した協働学習への志向がみられるといえる。

表73 「授業を進める考え方」別にみた性別(中学校)

	男 性	女 性	無回答
教師全体 (n=1,071)	78	21	1
生徒自発型 (n=493)	76	23	1
教師主導型 (n=227)	82	16	1
それ以外 (n=351)	78	22	1

※「生徒自発・協働重視型教師」、「教師主導・個別重視型教師」について

Qあなたは授業を行う際に、どのようなことを重視しておられますか。  
あなた自身の考えに近いほうをひとつずつ選んでお答えください。

- (1) 1「生徒の自発的な学習をうながすことに重点をおいて授業をする」  
2「教師主導で、必要なことをきちんとおさえるように授業をする」
- (2) 1「個別指導を大切にして子ども一人一人に力がつくことを考える」  
2「生徒同士の話し合いなど集団での協働的なプロセスを大切にする」

●「生徒自発・協働重視型教師」……設問(1)では「1」に、設問(2)では「2」に回答した教師。「教師主導・個別重視型教師」……設問(1)では「2」に、設問(2)では「1」に回答した教師。「それ以外」……上記のいずれにも当てはまらない教師。

表74 「授業を進める考え方」別にみた年代分布（中学校） (%)

	20代	30代	40代	50代	無回答
教師全体	25	23	24	27	1
生徒自発型	26	27	24	22	1
教師主導型	19	15	28	38	1
それ以外	26	23	23	28	1

表75 「授業を進める考え方」別にみた日常利用しているメディア（中学校） (%)

	携帯電話	スマートフォン	タブレット端末 (iPadなど)	パソコン	携帯デジタル プレーヤー (iPodなど)	電子書籍 リーダー	ブルーレイ ディスク レコーダー	携帯電話や カーナビなどの ワンセグ放送
教師全体	40	64	30	91	17	4	38	27
生徒自発型	39	67	33	91	16	3	37	30
教師主導型	37	63	23	90	13	3	44	21
それ以外	44	62	30	93	20	5	37	27

表76 「授業を進める考え方」別にみた教師の授業でのメディア機器利用（中学校） (%)

	テレビ受像機	録画再生機	パソコン	インターネット	タブレット端末	プロジェクター	電子黒板	実物投影機	デジタルカメラ・ デジタルビデオ カメラ
教師全体	53	58	75	59	26	50	24	45	44
生徒自発型	51	54	79	63	29	54	27	47	49
教師主導型	52	57	60	47	21	43	17	37	32
それ以外	56	64	79	61	25	49	25	46	47

表77 「授業を進める考え方」別にみた生徒のメディア機器利用（中学校）（「パソコン」、「電子黒板」、「デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ」、「タブレット端末」） (%)

	いずれかで児童使用あり
教師全体	32
生徒自発型	34
教師主導型	25
それ以外	33

表78 「授業を進める考え方」別にみたメディア教材利用（中学校） (%)

	A. NHK学校放送番組	B. 「A」以外のNHKの放送番組	C. NHK以外の放送番組	D. NHKデジタル教材	E. 「D」以外のインターネット上のコンテンツや動画、静止画	F. 指導者用のデジタル教科書	G. 「F」以外の、パソコン用教材	H. 市販のビデオ教材やDVD教材	I. あなたや他の先生が作成した教材（自作教材）	A. I. のどの教材も利用しなかった
教師全体	38	28	22	29	35	22	13	41	38	14
生徒自発型	41	28	20	33	37	27	15	42	40	10
教師主導型	31	27	18	23	30	16	9	40	27	21
それ以外	36	30	25	27	35	20	13	40	42	14

表79 「授業を進める考え方」別にみた今後の授業でのメディア利用意向（中学校） (%)

	電子黒板	タブレット端末	指導者用のデジタル教科書	学習者用のデジタル教科書	協働学習で利用できるソフトウェアやツール	教材などについて情報交換できるサイトやソーシャルメディア	いずれか1つ以上の利用意向あり
教師全体	54	64	42	33	37	26	93
生徒自発型	56	70	42	35	41	26	95
教師主導型	46	54	41	28	28	23	90
それ以外	55	61	43	32	35	29	92

## 5-6 属性や意識でみるメディア利用のまとめ

この章では、中学校教師のメディア利用の実態を詳細にみていくために、まず、「担当教科(理科, 社会科)」, 「年代(20代, 30代, 40代, 50代)」の2つの属性でその特徴をみていった。

中学校教師を理科と社会科で比較すると、理科教師はメディア機器、メディア教材とも利用が多く、「生徒の関心・意欲を高める」ためもあるが、「生徒の知識・理解を深める」目的意識が強く、その結果、メディア教材の利用場面も導入だけでなく、学習のまとめとしてよく利用しているといえる。それに対して社会科教師は全般に理科教師より機器やメディア教材の利用は少ないが、「生徒の思考・判断を促す」、「意見の共有」や「活動が活性化する」役割をメディア教材に期待している教師が多い点が特徴的であるといえる。

次に年代別でみると、20代でタブレット端末などの新しい機器やネットワーク型の教材に関心が高く、50代になるとビデオ教材や録画した番組などのパッケージ型の教材の利用が増えてくる傾向があり、30代、40代はその中間に位置するといえる。

今後のメディア利用を積極的に進める要因の1つと考えられる「デジタル機器に対する意識が積極的な教師」をみると、新規メディアの利用が現時点でも盛んなだけでなく、今後の利用意向が高いことが明らかになった。

また、これからの授業スタイルで多くなると考えられる「生徒自発・協働重視型」の教師の特徴をみると、メディア利用が全体より多いわけではないが、協働学習に利用できそうなメ

ディアを現時点でも利用し、今後への期待が高いことが明らかになった。

中学校教師のメディア利用については教科による特性がもっとも強いと考えられるが、年代やデジタル機器への意識、授業スタイルといった、複数の教科を比較できる視点から分析を加えることで、より明確に教師のメディア利用の実態や今後の授業に必要なメディア環境が明らかになってくると考える。

## 6 小学校教師と中学校教師のメディア利用状況の比較

NHK放送文化研究所の小学校教師調査(2014年度)と中学校教師調査(2015年度)では、いくつかの質問項目を共通にしている。第6章では、2つの調査結果の比較から、小学校と中学校に共通する教師のメディア利用の傾向と、学校種により異なる傾向を考察する。小学校教師調査と中学校教師調査では実施年度が異なるため、機器の整備環境などは、年度による差が生じうるが、利用の実態や意識については、年度による大きな違いはないと考える。また、中学校教師の調査対象は理科教師と社会科教師のみであるが、これまでの調査から、この2教科でのメディア利用が他の教科より多いことは明らかになっており、メディア利用をしている教師の傾向としてとらえることは可能であると考ええる。

具体的には、「教室のメディア環境」、「教師の利用しているメディア教材」、「児童・生徒に利用させているメディア機器」、「今後の授業で利用したいメディア」の4項目で比較を行う。

## 6-1 教室のメディア環境

### 6-1-1 小学校教師調査の結果から

表80は9種類のメディアについて、小学校教師が担任しているクラスの授業での「利用環境」と「利用の有無」について示したものである。

「利用環境あり」が80%を超えたのは「デジタルカメラ・ビデオカメラ」(89%)、「パソコン」(88%)、「インターネット」(84%)、「実物投影機」(80%)の4つであった。また、「利用あり」については、「デジタルカメラ・ビデオカメラ」(82%)、「パソコン」(81%)、「インターネット」(73%)、「実物投影機」(61%)の順に多く、「利用環境あり」と同様の順となり、上記のメディアは一定程度授業で利用されていることがわかった。

しかし、「機器はあるが利用していない」メディアもみられた。「プロジェクター」は25%、「電子黒板」は20%の小学校教師が、利用できる環境はあるが利用していない。

### 6-1-2 中学校教師調査の結果から

小学校教師調査と同じ9種類のメディアにつ

いて、担任しているクラスの授業で利用できる環境と利用の有無について、中学校の理科教師と社会科教師に尋ねた結果が表81である。利用場所は理科教師についてはおおむね理科教室、社会科教師についてはほぼ普通教室である。

「利用環境あり」が80%を超えたのは「パソコン」(91%)、「プロジェクター」(87%)、「デジタルカメラ・ビデオカメラ」(84%)、「録画再生機」(81%)、「インターネット」(80%)の5種である。

しかし、「利用あり」については、「パソコン」の「利用あり」が75%でもっとも多かった以外は、「利用環境あり」の順と異なった。「インターネット」(59%)、「録画再生機」(58%)の「利用あり」は約6割であったが、「利用環境あり」が80%を超えていた「プロジェクター」、「デジタルカメラ・ビデオカメラ」の「利用あり」は4割から5割程度にとどまっている。

「機器はあるが利用していないメディア」としては「デジタルカメラ・ビデオカメラ」(40%)、「プロジェクター」(37%)、実物投影機(33%)、電子黒板(32%)が30%を超えていた。

全般に中学校理科教師、社会科教師とも

表80 小学校教師の教室のメディア環境

(n=2,387) (%)

	利用環境あり	利用あり	機器はあるが利用していない
デジタルカメラ・ビデオカメラ	89	82	7
パソコン	88	81	7
インターネット	84	73	12
実物投影機	80	61	18
テレビ受像機	76	61	15
録画再生機	73	59	14
プロジェクター	73	49	25
電子黒板	48	27	20
タブレット端末	24	16	9

表81 中学校教師の教室のメディア環境

(n=1,071) (%)

	利用環境あり	利用あり	機器はあるが利用していない
パソコン	91	75	16
プロジェクター	87	50	37
デジタルカメラ・ビデオカメラ	84	44	40
録画再生機	81	58	23
インターネット	80	59	21
実物投影機	77	45	33
テレビ受像機	74	53	22
電子黒板	56	24	32
タブレット端末	45	26	19



「パソコン」の利用は多いが、それ以外のメディアは利用環境があるものの、活発に利用されているとはいえない。

### 6-1-3 調査結果の比較から

小学校教師と中学校教師のメディア環境についてみてみると、「インターネット」に接続された「パソコン」や「実物投影機」、「デジタルカメラ・ビデオカメラ」の画像を「プロジェクター」や「テレビ受像機」で児童・生徒に提示できる環境が一定程度整ってきていることがわかる。

これは小学校・中学校の多くは、市町村立のため、メディア環境の整備が一律に進むためである。また、「電子黒板」や「タブレット端末」などの新しいメディアの「利用環境あり」が中学校でやや多いのは、調査年度が小学校の1年後のためであると考えられる。

その一方で、授業に利用できる環境にあるが利用されていないメディアとして小学校・中学校とも「プロジェクター」、「電子黒板」がある。一律に整備が進むことで、学校内のすべての教室で利用できる環境は徐々に整ってきているが、「利用の必要性を感じない」、「利用のしかたがわからない」、「拡大提示するものがない」などの理由で利用されていないと考えられる。

## 6-2 教師の利用しているメディア教材

### 6-2-1 小学校教師調査の結果から

前項で示したようなメディア環境で、どんなメディアを授業で利用しているのか、9種のメディア教材の利用について小学校教師に尋ねた結果が表82である。

「NHK学校放送番組」(44%)、「市販のビデオ教材やDVD教材」(44%)、「指導者用のデジタル教科書」(43%)、「インターネット上のコンテンツ」(41%)、「自作教材」(41%)の5項目がいずれも4割以上の教師に利用されていた。

なお、「いずれか1つ以上のメディア教材利用あり」とした教師は90%であった。また、「NHK学校放送番組」と「NHKデジタル教材」のいずれかでも利用した教師（「NHK for School利用」）は55%で、ほかのいずれのメディアよりも多かった。

全般に小学校教師は「NHK学校放送番組」や「指導者用のデジタル教科書」などのメディアを、教科の必要性や、授業の目的によって使い分けているといえる。

全般に小学校教師は「NHK学校放送番組」や「指導者用のデジタル教科書」などのメディアを、教科の必要性や、授業の目的によって使い分けているといえる。

### 6-2-2 中学校教師調査の結果から

小学校教師調査と同じ9種類のメディア教材について、中学校教師の利用を調査した結果が表83である。

利用が多かったメディアは順に、「市販のビデオ教材やDVD教材」(41%)、「自作教材」(38%)、「NHK学校放送番組」(38%)、「インターネット上のコンテンツ」(34%)で、いずれも3割以上の教師に利用されていた。

なお、「いずれか1つ以上のメディア教材利用あり」とした教師は85%であった。また、「NHK学校放送番組」と「NHKデジタル教材」のいずれかでも利用した教師（「NHK for School利用」）は44%で、ほかのいずれのメディアよりも多かった。

中学校教師も授業の目的に応じて、複数のメディア教材を使い分けているといえる。

### 6-2-3 調査結果の比較から

小学校教師と中学校教師のメディア教材の

表82 小学校教師のメディア教材利用

(n=2,387) (%)

	利用あり
NHK 学校放送番組	44
市販のビデオ教材やDVD教材	44
指導者用のデジタル教科書	43
インターネット上のコンテンツ	41
自作教材	41
NHK デジタル教材	38
パソコン用教材	24
学校放送番組以外のNHK番組	27
NHK以外の放送番組	16
NHK for School利用（「NHK学校放送番組」と「NHKデジタル教材」のいずれかでも利用）	55
いずれか1つ以上のメディア教材利用	90

利用をみると、小学校教師の90%、中学校教師の85%が、なんらかのメディア教材を授業で利用しており、利用が定着している様子がみられる。

利用しているメディアは、どちらも「NHK学校放送番組」、「市販のビデオ教材やDVD教材」、「インターネット上のコンテンツ」、「自作教材」がほぼ同様な割合であり、特定のメディアだけを利用するのではなく、授業の目的に応じて複数のメディアを使い分けながら利用している様子がうかがえる。

小中学校ともインターネットの環境が整っているにもかかわらず、インターネットに接続すればすぐに使える「インターネット上のコンテンツ」や「NHKデジタル教材」などのネットワーク型のメディア利用だけでなく、「NHK学校放送番組」や「市販のビデオ教材やデジタル教材」、「自作教材」など、録画や事前の準備などをして、教室にメディアをもってくる必要のあるパッケージ型のメディアの利用が多い。

これは、インターネットに接続できる環境があっても、動画などのコンテンツを見せるには回線の容量が十分ではなく、授業中に動画が

表83 中学校教師のメディア教材利用

(n=1,071) (%)

	利用あり
市販のビデオ教材やDVD教材	41
自作教材	38
NHK 学校放送番組	38
インターネット上のコンテンツ	34
NHK デジタル教材	29
学校放送番組以外のNHK番組	28
指導者用のデジタル教科書	22
NHK以外の放送番組	21
パソコン用教材	13
NHK for School利用（「NHK学校放送番組」と「NHKデジタル教材」のいずれかでも利用）	44
いずれか1つ以上のメディア教材利用	85

止まってしまうことを避けるために、確実に再生できるパッケージ型のメディアを利用する傾向があるためと考えられる。

小中学校で差がみられたのは「指導者用のデジタル教科書」である。これは、小学校では国語、社会、算数、理科の各教科でほとんどの教科書会社から指導者用デジタル教科書が発行されているが、中学校の理科、社会科では指導者用のデジタル教科書を発行していない教科書会社もあるためと、デジタル教科書は今のところ有償で自治体が購入するため、中学校では全教科をそろえるのが財政的に難しい場合に、国語、数学、英語の購入を優先することが多いため、今回の調査対象である理科、社会科教師で利用が少ないと考えられる。

また、小学校に比べて、中学校で「学校放送番組以外のNHK番組」や「NHK以外の放送番組」の利用がやや多いのは、NHK学校放送番組が小学校向けのものが多いことや、中学校の場合には、一般向けの『NHKスペシャル』やBSなどの特集番組を利用する方が授業の目的に沿う場合があるためと考えられる。

## 6-3 児童・生徒に利用させているメディア機器

### 6-3-1 小学校教師調査の結果から

表84は4種類のメディア機器について、小学校教師が授業で児童に利用させているかを尋ねた結果である。「パソコン」(56%)で5割を超え、「デジタルカメラ」(29%)の利用もみられたが、電子黒板、タブレット端末の児童の利用はあまりみられなかった。電子黒板については教師が提示用に利用することが多く、タブレット端末については導入されている数が少ないと、教室に1台だけの場合は教師が利用することが多いためと考えられる。

また、4種類のメディアのいずれかでも児童に利用させた教師は64%であった。

### 6-3-2 中学校教師調査の結果から

表85は小学校教師と同様に4種類の機器について、中学校教師が授業で生徒に利用させているかを尋ねた結果である。もっとも多い「パソコン」で21%、それ以外の機器の生徒の利用は1割程度であった。「いずれかのメディア利用あり」も32%で、授業での生徒のメディア利用は活発とはいえない。

なお今回の調査では、対象となる教師は理科、社会科のみなので、他教科でパソコンなど

のメディアを利用している可能性もある。特に中学校の技術・家庭科ではコンピューターを扱う單元があるので、その時間に生徒が利用していることは想定される。

ただし、この調査では、理科担当教師、社会科担当教師としてのメディア利用だけでなく、学級担任の場合は道徳、特別活動、総合的な学習の時間などでの利用も含んで質問しており、中学校の生徒のメディア利用の実態のある程度表していると考えられる。

### 6-3-3 調査結果の比較から

小学校教師と中学校教師の児童・生徒にメディアを利用させている割合を比べてみると、教室のメディア環境や教師のメディア教材利用に比べて大きな違いがみられた。

児童・生徒がパソコンを利用する場合、通常はパソコン室に移動して利用することが考えられる。その場合、小学校教師は学級担任として、授業を弾力的に運用することが可能なので、授業中にパソコン室に移動して利用することができたり、連続した時間でパソコンを使うことができるが、中学校は教科担任なので、50分の時間で授業を完結させる必要があり、授業の途中でパソコン室へ移動して利用するのが不便であったり、連続した時間に同じ学級がパソコン室を利用することが難しかったりする

表84 小学校教師が児童に利用させているメディア機器  
(n=2,387) (%)

	利用あり
パソコン	56
デジタルカメラ・ビデオカメラ	29
電子黒板	13
タブレット端末	6
いずれか1つ以上のメディア機器利用	64

表85 中学校教師が生徒に利用させているメディア機器  
(n=1,071) (%)

	利用あり
パソコン	21
タブレット端末	10
デジタルカメラ・ビデオカメラ	7
電子黒板	8
いずれか1つ以上のメディア機器利用	32

ためであると考えられる。例えば中学校理科の場合は実験・観察などを理科室でした後に、パソコン室に移動して調べるといった活動を50分の授業時間で行うことは難しいであろう。

また一般的に中学校の方が時間内に教える内容が多く、生徒がパソコンなどで調べる活動より、教師が説明用にメディアを提示する活動が中心となるためもあると考えられる。

ただし、持ち運びが可能なタブレット端末が、グループに1台ないし生徒1人に1台という環境が整うようになると、中学校でも教室や理科室で生徒が調べたり、まとめたりする活動にメディアを利用する機会が増える可能性はある。

## 6-4 今後の授業で利用したいメディア

### 6-4-1 小学校教師調査の結果から

表86は6つのメディアについて、今後の授業で利用したいかを尋ねたものである。小学校教師では「電子黒板」(68%)、「タブレット端末」(68%)で7割程度、「指導者用のデジタル教科書」(59%)で6割の教員が今後、利用したいと回答している。

この結果は、表80で示した「電子黒板」の利用環境ありと回答した教師が48%であるのに、

表86 小学校教師が今後の授業で利用したいメディア (n=2,387) (%)

	利用意向あり
電子黒板	68
タブレット端末	68
指導者用のデジタル教科書	59
学習者用のデジタル教科書	45
協働学習で利用できるソフトウェア	27
教師が情報交換できるサイトやSNS	25
いずれか1つ以上の利用意向	96

実際に利用している教師は27%にとどまり、20%の教師が利用していないという結果と矛盾しているように見える。しかし、電子黒板が利用できる環境があっても、指導者用のデジタル教科書などの提示するメディア教材が利用できなかったり、インターネットを十分に利用できるネットワーク環境が整っていなかったりするため現状では利用していないが、今後、こうした条件が整えば利用したいという意向をもっている教師がいるためではないかと考えられる。

また、「学習者用のデジタル教科書」(45%)、「協働学習で利用できるソフトウェア」(27%)や「教師が情報交換できるサイトやSNS」(25%)の利用意向もある程度あり、こうしたサービスへの期待もみられた。

全体として、6種類のメディアのいずれかの利用意向がある小学校教師は96%で、新しいメディアへの利用意向は高いといえる。

### 6-4-2 中学校教師調査の結果から

小学校教師と同じ6種のメディアについて、中学校教師に利用意向を尋ねた結果が表87である。「タブレット端末」(64%)の利用意向が6割を超え、「電子黒板」(54%)の利用意向が5割を超えていた。

小学校と同様にこの結果は表81で示した、

表87 中学校教師が今後の授業で利用したいメディア (n=1,071) (%)

	利用意向あり
タブレット端末	64
電子黒板	54
指導者用のデジタル教科書	42
協働学習で利用できるソフトウェア	37
学習者用のデジタル教科書	33
教師が情報交換できるサイトやSNS	26
いずれか1つ以上の利用意向	93

電子黒板利用（利用環境あり56%、利用24%、非利用32%）と矛盾しているように見える。しかし、中学校でも小学校と同様に、電子黒板が利用できる環境があっても、指導者用のデジタル教科書などの提示するメディアが利用できなかったり、インターネットを十分に利用できるネットワーク環境がなかったり、授業ごとに教師が変わるので、そのたびに電源を入れるなどの準備が必要なことなどの、電子黒板が利用しにくい環境があると考えられる。そのため現状では利用していないが、今後こうした条件が整えば利用したいという考えをもっている教師がいるのではないだろうか。

全体として、6種類のメディアのいずれかの利用意向がある中学校教師は93%と多かった。また、「協働学習で利用できるソフトウェア」（37%）、「学習者用のデジタル教科書」（33%）、「教師が情報交換できるサイトやSNS」（26%）の利用意向も3割程度あり、こうしたサービスへの期待も一定程度みられた。

### 6-4-3 調査結果の比較から

小学校教師、中学校教師とも、新しいメディアの利用意向が9割を超え、メディアの活用に対する積極的な姿勢がみられた。特にタブレット端末と電子黒板の利用意向が多い。

しかし、その一方で、電子黒板の利用状況と利用意向の差からみられるように、単体でなんらかのメディアが入っても、利用できる全体の環境が整っていないと利用に結びつかないことがあると考えられる。

また、「協働学習で利用できるソフトウェア」の利用意向が中学校でやや高いことも注目される。新学習指導要領で重視されている協働学習を授業で実現しようという意向の表れと考え

られる。

## 6-5 小学校教師調査と中学校教師調査の比較から

2014年度実施の小学校教師対象の調査と、2015年度実施の中学校教師対象の調査の結果から、「教室のメディア環境」、「教師の利用しているメディア教材」、「児童・生徒に利用させているメディア機器」、「今後の授業で利用したいメディア」の4項目について、学校種による類似点と相違点を考察した。

全体としてみると、教室のメディア環境や教師の利用メディア、今後利用したいメディアに大きな違いはなかった。これは、小学校も中学校も同様に、教室に一定のメディア環境が整い、メディアを利用した授業が行われていることを表している。

電子黒板のように、現状は利用していないが、今後利用したいという意向が共通してみられるメディアも小学校と中学校で共通しており、メディア環境全体が整えば利用する傾向があるのではないかということも示唆された。

しかし、児童・生徒にメディアを利用させている割合は小学校教師の方が中学校教師より多く、学校種による違いがみられた。また、利用環境は整っているが利用されていないメディアは中学校の方に多くみられた。

これは、学級担任としてさまざまな教科の授業全体をコントロールできる小学校教師と、50分単位の授業で完結しなければならない中学校教師の違いが反映していると考えられる。また全般に中学校の方が時間内に教科書の内容を教師が提示しながら教えることが多いためもあると考えられる。

小学校向けのメディア教材と中学校向けのメディア教材では、こうした授業での利用方法の違いも考えながら設計することが求められると考える。

## 7 授業でのメディア利用の実態

本章では、NHK放送文化研究所の調査結果とは少し離れて、具体的にメディアを利用した授業の事例をみていく。いずれの事例も放送教育・視聴覚教育の研究会などで公開・発表されたもので、筆者が実際に授業を取材したものである。全体としてメディア利用に肯定的な事例であるが、学校のメディア環境とあわせて、教師の経験年数やメディア利用に対する態度、担当している学年や教科などさまざまな要因のもとに、教師のメディア利用が多様化している様子をみていきたい。

まず教室のメディア環境が整いつつある中、どう授業に位置づけていくかを悩みつつも前向きに取り組んでいる典型例として30代女性教師の事例(7-1)を紹介する。教科書や資料集とあわせてタブレット端末などが使える環境で、どんな授業が展開されているかをみる。

次に、長年放送番組は利用してきたが機器操作はそれほど得意ではないという高学年担任の50代女性教師の事例(7-2)と、自身はメディア利用に積極的だが、担当している低学年にあわせた活用をしている30代男性教師の事例をみる。(7-3)。この1つの事例からは、教師が目の前の子どもにあわせながらメディアを活用している様子をみてほしい。

最後に中学校の事例として、校内全体のICT

活用に取り組んできた40代理科教師の事例をみる(7-4)。新しいメディアに対する不安をどう取り除き、学校として取り組んできたかをみていく。

### 7-1 メディアを利用した授業事例① ~小学校(東京都千代田区・30代女性・5年生社会科)

東京都千代田区立番町小学校の山田美紀教諭は民間企業勤務を経て教師となり、6年目を迎える。千代田区の理科の研究会で知り合った先輩の女性教諭が放送教育研究会のメンバーだったことがきっかけで、ここ数年、NHKの放送番組を授業の中で利用するようになってきた。

所属する千代田区立番町小学校は各教室にデジタルテレビ、インターネットに接続された教師用のパソコンがある。また、パソコン室には40台のパソコンがあり、子どもたちは3年生から総合的な学習の時間などで、調べる活動にコンピューターを利用してきた。

2014年度からは学校にタブレット端末も導入され、5年生は、4年生、6年生と共用で、1人1台でも利用することができるようになっている。家でタブレット端末を使える児童の数も多いという。

学校では指導者用のデジタル教科書も利用できる。国語、算数、理科、社会科とそろって、国語と算数の時間はデジタル教科書をよく使っている。NHK for Schoolの番組は理科、社会科を中心に、テーマにあわせて国語でも利用している。第4章で述べた高学年担当教師、30代教師の利用の仕方と同様な利用がみられる。

具体的な授業でのメディア利用の様子について

て、2016年6月から7月にかけて山田教諭が行った、全12時間の社会科の水産業についての授業をみていきたい。

水産業についての授業の最初の2時間は、学習課題をつかむことがねらいである。具体的には、児童がよく行く近所の魚料理店のメニューに記載されている魚の産地から、日本の主な漁港を調べるものである。この段階では教科書と資料集を中心に授業が進められる。

続く6時間の授業では、「日本各地の水産物がどのように食卓に届くのか」という課題のもと、調べる活動が行われた。ここでは、日本近海の漁場がどのようにになっているか、児童が個々に教科書や資料集で確認したり、NHKの小学校5年生向け社会科番組『未来広告ジャパン!』の「水産業が盛んな地域」の回や、NHK for Schoolの動画クリップをデジタルテレビで一斉視聴したりした。こうした活動を経て産地から水産物が届く様子を子どもたちは理解していった。その上で、「漁獲量の減少」、「若い働き手の減少」、「消費量の減少」というような問題が生じていることにも気がついていった。

最後の4時間は、日本の漁業の問題解決の方法を提案しようというものである。『未来広告ジャパン!』という番組は、番組の出演者が広告会社の社員という設定で、毎回番組内で調べたことを30秒のCM形式でまとめるというコーナーがある。このコーナーにならい、子どもたちがグループごとに日本の漁業の課題とその解決方法をポスターにまとめるというものである。この段階になると授業はグループ活動が中心になる。資料集だけでなく、タブレット端末を利用して必要な情報を集めたり、NHK for Schoolの動画を再視聴したりする活動が行われた。そしてその結果をA4サイズの課題解決



「グループで課題解決方法を考える児童」

シートの形で紙にまとめていった。

山田教諭によると、デジタルテレビと教師用のパソコンを使って、NHK for Schoolやインターネットの動画や静止画のコンテンツを子どもたちに見せることは日常的に行っており、子どもたちが共通のイメージをもったり、一定の理解をしたりするのに役立っているとのことである。特に映像を個別に見るのでなく、教室全体で見ることによって周りの反応も確認しながら理解していくことに意味があると考えているという。

タブレット端末の効果的な活用については、まだ試行錯誤の段階であるとのことである。現時点ではインストールされているソフトウェアが少ないこと、テキスト情報を検索するだけならばよいが、子どもたちがそれぞれ一斉に動画を視聴しようとする、インターネット回線の帯域が不足して動画が見られない子がでてしまうなどの課題があるとのことである。資料集だけではわからない情報を調べたり、プレゼンテーション形式でまとめる活動に使ったりすることに可能性はありそうなので、今後少しずつ取り入れていきたいとのことであった。

12時間の授業全体としては、子どもたちがずっと映像を見たり、タブレット端末を操作し

たりということではなく、話し合ったり、教科書や資料集を見たり、紙を使ってまとめたりする活動も多くみられた。新しいメディアが教室に入ってきて、それだけを使うということではなく、授業中必要な時に、必要な機能を使った授業が行われているのである。

## 7-2 メディアを利用した授業事例② ～小学校（山口県下松市・50代女性・6年生家庭科）

山口県下松市立久保小学校の浅村芳枝教諭は教師経験25年を超えるベテランの教員で、家庭科が専門であることもあり、これまで主に高学年を担任してきた。家庭科を中心に社会科や音楽、総合的な学習の時間などでNHKの学校放送番組を長く利用してきた。パソコンやタブレット端末などのICT機器を熱心に使いこなすタイプではないが、授業でICT機器やメディアを利用する効果は感じており、目的にあわせて機器やメディアを利用している。

現在、教室にはデジタルテレビとインターネットにつながった教師用パソコンがある。ただしネットワーク環境はやや不安定で、長い動画を視聴しようとする、時間帯によっては途中で止まってしまうこともあり、録画した教材も並行して利用している。

タブレット端末は学校に2台あるが、グループで1台利用する際には、校長に許可をもらい私物も利用している。また、無線LAN環境はないので、テザリングでインターネットを利用している。

2016年6月に浅村教諭が行った家庭科の授業を中心に、メディア利用の様子をみていく。この日の授業のテーマは玉結び、玉留めである。子どもたちは裁縫セット一式をもってきてお

り、前の時間までに、針に糸を通す経験をしている。

授業ではまず、浅村教諭が自分で縫った布バッグが紹介される。そしてこうしたものを自分で縫う時に、玉結び、玉留めの技術が必要なが説明される。

その上で、具体的な玉結び、玉留めの方法について、NHK for School『カテイカ』（小学5、6年向け家庭科）の該当するシーンをデジタルテレビに映して見せた。

その後、子どもたちは班単位に机をくっつけて、玉結び、玉留めの作業に入るのだが、浅村教諭はここで、番組動画が見られるタブレット端末と、玉結び、玉留めの仕方を静止画像で示したものを用意して、各グループの子どもにとりにくるように告げた。

実際に作業に入るとすぐにできる子もいるが、なかなかコツがつかめない子もいる。グループの中で教え合う様子もみられたが、再度映像で確認するため、タブレット端末で『カテイカ』を視聴する姿が多くみられた。

最終的にほぼクラス全員が玉結びはできるようになり、玉留めについては次の授業でもう少し練習することとなった。

浅村教諭によると、家庭科で子どもたちに身につけてほしい技能は、教師が実演しても子どもたち全員に見せるのが難しいので、デジタルテレビなどの大きい画面で見せられる効果は高いという。さらに、タブレット端末が学校に入ってくると、全員で見る活動とあわせて、グループや個別に映像を見ることもできるので、技術を身につけることが必要な実技教科では効果があるのではないかと。

第4章でみてきたように、年代が高くなると全体にメディア利用は少ない傾向があるが、そ



の一方で、高学年を担当すると、メディアを利用することで効果がある場面が多いと考え利用する教師が多い。家庭科のような実技教科は実際の動きを映像で見られる点でメディア利用の意義はあり、コンテンツが増えることで利用する教師の数も増えるのではないだろうか。

### 7-3 メディアを利用した授業事例③ ～小学校（北海道旭川市・30代男性・1年生道徳）

旭川市立新富小学校の大西陵公教諭は教師になって14年目、北海道北部の旭川市や名寄市で、複式学級の小さな学校などの教師経験を積んだ後、2015年度から旭川市に戻り400名規模の学校で1年生の担任をしている。

大西教諭が1年生の担任をするのは2回目、中学年を担当することが多く、最初は不安もあったという。

メディアの利用には関心があり、日常生活でもタブレット端末やスマートフォンを利用している。北海道北部での勤務が続いていたため、札幌や東京で行われる研究会に参加する機会は少ないが、SNSや教師向けウェブサイトで教育情報や授業の進め方についての情報も収集しているという。

中学年や高学年を担当している際には授業でNHK for Schoolの理科や道徳を中心に、インターネットの教材なども利用してきた。

具体的な大西教諭の授業でのメディア利用の様子について、2016年4月に行われた道徳の授業をみる。授業のねらいは「約束やきまりを守り、みんなが使うものを大切にする」である。機器としてデジタルテレビ、メディア教材としてNHK for Schoolの『ざわざわ森のガンちゃん』（小学1年道徳）を視聴するという授業

プランである。

まず、授業のねらいである約束やきまりについて、子どもたちにふだんの自分たちの活動を振り返らせる活動が行われた。その上で、大西教諭は約束やきまりについて考える道徳番組の視聴をすることを子どもたちに告げた。

ここで、大西教諭は、子どもたちが学校という場で、集団で番組を見ることを丁寧の説明した。家庭で楽しみながら家族や個人で視聴することと違い、番組を見た後に、クラス全員でその内容について考えるということである。すでに『ざわざわ森のガンちゃん』を知っている子どももいたが、家庭で見ることとは意味が異なることを強調した。

視聴した番組は学校の図書室で遊んでいるうちに偶然、本棚を倒して1冊の本をバラバラにしてしまったことを告げられないことをどう考えるかというものであった。

番組視聴後、大西教諭が子どもたちに「どうだった？」と問いかけると、「面白かった」という声とともに、自分たちの学校の図書室と結びつける発言をする子も現れた。子どもたちの発言を促すため、大西教諭は番組の静止画像を黒板に貼ったり、ガンちゃんのぬいぐるみを取り出して子どもに問いかけたりした。そして、本棚を倒したのは偶然でも、図書室で遊ぶのがそもそもよくないのではという声ができるようになっていった。

授業はきまりを守ることの大切さについて再度確認することで終わった。

大西教諭によると、きまりを守る大切さについて、番組で見たことを自分たちに結びつけることをねらったという。また、子どもの映像理解には差があるので、他の子どもの意見も聞きながら自分の考えをまとめるように指導したと

いう。あわせて、映像は消えてしまうので、低学年の子どもが思い出しやすいように、静止画像や番組キャラクターのぬいぐるみなどの具体物を示しながら子どもたちに問いかける工夫をしたという。

低学年のメディア利用にあたっては、子どもの理解能力の差を意識することや、実物との対応をきちんとしていくことが必要である。特に4月の段階の1年生には学校で、みんなで視聴する意味をきちんと説明することが大事である。そうしたことを考えた授業であった。

#### 7-4 メディアを利用した授業事例④ ～中学校（三重県松阪市）

三重県松阪市立三雲中学校は第1章の210頁にある「学びのイノベーション事業」の研究指定校で、「1人1台の情報端末（iPad）」、「全教室に電子黒板」、「校内の無線LAN環境」が整えられている。

ここでは、具体的な授業ではなく、研究主任として、校内のICT機器やメディア利用を進めていった楠本誠教諭（40代、理科）への取材を基に、学校内の体制作りについてみていく。

三雲中学校では生徒1人1台のタブレット端末が導入されるにあたり、当初、校内の多くの教員が不安を抱えていた。楠本教諭がまず行ったのは、そうした不安を可視化して、順次解消していくことであった。

校内の教師対象のアンケート調査から、具体的な不安として次の10項目があげられた<sup>30)</sup>。

1. 「ICT機器がなくても授業はできるので…」
2. 「ICT機器を使ったことがない…」
3. 「毎日、忙しい!」

4. 「ICT機器を活用して学習効果を上げる方法がわからない」
5. 「全員がネットにつながる端末を持つなんて…」
6. 「故障や破損したときはどうするの?」
7. 「タブレットを見続けると視力低下などの影響が…」
8. 「漢字が書けなくなるのでは…」
9. 「授業中に機器トラブル発生。どうしたらいい?」
10. 「Windowsで作った教材はiPadで使えるの?」

こうした不安は、ICT機器が導入される際に多くの教師が実感することであろう。具体的にどう解決していったかは同校の報告書や関連書籍に述べられているが、学校全体で目標を掲げ、1つ1つ解決していったという。

楠本教諭は中学校理科教師になる前に小学校教師を経験しており、そのころからNHKの学校放送番組やインターネットなどのメディアを利用した授業を進めてきた。自身もiPadなどの新しい機器への関心が高く、さまざまな機器やソフトウェアを利用している。

しかし、ICT機器やメディアが学校全体に導入される中、自分の授業だけでなく、学校全体の授業でどのようにこうした機器やメディアが利用できるかを考える中から、校内全体の取り組みを進めていった。

中学校の場合、教師は教科専任なので、他教科の授業に対して発言がしにくい傾向がある。そこをつなぐ手立てとしてICT機器やメディアを利用した。例えば授業実践をまとめる際に教科のねらいだけでなく、ICT活用のねらいをはっきりさせること、そして他教科にも活かせる活用ポイントを共有していくことで、学校全体で利用していく環境を整えていったという。

楠本教諭自身も理科の授業でメディアを利用

するだけでなく、例えば教科を越えて必要な力、情報活用スキルアップに関するNHK学校放送番組『しまった!』の利用を学年で広げること、教科を越えたメディア利用を進めている。

以上、限られた事例ではあるが、学校現場での機器やメディア利用の様子をみてみた。

メディアの利用といっても地域によるメディア環境整備の違いや学校規模、担当する学年、教科によって多様であるといえる。その中で、松阪市立三雲中学校のように学校全体として取り組んでいるところも現れてきている。前述のように、教師は同僚教師からさまざまな情報を得ることが多いので、こうした形でメディア利用が広がっていく可能性が高いと考える。

## 8 まとめ～今後の教育現場でメディアを活かすために～

2014、2015年度に実施した「NHK教師のメディア利用と意識に関する調査」の結果や具体的な授業事例を基に、多様化が進む教室のメディア環境と、その中で教師が日々メディアを選択して利用している様子を述べてきた。最後に、今後の教育現場でメディアを活かしていくためのポイントと課題を、学校現場、教育サービスを提供する団体や企業、そして研究機関や研究者の3つの取り組みに分けてまとめたい。

### 8-1 学校現場での取り組みについて

小学校、中学校の教師個人を対象とした調

査結果からみえてきたことは、それぞれの教師個人がもともと持っている属性、例えば、年齢、専門教科、担当教科、日常生活でのメディア利用といった部分と、外側から与えられる属性、例えば所属校のメディア環境や機器の整備状況、担当する学年とがあいまって、多様なメディア選択がされていることである。小学校教師も、中学校教師も全般に今後のメディア利用意向は高く、必要な機会と環境があれば選択的に利用する教師が多いといえる。

しかし、第6章でみたように、「今後の授業で利用したいメディア」としてあげられた「電子黒板」や「タブレット端末」が、利用できる環境が教室にあっても、利用していない教師が一定数いる。これはどう考えたらよいのであろうか。調査結果に対するフィードバックを整理すると次の3点にまとめられる。

1点目は、そもそも機器の利用の仕方がわからないためである。これまで教室に導入されてきたメディアはラジオにしても、OHPにしても、テレビにしても、スイッチを入れるだけですぐに利用できた。しかし、電子黒板やタブレット端末などの機器はスイッチを入れるだけでなく、さまざまな操作方法を知る必要がある。

2点目は、単独の機器だけがあっても利用が難しいためである。例えば電子黒板だけが導入されても、そこに映すコンテンツがなかったり、児童・生徒用のタブレット端末が複数台用意されても、十分なネットワーク環境がなかったりする状況がみられる。デジタル時代のメディアはインターネットを介して相互につなげることが可能になった利点はあるが、逆に単体では利用しにくいという面もあるのである。

3点目は、新しいメディアを授業のどこに位置づけるのがよいかについての理解があまり広

がっていないためである。新しいメディアを利用したい気持ちはあるが、では具体的に授業のどの場面でどう使うのがよいかについてとまどいがあるようである。

このうち、1点目についてはそもそものメディアの利用方法についての教員研修を行うことでかなり解決すると考える。実際、多くの自治体でICT活用やメディア利用の研修が増えている。2点目については、教室の環境をトータルにデザインして機器を設置することが必要であろう。これは教師個人の問題ではなく、行政の担当者や機器を整備する教育関連企業の役割である。この点についてもさまざまなノウハウが蓄えられ、個々の機器の導入ではなくトータルな教室環境を考えた導入が少しずつ進んでいる。

教師個人にとってもっとも重要なのは3点目であろう。新しいメディアをどう授業に位置づければよいのかということは、授業実践と研究を通して考えていく必要がある。

とはいえ、まったく手がかりがないわけではない。これまでも教室にはラジオ、OHP、テレビといったメディアが取り入れられ、日々の積み重ねの中から、それぞれの特性を活かした位置づけが行われてきた成果がある。放送教育・視聴覚教育のこれまでの研究成果をあらためて確認することが重要である。

これからの教師に求められるのは、より広い視点から教育に関する情報を収集し、よりよい授業を実現していくために、どのようなメディアをどう利用していくとよいのかを絶えず考えることであろう。特に、今後の教育メディアのあり方の大きな方向として児童・生徒が1人1台の情報端末をもつ姿が示されている。こうした姿も見据えた授業デザインが今後さらに大事に

なると考える。

## 8-2 教育サービス提供者の取り組みについて

教育サービスに関して、今回の調査で特に注目したいのは「自作教材」を利用する教師が一定数いることである。自作教材を制作する意図は、目の前の子どもたちに合わせた教材の必要から自分で制作する場合や、自分が授業を進める上で最適なものとして制作する場合もあるが、既存のメディア教材に満足できるものがないからであるとも考えられる。実技教科を中心に、これまでメディア教材があまり制作されてこなかった分野でのニーズや個々の子どもたちの理解に応じたコンテンツの提供というニーズもあるであろう。教育サービスの提供者も多様化に 대응していくことが必要である。

その一方で、さまざまなメディア教材が増え、多様化することは、操作や選択を難しくしているともいえる。教育サービスの提供者に求められるのは、短時間で簡易に操作、選択できる機能であろう。さらに教育関連の企業がさまざまなセミナーや研修会を実施しているが、個々の機器やメディア教材の利用だけでなく、授業全体の中でどのように位置づけどう利用していくかの利用プランもあわせて提供していくことが今後ますます必要になると考える。

教員のICT活用を支援するICT支援員の役割の重要性は第1章で取り上げた文部科学省の各種報告でも指摘されているが、機器の操作方法だけでなく、よりよい授業になるための継続的な支援とは何かを考えることがこれまで以上に求められていると考える。

### 8-3 研究者の取り組みについて

デジタル技術の進歩により、次々と新しい機器やメディアが誕生している。そうした中、教育関連の研究機関や研究者に求められるのは、新しいメディアの特性を明らかにすることもあるが、本質に立ち返って、そもそもメディアの教育利用の意味を考えることである。そのためには最新の情報をみていくだけでなく、俯瞰的にこれまでの教育とメディアの歴史を振り返ることが重要である。

あわせて、多様な教育現場の様子を知るために、日々教師がどのように授業を設計し、それが子どもたちにどのような効果を及ぼしているのかを定期的にみていくことが大事である。

NHK放送文化研究所では1950年以来「学校放送利用状況調査」、そして「教師のメディア利用と意識に関する調査」を全国の学校現場や教師を対象に継続してきたが、こうした調査がますます大事な時代になってきていると考える。

特に今後の視点としては、デジタル化の進展により、学校でも家庭でも同じメディアを利用でき、学習結果のデータも共有できる中、トータル学習のつながりをみていくことであると考え

## おわりに

本稿は2014年度と2015年度の「NHK教師のメディア利用と意識に関する調査」を基に、教室のメディア環境と教師のメディア選択について分析したものである。

それぞれの調査結果はすでに『放送研究と

調査』で報告してきたが、全体状況の紹介にとどまった面があり、属性に注目したより詳しい分析を行いたいという思いを本稿で実現することができた。

こうした思いをもつ契機になったのは、学会や教育委員会、教員研修、教員養成大学の講義などで調査結果へのコメントをいただき、さらに実際の授業を見る中から、多様な教室のメディア利用を読み取っていくには軸が必要であると考えたからである。まず注目したのは小学校の場合は学年であり、中学校の場合には教科である。実際の授業でのメディア利用は学年や教科に応じて選択されていることが多いのは本文に述べたとおりである。

あわせて本稿では教師の年代にも注目した。教育現場のメディア利用は自分自身が受けた教育の経験、日常生活でのメディア利用に関わるだろうと考えたためである。特に、これから先、学校現場を支えていく20代に注目した。こちらでも本文に述べたとおり、パッケージ型メディアからネットワーク型メディアへの転換という、世間の流れと同様な動きがみられた。

子どもたちのメディア利用という観点でみると、幼稚園・保育所、小学校、中学校、高校のどこでも、濃淡はあるがメディアの利用はみられ、子どもたちからすると一連の学習の流れの中にメディアが位置づいている。しかし、それぞれの教師はどうしても自分が今向き合っている授業の中でメディア利用をとらえがちで、そこをつなげられないかという問題意識も本稿を書く中であらためて確認できた。今後は他の校種や家庭でのメディア利用についても調査研究を行い、子どもたちのメディア利用全体と、その中で教育メディアの役割について考えていきたい。

私事になるが、NHKで20年余り、学校放送番組やデジタルコンテンツの制作をしながら、放送教育・視聴覚教育等の研究会に参加し、教師向け研修にも関わってきた。その際に、教育現場の取材とあわせて、当研究所をはじめとするさまざまな学校現場の実態を表すデータを常に参考にしてきた。

調査・研究する立場となり、特に意識してい

るのは、実際に制作を経験した立場を活かしながら、日々学校現場で授業をしている教師や、さまざまな教育サービスの提供者に向けて、意味のある研究を行い記録していくことである。

子どもたちに豊かな学びが生まれる教育メディアの実現に向けて、今後も調査・研究を続けていきたい。

(うじはし ゆうじ)

注：

- 1) NHK放送文化研究所の学校のメディア利用に関する調査の歴史については、小平さち子(2014)「調査60年にみるNHK学校教育向けサービス利用の変容と今後の展望～『学校放送利用状況調査』を中心に～」『NHK放送文化研究所年報2014』第58集、pp91-169を参照のこと。
- 2) 「教育の情報化に関する手引」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm)
- 3) 「学校教育の情報化に関する懇談会」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1292783.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1292783.htm)
- 4) 「教育の情報化ビジョン」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/04/1305484.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/1305484.htm)
- 5) 「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」  
[http://www.kantei.go.jp/jp/headline/seicho\\_senryaku2013\\_plan1.html](http://www.kantei.go.jp/jp/headline/seicho_senryaku2013_plan1.html)
- 6) 「世界最先端IT国家創造宣言」  
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/pdf/20130614/siryou1.pdf>
- 7) 「第2期教育振興基本計画」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail/1336379.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/1336379.htm)
- 8) 「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会」報告書(中間まとめ)の公表について  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/08/1351684.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/1351684.htm)
- 9) 2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1369482.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1369482.htm)
- 10) 「教育の情報化加速化プラン～ICTを活用した「次世代の学校・地域」の創生～」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/28/07/1375100.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/07/1375100.htm)
- 11) 「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/110/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/110/)
- 12) 「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1287351.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1287351.htm)
- 13) 「教育情報化の推進に対応した教育環境の整備充実について(通知)」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/1376787.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1376787.htm)
- 14) 「教員のICT活用指導力チェックリスト」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1296901.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1296901.htm)
- 15) 「学びのイノベーション事業」  
<http://jouhouka.mext.go.jp/school/innovation/>
- 16) 例えばNHK Eテレ『エデュカチオ!～どうする? 教育のデジタル化～』2012.11.30放送など
- 17) 例えば長谷川元洋監修 松阪市立三雲中学校編著『無理なくできる学校のICT活用ータブレット・電子黒板・デジタル教科書などを使ったアクティブ・ラーニングー』学事出版(2016)など
- 18) 「ICTを活用した教育の推進に資する実証事業」  
[http://jouhouka.mext.go.jp/school/ict\\_substantiation/](http://jouhouka.mext.go.jp/school/ict_substantiation/)
- 19) 「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」  
<http://jouhouka.mext.go.jp/school/oen/jichitai.html>

- 20) 文部科学統計要覧平成28年度版による  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/002/002b/1368900.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1368900.htm)
- 21) 番組のストーリーミング動画, 番組内容に関連する1-2分の動画クリップ, 児童・生徒向けの関連教材やゲーム・クイズ, そして, 教師向けの指導案やワークシートなどを総称してNHKデジタル教材とした。
- 22) 2016年度現在は電子黒板教材として公開されている。  
<http://www.nhk.or.jp/school/dcontent/>
- 23) 教育工学会 SIG 活動について  
<https://www.jset.gr.jp/sig/sig04.html>
- 24) 例えば「小学校教師と中学校教師の授業でのメディア利用について」宇治橋祐之, 日本教育メディア学会第一回研究会(2016.7)
- 25) 例えば2016年度全日本教育工学研究協議会(佐賀市)では10件の発表があった。
- 26) 自治体のICT利用についての調査で, インターネット上で公開されているものとしては, 「小学校教員対象ICT機器活用アンケート調査」2007年群馬県藤岡市教育委員会などがある。
- 27) 「学校でのICT活用についての実態調査」  
[http://www2.japet.or.jp/ict-chosa/ict\\_chosa\\_data.pdf](http://www2.japet.or.jp/ict-chosa/ict_chosa_data.pdf)
- 28) 「ICTを活用した学びのあり方」に関する調査  
<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4091>
- 29) 理科担当教師(n=534)の理科室利用の割合は, 2割以下が17%, 2~4割が25%, 4~6割が15%, 6~8割が13%, 8割以上が30%であった。
- 30) 長谷川元洋監修 松阪市立三雲中学校編著『無理なくできる学校のICT活用ータブレット・電子黒板・デジタル教科書などを使ったアクティブ・ラーニングー』学事出版(2016)

※注に掲載のウェブサイトは2016年12月現在。

#### 引用・参考文献:

- 宇治橋祐之・小平さち子(2014)「メディア変革期にみる教師のメディア利用～2013年度「NHK小学校教師のメディア利用に関する調査」から～」『放送研究と調査』2014年6月号
- 宇治橋祐之・小平さち子(2015)「進む多様化と新しいメディアへの期待～2014年度「NHK小学校教師のメディア利用と意識に関する調査」から～」『放送研究と調査』2015年6月号
- 宇治橋祐之(2016)「理科を中心に広がる中学校でのメディア利用～2015年度「NHK中学校教師のメディア利用と意識に関する調査」から～」『放送研究と調査』2016年6月号
- 教育課程研究会(2016)『「アクティブ・ラーニング」を考える』東洋館出版
- 小平さち子(2016)「幼児教育におけるメディアの可能性を考える～2015年度 幼稚園におけるメディア利用と意識に関する調査を中心に～」『放送研究と調査』2016年7月号
- 小平さち子(2014)「調査60年にみるNHK学校教育向けサービス利用の変容と今後の展望～『学校放送利用状況調査』を中心に～」『NHK放送文化研究所年報2014』第58集, pp.91-169
- 長谷川元洋監修 松阪市立三雲中学校編著『無理なくできる学校のICT活用ータブレット・電子黒板・デジタル教科書などを使ったアクティブ・ラーニングー』学事出版(2016)